

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 6

中原遺跡

(本編)

1999年3月

国地方建設局
教育委員会

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 6

中原遺跡

(本編)

1999年3月

建設省中国地方建設局
島根県教育委員会

原色図版1



中原遺跡全景



横穴式石室全景

原色図版2



横穴式石室近景



大鍛冶場跡全景

序

建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所においては、『現代のおろち退治』といわれる斐伊川・神戸川両水系を一体とした治水計画の一環として、斐伊川の上流に尾原ダム、神戸川の上流に志津見ダムを建設し、下流域の洪水調節及び水道用水の確保等を目的とした多目的ダム建設事業を進めています。

ダム事業地内の埋蔵文化財については、文化財保護の趣旨に則り関係機関と協議しながら必要な調査を実施し、記録の保存につとめています。

志津見ダム建設事業においても、島根県教育委員会と協議し、頓原町教育委員会の協力のもとに平成元年度より発掘調査を実施しているところです。

本報告書は、平成8年度に調査した「中原遺跡」の調査結果をまとめたものです。この遺跡では、横穴式石室をもつ古墳や江戸時代の大鐵冶場跡など貴重な成果があがっており、本書が郷土埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く利用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査及び本書の作成にあたり、ご指導御協力頂きました島根県教育委員会ならびに関係各位に対し謝意を表します。

平成11年3月

建設省中国地方建設局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

所長 三宅 且仁

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け1989（平成元）年度から志津見ダム建設予定地の埋蔵文化財発掘調査を行っています。

志津見ダムが建設される神戸川は、古くは陰陽を結ぶ交通路としての役割を果たし、山陽地域の要素をも取り込んだ特色ある文化を育みました。また、この地域は、古代から近世・近代まで、豊富に採取できる砂鉄や木炭を使った銅製鉄が、たいへん盛んなところでもありました。

本書で報告する中原遺跡は、1996（平成8）年度に発掘調査を実施したもので、飯石郡では数少ない横穴式石室を内蔵した古墳や、近世高殿炉で生産された銑鉄などを鉄素材に加工する大鍛冶場跡などが確認されました。これらは、この地に暮らした人々が周辺の様々な文化を取り入れながら、地域の素材を活かして、逞しく活動していたことの証であり、今回の調査成果が地域の歴史を考える上で、一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査及び本書の作成につきましては、地元頓原町の皆様方をはじめ、各方面からご協力・ご指導を賜りました。衷心より感謝申し上げます。

1999（平成11）年3月

島根県教育委員会

教育長 江 口 博 晴

例　　言

1. 本書は島根県教育委員会が建設省中国地方建設局より委託を受けて、1996（平成8）年度及び1998（平成10）年度に実施した中原遺跡発掘調査と遺物整理の報告書である。

2. 発掘調査及び報告書の作成は次の組織で行った。

1996（平成8）年度

事務局 勝部 昭（文化財課長）、森山洋光（文化財課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財センター長）、古崎藏治（同課長補佐）、鳥谷芳雄（同調査5係長）、渋谷昌宏（同主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 角田徳幸（調査5係文化財保護主事）、田原淳史（同主事）、岩崎裕介（同臨時職員）

調査指導 宍澤義功（たたら研究会委員）、大沢正己（たたら研究会委員）、杉原清一（島根県文化財保護指導委員）、時枝克安（島根大学総合理工学部教授）、古瀬清秀（広島大学文学部助教授）、松井整司（島根大学汽水域研究センター客員研究員）、渡辺貞幸（島根大学法学部教授）

1998（平成10）年度

事務局 勝部 昭（文化財課長）、島地徳郎（文化財課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財センター長）、秋山 実（同課長補佐）、鳥谷芳雄（同調査5係長）、川崎 崇（同主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 角田徳幸（調査3係文化財保護主事）

調査指導 宍澤義功（たたら研究会委員）、大沢正己（たたら研究会委員）

3. 調査に関連して自然科学分野の分析などを、次の機関・方々に依頼した。

¹⁴C年代測定：㈱九州環境管理協会、考古地磁気年代測定：時枝克安（島根大学総合理工学部教授）・成 亨美（富山大学理学部大学院）、大銀冶関連遺物金属学分析：㈱九州テクノリサーチ、木材樹種同定：バリノサーヴェイ株式会社、獸骨同定：井上貴央（鳥取大学医学部教授）

4. 調査及び報告書作成にご協力いただいた方々は次のとおりである。

今田昭二・田中迪亮・山崎順子・石飛幹祐（頃原町教育委員会）、山崎 修（加茂町教育委員会）、脇坂光彦・松井和幸・岩井重道・沖 澄明（広島県埋蔵文化財センター）、稻垣寿彦（庄原市教育委員会）、徳岡隆夫・沢田順弘（島根大学総合理工学部）、柴田喜太郎（考古地質学研究所）、三宅博士（和鋼博物館）、関 雅之（日本考古学協会員）

5. 遺物の実測・整理は主として角田が行い、梅木政志、小田川悠美、三浦登久子、山下千都子、藤原千恵子、馬庭志津子、加藤往子、若佐裕子、山根るみ子、吉岡朋子の協力を得た。

6. 本書のうち、大銀冶関連遺物資料観察表は宍澤義功氏、石器石材は徳岡隆夫・沢田順弘両氏、

横穴式石室石材については柴田喜太郎氏の協力を得た。、

7. 掲図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。

8. 本書に掲載した地形図のうち、遺跡分布図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1、及び5万分の1。その他は建設省中国地方建設局斐伊川神戸川総合開発工事事務所が作成したものを使用した。

また、遺構図の一部は、株式会社ワールドに委託、作成したものを使用している。

9. 出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。

10. 本文の執筆・編集及び写真撮影は角田が行った。

目 次

| | |
|------------------------|----|
| 第1章 調査に至る経緯と経過 | |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査経過 | 1 |
| 第2章 位置と環境 | |
| 第1節 地理的環境 | 2 |
| 第2節 歴史的環境 | 2 |
| 第3章 調査の概要 | |
| 第1節 調査区の配置 | 5 |
| 第2節 造構の概要 | 6 |
| 第4章 縄文時代の造構・遺物 | |
| 第1節 層序 | 9 |
| 第2節 造構 | 9 |
| 第3節 遺物 | 11 |
| 第5章 古墳 | |
| 第1節 調査方法 | 13 |
| 第2節 墳丘 | 13 |
| 第3節 横穴式石室 | 17 |
| 第4節 出土遺物 | 22 |
| 第6章 歴史時代の造構・遺物 | |
| 第1節 造構の配置状況 | 24 |
| 第2節 掘立柱建物跡 | |
| 1, 1号掘立柱建物跡 | 24 |
| 2, 2号掘立柱建物跡 (大鍛冶場跡) | |
| (1) 建物跡 | 32 |
| (2) 1号炉 | 37 |
| (3) 2・3号炉 | 38 |
| (4) 4号炉 | 39 |
| (5) 5号炉 | 39 |
| (6) 大鍛冶場関連遺物 | 40 |
| 3, 3号掘立柱建物跡 | 60 |
| 4, 4号掘立柱建物跡 | 61 |
| 5, 5号掘立柱建物跡 | 62 |
| 第3節 その他の造構 | |
| 1, 3～8号土坑・1号集石遺構 | 63 |
| 2, 9号土坑 | 65 |

| | |
|---------------|----|
| 3, 10号土坑 | 65 |
| 4, 11号土坑 | 65 |
| 5, 12号土坑 | 65 |
| 6, 13号土坑 | 66 |
| 7, 14~17号土坑 | 66 |
| 6, 2号集石遺構 | 68 |
| 7, 3号集石遺構 | 69 |
| 8, 石畳遺構 | 70 |
| 9, 3~6号焼土面 | 71 |
| 第7章 遺構に伴わない遺物 | |
| 第1節 縄文土器 | 72 |
| 第2節 石器 | 74 |
| 第3節 弥生土器 | 74 |
| 第4節 その他の遺物 | 76 |
| 第8章 まとめ | |
| 第1節 古墳 | |
| 1, 墳丘 | 83 |
| 2, 横穴式石室 | 84 |
| 3, 時期 | 85 |
| 4, 志々地域の後期古墳 | 86 |
| 第2節 大鐵冶場跡 | |
| 1, 構造 | 88 |
| 2, 機能 | 89 |
| 3, 時期 | 89 |
| 註 | 92 |

挿 図 目 次

| | |
|------------------------------------|-------|
| 第1図 中原遺跡と周辺の遺跡 | 3 |
| 第2図 中原遺跡と周辺の地形 | 5 |
| 第3図 調査用方眼設定図 | 6 |
| 第4図 遺構配置図 | 7~8 |
| 第5図 調査区北西部試掘調査区土層実測図 | 9 |
| 第6図 1号上坑遺構実測図 | 9 |
| 第7図 調査区北西部遺構実測図 | 10 |
| 第8図 調査区北西部遺物出土状況実測図 | 11 |
| 第9図 調査区北西部出土遺物実測図 | 12 |
| 第10図 古墳調査前地形測量図 | 14 |
| 第11図 古墳周辺土層実測図 | 15~16 |
| 第12図 石室擾乱部出土陶器実測図 | 17 |
| 第13図 石室前庭部2号土坑と出土陶器実測図 | 17 |
| 第14図 橫穴式石室天井石検出状況実測図1 | 18 |
| 第15図 橫穴式石室内土層堆積状況実測図 | 19 |
| 第16図 橫穴式石室天井石検出状況実測図2 | 20 |
| 第17図 橫穴式石室実測図 | 21 |
| 第18図 石室南側遺物出土状況実測図 | 22 |
| 第19図 石室入口遺物出土状況実測図 | 22 |
| 第20図 古墳出土遺物実測図 | 23 |
| 第21図 1~3号掘立柱建物跡周辺遺構配置図 | 25~26 |
| 第22図 4~5号掘立柱建物跡、1~11号土坑周辺 遺構配置図 | 27~28 |
| 第23図 1号掘立柱建物跡遺構実測図 | 29 |
| 第24図 1号掘立柱建物跡柱根実測図 | 30 |
| 第25図 1号掘立柱建物跡焼土を含む面遺構実測図 | 31 |
| 第26図 柄杓状遺構実測図 | 31 |
| 第27図 2号掘立柱建物跡2蓋板遺構実測図 | 32 |
| 第28図 2号掘立柱建物跡（大銀冶場跡）遺構実測図 | 33~34 |
| 第29図 剣溝蓋板実測図 | 35 |
| 第30図 敷板遺構及び周辺遺構実測図 | 36 |
| 第31図 1・2号掘立柱建物跡出土陶器実測図 | 36 |
| 1・2:1号掘立柱建物跡、3~5:2号 掘立柱建物跡 | 36 |
| 第32図 1号炉遺構実測図 | 37 |
| 第33図 1号炉南側土坑遺構実測図 | 38 |
| 第34図 2・3号炉遺構実測図 | 39 |
| 第35図 4号炉遺構実測図 | 40 |
| 第36図 鉄砧抜取状遺構実測図 | 40 |
| 第37図 大銀冶場跡1・2号炉出土鉄滓実測図 | 42 |
| 第38図 大銀冶場跡4号炉・側溝周辺出土遺物実測図 | 43 |
| 第39図 鉄滓捨て場他山土遺物実測図 | 44 |
| 第40図 人銀冶場跡2分炉・側溝周辺出土遺物実測図 | 45 |
| 第41図 大銀冶場跡鉄滓捨て場他出土遺物実測図 | 46 |
| 第42図 大銀冶場跡山土羽口実測図 | 47 |
| 第43図 大銀冶場跡出土粗鉄錠実測図 | 48 |
| 第44図 大銀冶場関連遺物構成図 | 49~50 |
| 第45図 大銀冶場跡鐵造剝片・粒状滓分布図(1) | 53 |
| 第46図 人銀冶場跡鐵造剝片・粒状滓分布図(2) | 54 |
| 第47図 大銀冶場跡鐵造剝片大きさ別分布図(1) | 55 |
| 第48図 大銀冶場跡鐵造剝片大きさ別分布図(2) | 56 |
| 第49図 人銀冶場跡粒状滓大きさ別分布図(1) | 57 |
| 第50図 人銀冶場跡粒状滓大きさ別分布図(2) | 58 |
| 第51図 大銀冶場跡鐵滓及びその他微小遺物分布図 | 59 |
| 第52図 3号掘立柱建物跡遺構実測図 | 60 |
| 第53図 4号掘立柱建物跡遺構実測図 | 61 |
| 第54図 5号掘立柱建物跡遺構実測図 | 62 |
| 第55図 1号焼土面遺構実測図 | 63 |
| 第56図 1号集石遺構・3~10号土坑遺構実測図 | 64 |
| 第57図 1号集石遺構出土遺物実測図 | 64 |
| 第58図 11号土坑遺構実測図 | 65 |
| 第59図 12号土坑遺構実測図 | 65 |
| 第60図 13号土坑遺構実測図 | 66 |
| 第61図 14~17号土坑遺構実測図1 | 67 |
| 第62図 14~17号土坑遺構実測図2 | 67 |
| 第63図 2号集石遺構出土陶器実測図 | 68 |
| 第64図 2号集石遺構実測図 | 68 |
| 第65図 3号集石遺構実測図 | 69 |
| 第66図 石圓遺構実測図 | 70 |
| 第67図 3~6号焼土面遺物出土状況実測図 | 71 |
| 第68図 3~6号焼土面出土遺物実測図 | 71 |
| 第69図 織文土器実測図 | 72 |
| 第70図 石器実測図 | 73 |
| 第71図 弦生土器実測図 | 75 |
| 第72図 土師器実測図 | 77 |
| 第73図 鉄器・砥石他実測図 | 78 |
| 第74図 塗丘壇定復原図 | 83 |
| 第75図 古墳築造工程模式図 | 84 |
| 第76図 橫穴式石室復原図 | 85 |
| 第77図 志々地区の後期古墳 | 87 |
| 第78図 人銀冶場跡遺構変遷図 | 88 |

表 目 次

| | | | |
|--------------------------------------|----|-----------------------|----|
| 第1表 大銀治場跡出土粒状鉄、鐵造剣片ほか地點別 計測値一覧表 1 | 51 | 第4表 土器觀察表 2 | 80 |
| 第2表 大銀治場跡出土粒状鉄、鐵造剣片ほか地點別 計測値一覧表 2 | 52 | 第5表 土器觀察表 3 | 81 |
| 第3表 土器觀察表 1 | 79 | 第6表 石器觀察表 | 82 |
| | | 第7表 人銀治場跡主要要素一覧表 | 90 |
| | | 第8表 発掘調査された近世大銀治場跡一覧表 | 91 |

図 版 目 次

| | | | |
|-----------------------------|--|--------------------------------------|--|
| 図版1-1. 中原遺跡調査前全景（上空から） | | 図版18-1. 石室埋土縫断土層（前庭部側：南東から） | |
| 図版2-1. 調査前全景（北上空から） | | 2. 石室埋土縫断土層（玄室側：東から） | |
| 2. 調査前近景（北東から） | | 図版19-1. 石室中央部横断土層（北から） | |
| 図版3-1. 調査前近景（古墳付近：北東から） | | 2. 石室中央部床面縫断土層（南から） | |
| 2. 調査後近景（北東から） | | 図版20-1. 石室前庭部須恵器出土状況（東から） | |
| 図版4-1. 調査後全景（南東上空から） | | 2. 石室前庭部須恵器出土状況（東から） | |
| 2. 調査後全景（東上空から） | | 図版21-1. 石室西側埴丘内須恵器出土状況（東から） | |
| 図版5-1. 調査区北西部試掘坑土層（西から） | | 2. 石室西側埴丘2号土坑検出状況（南から） | |
| 2. 調査区北内部近景（北東から） | | 図版22-1. 石室内完掘状況（東から） | |
| 図版6-1. 調査区北西部西側造構検出状況（北から） | | 2. 石室内完掘状況（南から） | |
| 2. 調査区北西部西側造構完掘状況（北から） | | 図版23-1. 石室前庭部（南から） | |
| 図版7-1. 調査区北西部東側造構検出状況（北から） | | 2. 石室西側壁（南東から） | |
| 2. 調査区北西部東側造構完掘状況（北から） | | 図版24-1. 石室奥壁（南から） | |
| 図版8-1. 調査区北西部東側造物山土状況（南東から） | | 2. 石室玄門溝（北から） | |
| 2. 1号土坑遺物出土状況（北東から） | | 図版25-1. 1号掘立柱建物跡検出状況（南東から） | |
| 図版9-1. 古墳調査前近景（東から） | | 2. 1号掘立柱建物跡完掘状況（南東から） | |
| 2. 古墳調査前近景（南から） | | 図版26-1. 1号掘立柱建物跡P.1柱根検出状況 (南東から) | |
| 図版10-1. 墳丘a-b断面石室前面土層（東から） | | 図版26-2. 1号掘立柱建物跡P.2柱根検出状況 (南東から) | |
| 2. 墳丘a-b断面石室裏壁付近土層（東から） | | 図版27-1. 1号掘立柱建物跡焼土を含む面縫断土層 (南東から) | |
| 図版11-1. 墳丘a-b断面石室前面土層（東から） | | 2. 1号掘立柱建物跡焼土を含む面遺物検出状況 (南東から) | |
| 2. 墳丘e-f断面土層（南から） | | 図版28-1. 潛橋状造構（東から） | |
| 図版12-1. 墳丘c-d断面石室西側土層（南東から） | | 2. 潜橋状造構埋土堆積状況（南から） | |
| 2. 墳丘c-d断面石室西側壁付近土層（南から） | | 図版29-1. 潜橋状造構石積横断面（東から） | |
| 図版13-1. 石室調査前近景（東から） | | 2. 潜橋状造構底板検出状況（東から） | |
| 2. 石室調査前近景（南から） | | 図版30-1. 2号掘立柱建物跡（大銀治場跡）近景 (南東から) | |
| 図版14-1. 石室上土砂除去後近景（東から） | | 2. 2号掘立柱建物跡（大銀治場跡）検出状況 (東から) | |
| 2. 石室上土砂除去後近景（南から） | | 図版31-1. 2号掘立柱建物跡（大銀治場跡）1～3号が | |
| 図版15-1. 石室上土礫除去後（東から） | | | |
| 2. 石室上土礫除去後（南から） | | | |
| 図版16-1. 石室内転落天井石除去後（東から） | | | |
| 2. 石室内転落天井石除去後（南から） | | | |
| 図版17-1. 石室前面礫群検出状況（南から） | | | |
| 2. 石室前面礫群斬割り状況（東から） | | | |

- 検出状況（東から）
- 図版31-2. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）1～3号炉
検出状況（北から）
- 図版32-1. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）1～3号炉
検出状況（南から）
2. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）1～5号炉
検山状況（東から）
- 図版33 1. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）側溝蓋板
(東から)
2. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）側溝蓋板検
出状況（北から）
- 図版34-1. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）敷板遺構
(東から)
2. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）敷板遺構付
近杭（南から）
- 図版35-1. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）P.1柱根
検出状況（東から）
2. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）粘土面横断
土層（北から）
- 図版36-1. 1号炉検出状況（東から）
2. 1号炉縫断土層（東から）
- 図版37-1. 1号炉横断土層（北から）
2. 1号炉横断面（北から）
- 図版38-1. 1号炉（北から）
2. 1号炉（東から）
- 図版39-1. 1号炉完掘状況（北から）
2. 1号炉完掘状況（西から）
- 図版40-1. 1号炉横断上層と仰切床（東から）
- 2. 1号炉北端部埋石と掘り方（北から）
- 図版41-1. 1号炉南側土坑検出状況（東から）
2. 1号炉南側土坑上層横断面（南から）
- 図版42-1. 2号炉縫断土層（東から）
2. 2・3号炉横断土層（北から）
- 図版43-1. 2号炉（東から）
2. 2号炉（南から）
- 図版44-1. 2号炉底浮去除後（東から）
2. 2号炉底浮去除後（北から）
- 図版45-1. 3号炉（東から）
2. 3号炉完掘状況（東から）
- 図版46-1. 4号炉検出状況（南から）
2. 4号炉縫断土層（北から）
- 図版47-1. 4号炉（北から）
2. 4号炉完掘状況（北から）
- 図版48-1. 鉄砧抜取状遺構（北から）
2. 鉄滓捨て場（北東から）
- 図版49-1. 3号掘立柱建物跡検出状況（東から）
2. 3号掘立柱建物跡（東から）
- 図版50-1. 4号掘立柱建物跡検出状況（東から）
2. 4号掘立柱建物跡（東から）
- 図版51-1. 4号掘立柱建物跡P.1柱根（東から）
2. 4号掘立柱建物跡P.2柱根（東から）
3. 4号掘立柱建物跡P.5柱根（東から）
4. 4号掘立柱建物跡P.6柱根（東から）
- 図版53 1. 5号掘立柱建物跡検出状況（東から）
2. 5号掘立柱建物跡（東から）
- 図版54-1. 5号掘立柱建物跡P.1土層堆積状況
(北から)
2. 5号掘立柱建物跡P.7上層堆積状況
(西から)
- 図版55-1. 1号焼土面検出状況（北から）
2. 1号焼土面横断面（北から）
- 図版56-1. 1号集石遺構、3～6・8～10号土坑
検出状況（東から）
2. 1号集石遺構、3～6・8～10号土坑
(東から)
- 図版57 1. 1号集石遺構（東から）
2. 3号土坑（東から）
- 図版58-1. 4号土坑（東から）
2. 5号土坑（東から）
- 図版59-1. 6号土坑（東から）
2. 8号土坑（東から）
- 図版60-1. 9号土坑（東から）
2. 10号土坑（東から）
- 図版61-1. 11号土坑（南から）
2. 11号土坑横断面（南から）
- 図版62-1. 12号土坑土層堆積状況（南から）
2. 12号土坑遺物他出土状況（南東から）
- 図版63-1. 12号土坑（南東から）
2. 12号土坑横断面（南から）
- 図版64-1. 13号土坑（東から）
2. 13号土坑横断面（東から）
- 図版65-1. 14～17号土坑（北西から）
2. 14～17号土坑完掘状況（北西から）
- 図版66-1. 15号土坑歯骨検出状況（東から）
2. 17号土坑歯骨検山状況（南から）
- 図版67-1. 2号集石遺構（東から）
2. 2号集石遺構（北から）
- 図版68-1. 3号集石遺構（南から）
2. 3号集石遺構横断面（東から）
- 図版69-1. 右圓遺構検出状況（東から）

2. 石圓遺構（西から）
- 図版70-1. 石圓遺構土層堆積状況（東から）
2. 石圓遺構検出状況（東から）
- 図版71-1. 12号土坑・石圓遺構付近（北から）
2. 3号・4号焼土面検出状況（東から）
- 図版72-1. 調査区北東部調査状況（東から）
- 2. 热残留破壊試料採取状況（大鐵冶場跡 2号炉）
- 図版73-1. 調査区北西部出土縄文土器及び石器
- 図版74-1. 橫穴式石室複数部他出土陶磁器
- 図版75-1. 古墳出土遺物
- 図版76-1. 1・2号掘立柱建物跡出土陶磁器
2. 2号掘立柱建物跡（大鐵冶場跡）出土羽口
3. 1号集石遺構出土遺物
- 図版77-1. 2号集石遺構出土陶磁器
2. 3～6号燒土面出土遺物
- 図版78-1. 遺構に伴わない縄文土器(1)
2. 遺構に伴わない縄文土器(2)
- 図版79-1. 遺構に伴わない縄文土器(3)
2. 遺構に伴わない石器(1)
- 図版80-1. 遺構に伴わない石器(2)
2. 遺構に伴わない弥生土器(1)
- 図版81-1. 遺構に伴わない弥生土器(2)
2. 遺構に伴わない土師器他
- 図版82-1. 遺構に伴わない弥生土器・土師器
- 図版83-1. 遺構に伴わない鉄器・砥石他

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

志津見ダムは、斐伊川・神戸川治水計画の一環として建設される洪水調節用のダムである。湛水地域は、島根県飯石郡頼原町大字角井、志津見、八神地域にまたがり、面積は230haに及ぶ。これまでの発掘調査及び分布調査によれば、ダム湛水域及び生活再建地や道路付替工事など関連事業地内では31ヶ所の遺跡が確認されており、18ヶ所の調査が終了している。

中原遺跡は、飯石郡頼原町大字八神1560-2ほかに所在する周知の遺跡で、関連事業である町道谷川北線建設予定地及び、湛水域に含まれている。調査は事業に先立って、遺跡の全域にあたる6400m²について行った。

第2節 調査経過

発掘調査は、1996（平成6）年7月15日に着手し、途中積雪など困難な条件はあったが、同年12月25日に終了した。遺跡は比較的広い河岸段丘上に立地していたことから、当初はこの段丘全体に広がり、面積は1万m²以上、調査期間も複数年に亘ることが予想されていた。しかし、本調査に先立って遺跡範囲の確認調査を行ったところ、その範囲は6400m²しかなく、遺構の分布も疎らであることが明らかになった。神戸川に近く、低い段丘という立地のためか安定した集落などは営まれなかったようである。

検出された遺構は、周知の遺跡であった中原古墳の他には、縄文時代の土坑と江戸時代の大銀冶場跡を含む掘立柱建物跡群5棟が丘陵沿いで確認されたに留まり、遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・近世陶磁器などがあるが、出土量は僅かであった。このうち、大銀冶場跡は左下場・本場と呼ばれる銀冶が2基を営む江戸時代後半の典型的なもので、これらの機能や銀冶原料、製品などについても検討できるよう橢型銀冶場や精錬銀冶場など大銀冶関連遺物を全量取上げる調査を行った。また、板屋Ⅲ遺跡の調査以来、三瓶山火山灰の下に堆積する黒色土中にも縄文時代の遺構・遺物があることが明らかになっており、一部について下層の確認調査を行ったが、遺物は検出されず、比較的短期間のうちに調査を終えることができた。

ところで、中原古墳については、発掘前に草刈りをした段階で、横穴式石室の天井石が露出し、町指定史跡比丘尼塚古墳に匹敵する規模の石室が存在することが明らかになっていた。当該地点は町道谷川北線の予定地にあたり計画変更によって古墳保存の可能性も考えられたことから、石室内部の調査を行う前に建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所とその取扱について協議を始め、発掘調査を行った後に結論を出すこととなった。

古墳は調査してみると、江戸時代末頃に周囲が大きく削り取られ、横穴式石室内部も既に荒されていたことが判明し、出土遺物も埴丘や羨道部などに僅かに取り残された須恵器がある程度であった。しかし、飯石郡内では横穴式石室はあまり知られておらず、比丘尼塚古墳とともに拠点的な集落である森遺跡を背景にした村落首長墓という歴史的な位置づけは変わらないことから引き続き保存について協議を進めた。その結果、町道谷川北線は古墳の東側を回るように計画変更されることで合意し、そのまま保存・整備されることが決定した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中原遺跡は、飯石郡頓原町大字八神1560-2ほかに所在する。八神地区は、現在では頓原町に属しているが、1889(明治22)年の町村制施行時には飯石郡志々村とされたところで、1957(昭和32)年に旧頓原町と合併して、頓原町に編入され現在に至っている。

遺跡は、神戸川が西へ流れを変える地点の左岸に形成された小規模な河岸段丘上に位置している。付近の地形^①は、起伏量200m以下の小起伏山地と200~400mの中起伏山地が連なっているが、その間に神戸川が縫うように流れることで、谷底氾濫原や砂礫段丘が形成されている。八神地区は周辺では比較的広い砂礫段丘が広がる地域であるが、中原遺跡はその中でも北寄りにやや離れた段丘に所在している。

周辺の表層地質は、古第三紀～白亜紀の閃綠岩～花崗岩複合岩質岩石と、後期中生代～古第一紀安山岩質岩石である。これより南側の飯石郡頓原町大字獅子から赤来町大字来島方面には、古第二紀～白亜紀の花崗岩質岩石が広く分布している。

また、中原遺跡は三瓶山の東約5kmに位置していることから、周辺地域と同様に火山灰や火砕流など三瓶山由來の堆積物や黒ボク土壌が見られる。その層序は基本的には上層より第1黒色上層～第1ハイカ層(三瓶太平山降下火山灰)～第2黒色土層～第2ハイカ層(三瓶角井降下火山灰)～第3黒色上層(浮布黒色土)～瓶浮布降下火山灰層となっている。このうち、年代が分かるものは、いずれも^②C年代で第1ハイカ層が3530±100B.P.、～3710±130B.P.、第2ハイカ層が4780±100B.P.と測定されており、第3黒色土層の上層部には6300B.P.のアカホヤ降灰層準があることも既に判明している。^③

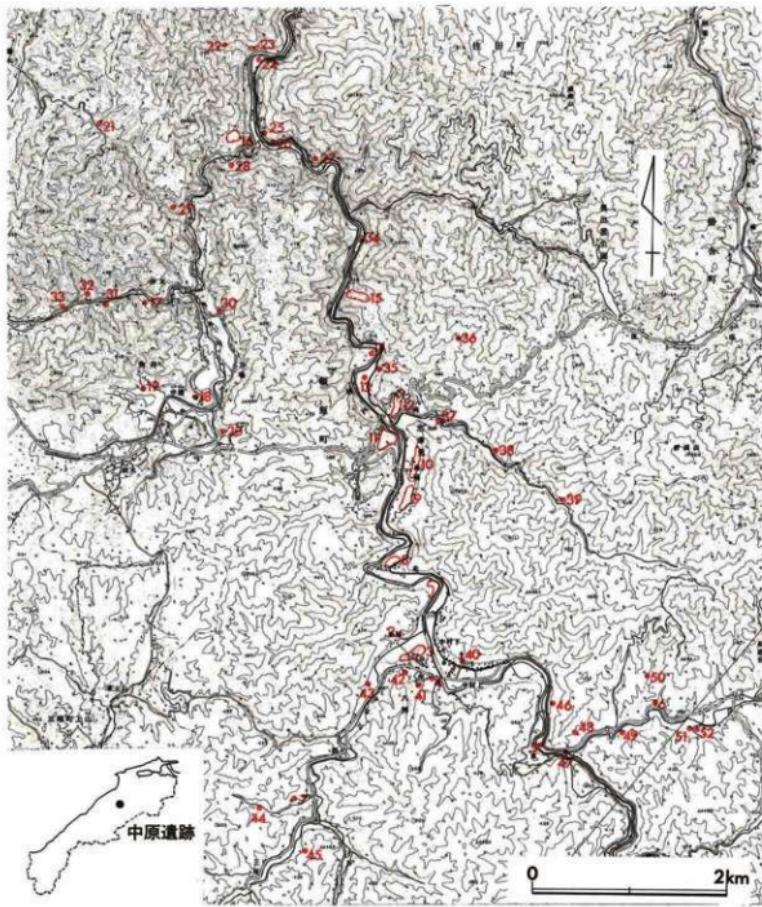
第2節 歴史的環境

神戸川中・上流域の遺跡は山間に開けた砂礫段丘など僅かな平坦面を利用し、時期的にはかなり長期にわたって営まれる複合遺跡が多いのが特色である。これは山がちであるため利用できる平坦地が少ないと、地理的制約によるところが大きい。

中原遺跡の周辺地域における遺跡の初見は、板屋Ⅲ遺跡^④である。三瓶山の火山灰を挟みながら、縄文時代草創期末から晩期まで、ほぼ間断なく層位的に遺構・遺物が確認されており、第3黒色土層下層が草創期末～早期末、上層が前期前葉から後葉、第2黒色土層が前期末から後期中葉、第1黒色上層が後期中葉から晩期以降の遺構面や遺物包含層であることが明らかになっている。

その他の縄文時代遺跡としては、五明田遺跡^⑤、森遺跡^⑥、下山遺跡^⑦、神原Ⅱ遺跡^⑧などがあげられる。このうち、五明田遺跡は縄文時代後期前葉の磨削縄文土器が良好な状態出土したことで知られた遺跡である。今年度の調査によれば、第2黒色土層から縄文時代中期中葉から後期中葉の遺物とともに堅穴住居跡群が確認され、遺構の遺存状態も良いことが確認されている。また、下山遺跡では縄文時代早期以降の遺構・遺物が層位的に検出されており、立石を作う配石遺構群など墓域とみられる遺構や東日本系の屈折像土偶^⑨が出土している点が注目される。

弥生時代の遺跡は、縄文時代に集落がある砂礫段丘に営まれているものが多い。このうち、前期



第1図 中原遺跡と周辺の遺跡

1. 中原遺跡
2. 谷川遺跡
3. 森遺跡群
4. 五明田遺跡
5. 比丘尼塚古墳
6. 竹谷遺跡
7. 三代木遺跡
8. 小丸遺跡
9. 神原I遺跡
10. 神原II遺跡
11. 門遺跡
12. 板屋遺跡群
13. 徳原遺跡
14. 後平遺跡
15. 貝谷遺跡
16. 下山遺跡
17. 伊比谷遺跡
18. 角井遺跡
19. 堂ノ原横穴墓
20. 杉戸遺跡
21. 獅子谷遺跡
22. 戸井谷遺跡
23. 戸井谷尻遺跡
24. 長老畠遺跡
25. 犬渕山毛宅前鉱跡
26. 犬渕カナクソ烟鉱跡
27. 大槻鉱跡
28. 権現上鉱跡
29. 獅子谷遺跡(大鞍冶場跡)
30. 向原鉱跡
31. 伊比谷1号鉱跡
32. 伊比谷2号鉱跡
33. 伊比谷3号鉱跡
34. 丸山鉱跡
35. 徳原鉱跡
36. 板屋奥鉱跡
37. 弓谷尻鉱跡
38. 弓谷鉱跡
39. 弓谷奥鉱跡
40. 広雲寺鉱跡
41. 段原鍛冶跡
42. 土戸ノ上鉱跡
43. 坂根鍛冶跡
44. 三代木鉱跡
45. 大裁鉱跡
46. 鉛原鉱跡
47. 落合精錬所跡
48. 獅子尻鉱跡
49. 獅子古鉱跡
50. 梅ヶ迫谷鉱跡
51. 市場鉱跡
52. 仁井屋鉱跡

まで遡るのは森遺跡、五明田遺跡、板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡で、板屋Ⅲ遺跡では前期後半の配石遺構群が確認されている。中期の遺跡は拠点的な集落である森遺跡では前葉以降継続しているが、多くは後葉が中心で、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡⁶、神原遺跡⁷などがある。この時期には志津見地域では流水文のある大形壺が見られるのが一つの特色で、広島県北部を中心と展開する塙町式系土器も分布している。後期の遺跡は、中期以降引き続き営まれているものが多く、良好な状態で数多くの竪穴住居跡が検出されている他、森遺跡では管玉を副葬したものを含む木棺墓群が確認されている。

古墳時代の遺跡は、前期初頭に一部弥生時代後期から営まれる集落がかかるものがあるが、前期・中期ともあまり目立った遺跡は確認されておらず、下山遺跡で中期の竪穴住居跡が見られる程度である。後期後半になると森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、神原遺跡、小丸遺跡⁸など再び集落遺跡が顕著に見られ、方形の竪穴住居跡の壁沿いに作り付けの竈を設けたものが営まれている。また、横穴式石室を内蔵した古墳や横穴墓も各地域で造られるようになり、八神地域では中原古墳・比丘尼塚古墳⁹、志津見地域では門1・2号墳、角井地域では堂ノ原横穴墓¹⁰が知られている。

奈良時代の遺跡は、古墳時代後期の集落が継続して営まれているものが多く、引き続き作り付けの竈をもつた竪穴住居がある。また、森遺跡・門遺跡では所属時期が明確ではないが、掘立柱建物跡が確認されており、倉庫等の施設が存在したものと思われる。

製鉄関係遺跡は、旧志々村地域で現在52ヶ所が判明している。(付編第1部参照) このうち、立地や発掘調査により江戸時代の高殿鉋成立以前とみられるものは、製鉄遺跡が16ヶ所、精錬鍛冶遺跡が4ヶ所、高殿鉋成立以後明治時代までのものは、鉋跡が29ヶ所、大鍛冶場跡が9ヶ所知られている。

高殿鉋成立以前の製鉄関連遺跡は、現在のところ平安時代末を遡るものは確認されていない。製鉄炉はすべて箱形炉であるが、地下構造は門遺跡1号炉、板屋Ⅲ遺跡1号炉が本床状遺構のみもつもの、板屋Ⅲ遺跡4号炉、弓谷尻遺跡1号炉¹¹が本床状遺構の両側に小舟状遺構をもつもので、中国山地の他地域と同様に2つの類型が認められる。ただし、後者は本床内部にも焼上を敷き詰めるもので、今後流域で類例が増加すれば、製鉄炉地下構造の地域性が抽出できる可能性がある。

また、この地域では平安時代末から室町時代にかけての精錬鍛冶炉がまとまって確認されているのも一つの特色である。板屋Ⅲ遺跡2・3号が最も初源的なものと考えられ、半地下式堅形炉を精錬鍛冶用に改良したものである。これは箱形炉で生産される銑鉄など高炭素系の鉄塊を脱炭、除滓することを目的としたもので、板屋Ⅰ遺跡SK02・03¹²、門遺跡2号炉、戸井谷尻遺跡6号炉¹³の他、佐田町櫛原遺跡V区1号が¹⁴でも確認されている。

高殿鉋成立以後の遺跡は大槀鉋跡¹⁵、弓谷尻鉋跡、下山遺跡、丸山遺跡¹⁶、長老畠遺跡¹⁷、殿瀧山毛宅前鉋跡¹⁸で、木床・小舟を備えた本格的な床釣構造をもつものが確認されている。これらは小舟に比べて本床の位置が40cm程度高い高床型II類と呼ばれる地下構造をもっており、山陽地域や出雲でも仁多郡地域とは異なる展開を示している¹⁹。また、大槀鉋跡では脇小舟も確認されており、この種の遺構が多い石見地域との関連を窺わせる要素も見られる。

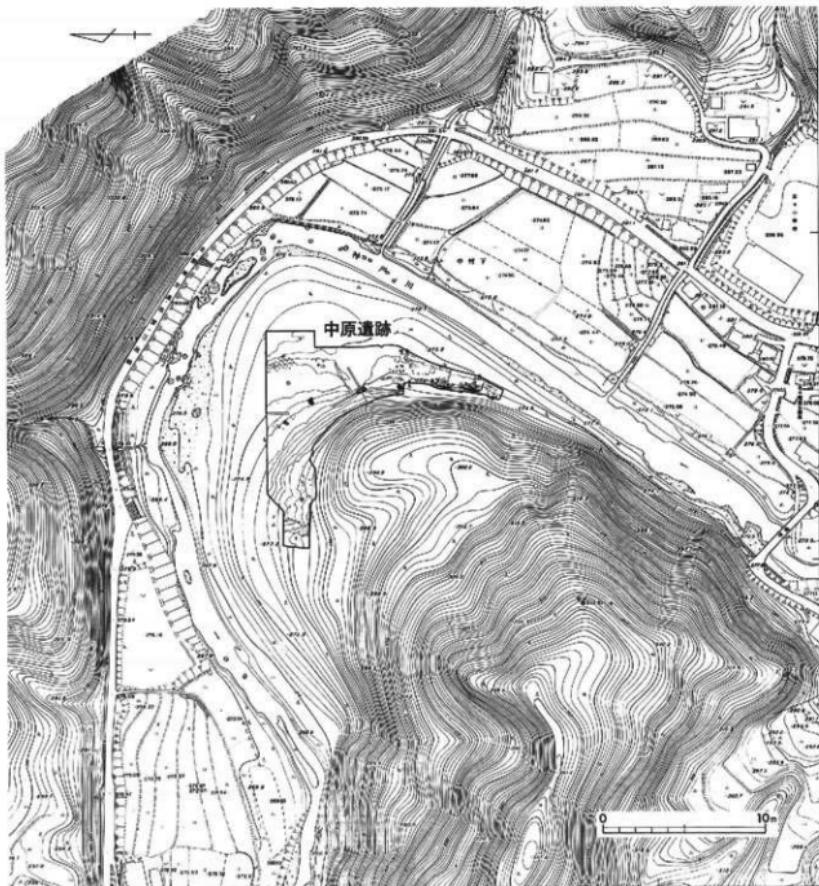
大鍛冶場跡は高殿鉋で生産された主として銑鉄を鉄素材である廻丁鉄に加工する作業場で、鉄砧石を挟んで本場、左下場2つの炉をもっている。そのあり方には、高殿鉋に付属するものと、単独で立地するものの2者が認められ、前者は大槀鉋跡、神原Ⅲ遺跡、佐田町櫛原鉋跡、後者は中原遺跡、戸井谷尻遺跡、獅子谷遺跡²⁰があげられる。

第3章 調査の概要

第1節 調査区の配置

調査区は全面調査に先立って、範囲確認調査を行って定めた。遺跡は周知の遺跡である中原古墳を含み、河岸段丘平坦面も比較的広いことから、当初は遺跡が広範囲にわたっているものと予想していたが、範囲確認調査の結果、遺跡は6,400m²程度の広がりで、遺構の分布も疎らであることが判明した。

調査区内には全体に国土座標系にのる基準点を設けた。調査区内の区分は、X = -98,200、Y =



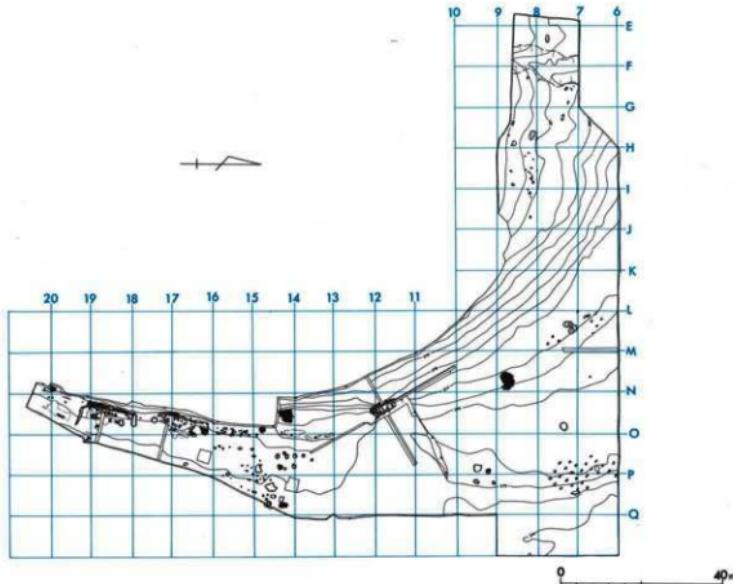
第2図 中原遺跡と周辺の地形 (1 : 300)

48,270を原点として10m間隔で南に1・2・3……、東にA・B・C……という基準線を設定し、その北西側の交点の名称で（例えば8G……）、1辺10mの方眼を呼称することとした。

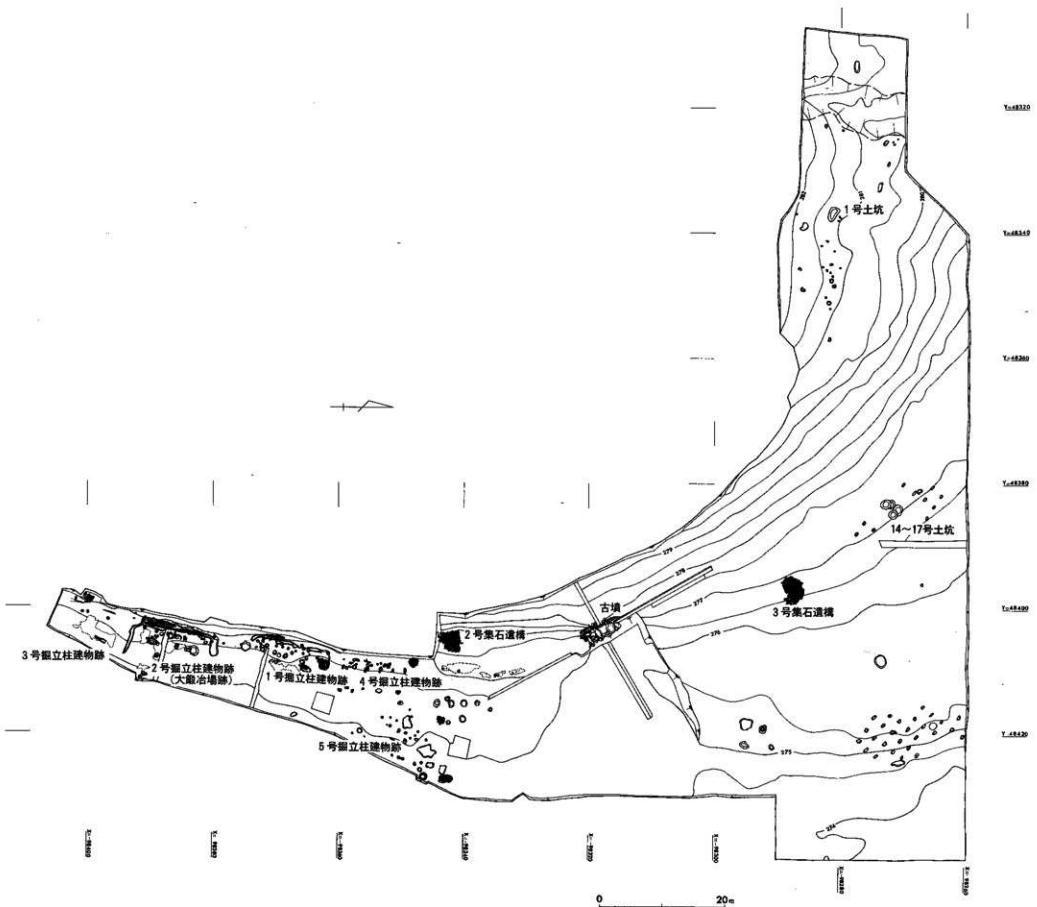
第2節 遺構の概要

遺跡が所在する河岸段丘は、全体に北東側が高く、南西側が低くなっている。後者は直接神戸川の侵食を受けていたと思われる。土層も地形に対応するように、北東側は第1ハイカ層以下基本的な層序が見られるが、南西側はハイカ層がない代わりに下層の浮布降下軽石の一部が崖面に露出していたり、河川堆積物と思われる砂層があるという状況であった。これは、この段丘上では安定した集落は営みにくかったことを示しているものと思われる。

検出された遺構・遺物は、縄文時代後期中葉～晩期、弥生時代前期～後期、古墳時代後期、平安時代末～鎌倉時代、江戸時代末頃のものがある。このうち、古墳時代後期のものは横穴式石室を内蔵した古墳が単独で築かれている。周辺地域では横穴式石室をもつ古墳は少なく、比丘尼塚古墳とともに八神地区の森遺跡など大きな集落を背景にした古墳と考えられる。また、江戸時代末には5棟の掘立柱建物が営まれているが、うち2号掘立柱建物跡が大銀治場跡、5号掘立柱建物も大銀治に関わる施設と見られるもので、大銀治に伴う作業場群であったと考えられる。その他の時期のものは、遺構・遺物ともあまり顕著なものは見られないが、弥生土器は前期後半と中期後葉のものが比較的まとまっている。



第3図 調査用方眼設定図 (1:1200)



第4図 遺構配置図 (1 : 600)

第4章 縄文時代の遺構・遺物

第1節 層序

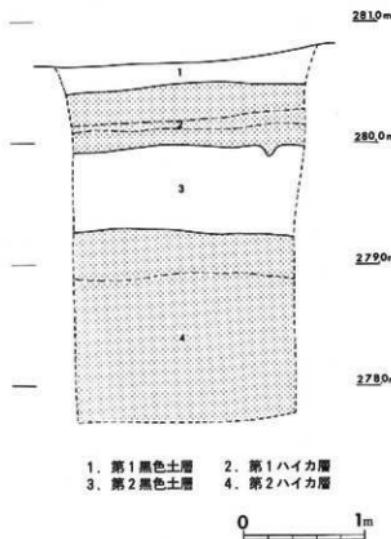
縄文時代の遺構は、比較的標高が高い調査区北西部に位置している。この地点の層序（第5図）は上層から順に第1黒色土層—第1ハイカ層—第2黒色土層—第2ハイカ層となっており、当地域の基本的な層序をよく保っている。

第1ハイカ層は厚さ0.5m程度で、上層から火山灰一火砕流一オドリという構造をもっており、八神地域にも三瓶太平山火砕流が及んでいたことが分かる。また、第2ハイカ層は調査した範囲で、1.6m以上とたいへん厚く堆積しているのが特色で、その堆積状況は一見均質のように見えるが、非常に細かい層（ラミネーション）が見られる。これは火砕流などによって川が堰き止められることによってできた堰止湖の湖底など、静かな水底にできるもので、やや上流部にある森遺跡でも第2ハイカ層に同様な状況が見られたことから、第2ハイカ層の時期に神戸川に堰止湖が存在した可能性もある。⁶⁾

遺物包含層は、最上層の第1黒色土層のみで、第1ハイカ層上面が遺構面となっている。

第2節 遺構

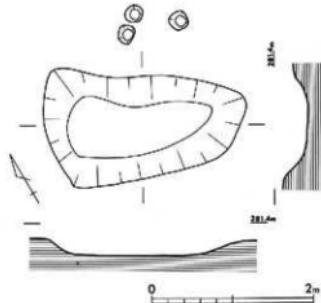
遺構は標高280.5～282mと調査区内の比較的高い部分に見られ、不整形な土坑とピットが散漫に分布する状況であった（第7図）。その配置には住居跡等になるような配置は認められず、遺物が出土したのは1号土坑のみである。



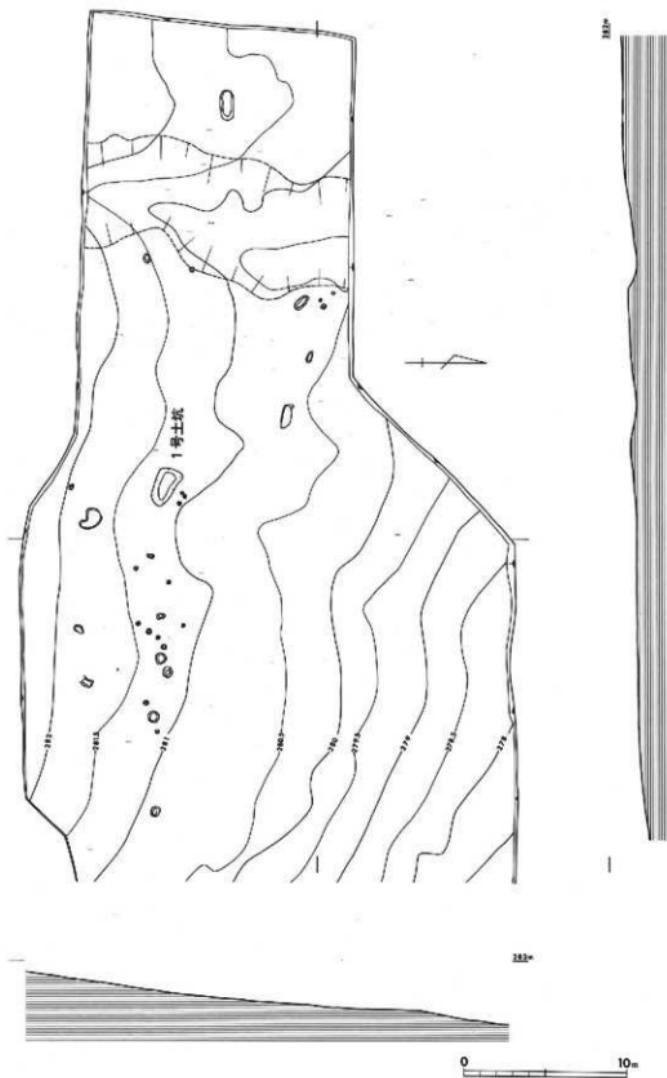
第5図 調査区北西部試掘調査区土層実測図（1：40）

1号土坑（第6図）は主軸を北西から南東方向とするもので、不整な楕円形を呈している。規模は、長さ2.5m・幅1～1.5m・深さ0.2～0.3mで、横断面形は浅い皿状となっている。

内部からは縄文土器深鉢底部が潰されたような状態で確認された他、打製土器



第6図 1号土坑遺構実測図（1：60）



第7図 調査区北西部構造実測図（1：300）

具と見られる石器が出土している。

調査区内の西側には溝状の落ちこみがあるが、これは第1ハイカ層の上面が雨水等により谷状に侵食されたものである。

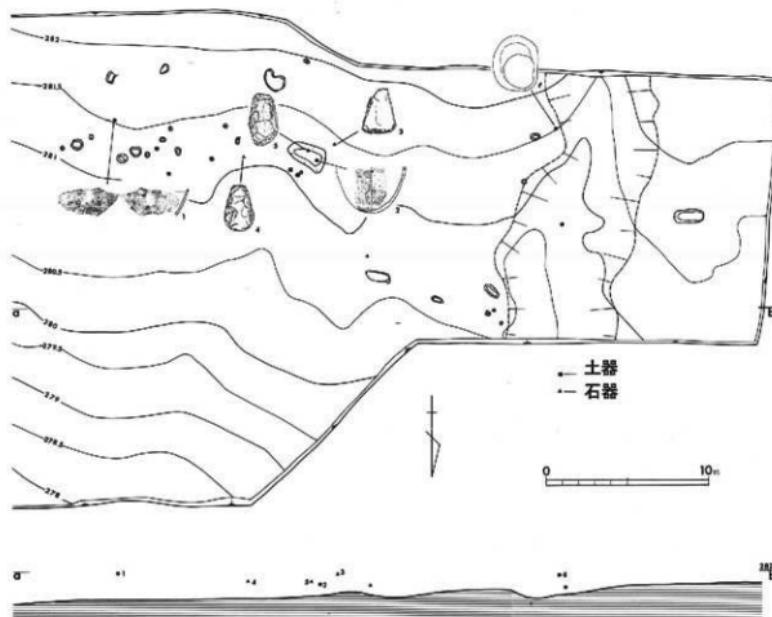
第3節 遺 物

遺物は、縄文土器深鉢、打製土掘具、磨石である。遺物の出土状況は、遺構と同様散漫であったが（第8図）、その中で打製土掘具は1号土坑とその周辺で3点がまとまって検出されている点が注目される。

1は、深鉢の口縁部である。口縁は突起状の緩い波状口縁で、体部にくびれ等は見られず、底部からそのまま外傾しながら立ち上がる器形をとるものである。調整は外面が粗いナデ、内面もナデである。胎土は3mm大の長石・石英を含み、色調は外面が灰褐色、内面が黄灰褐色で、焼成は普通である。

2は、深鉢の底部である。完全に丸底化した底部で、そのまま外形しながら口縁部にいたる器形をもつものと考えられる。調整は外面が条痕の後、ミガキ、内面はケズリの後、ミガキである。胎土は4mm大の長石・石英を含み、色調は外面が灰褐色、内面が黒褐色で、焼成は良好である。

3～5は、打製土掘具である。3は基部側を欠損しているが、長さは現状で11.1cm・幅8.1cm・

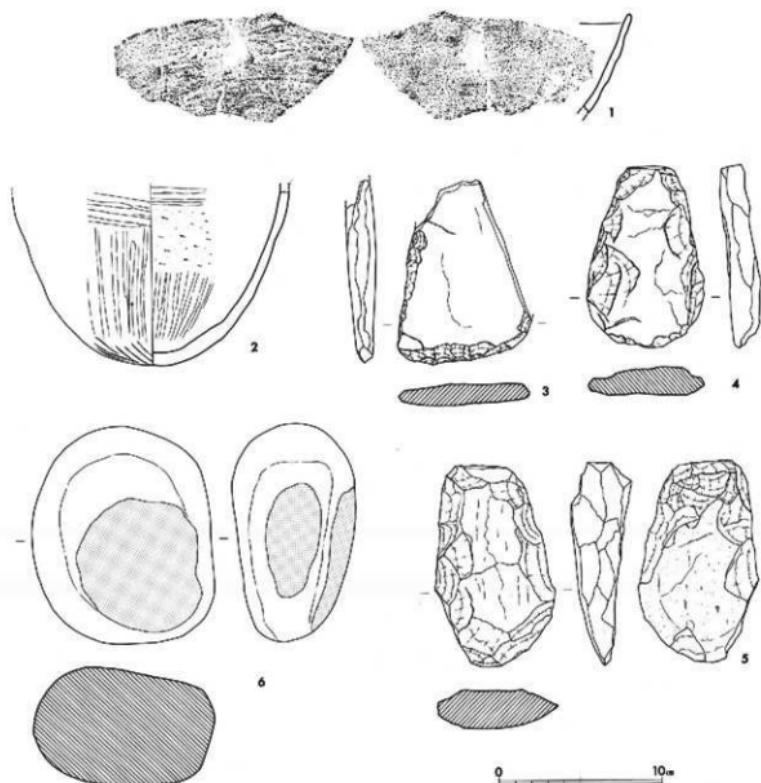


第8図 調査区北西部遺物出土状況実測図 (1:300)

厚さ1.8cmで、重さは210.4gである。直線的な刃部と両側縁に加工が見られ、石材は安山岩である。4は完形品で、長さは11.2cm・幅7.2cm・厚さ2.0cmで、重さは185.6gである。幅の狭い基部から丸みを帯びた刃部に大きく膨んだ形態をとっており、刃部及び両側縁には加工がみられるが、基部には自然面が残る。石材は泥岩である。5は欠損は見られないが、片面に大きな自然面を残しており、未成品とも考えられるものである。長さは12.4cm・幅7.4cm・厚さ3.5cmで、重さは332.6gである。片面に自然面を残すが、もう一面は刃部・両側縁・基部とも加工が加えられており、全体に厚手で、やや丸みを帯びた外観を呈している。石材は流紋岩質凝灰岩である。

6は磨石である。片面及び1側面に使用痕を残すが、敲打痕は認められない。長さは13.5cm・幅11.0cm・厚さ7.5cm、重さは1848.9gで、石材はひん岩である。

以上の遺物の時期は、明確にはできないが、1が突起状の緩い波状口縁をもつことや、2が丸底であることから、縄文時代晩期中葉のものと考えておきたい。



第9図 調査区北西部出土遺物実測図 (1:3)

第5章 古 墳

第1節 調査方法

中原古墳は周知の古墳であり、当初から横穴式石室を内蔵するものであることが分かっていた。調査前には草に覆われて、その状況は判然としなかったが、墳丘の草刈りを行ったところ、天井石などの石材が露出し、全長7.5m程度の人気さをもつ石室であると推定された。

この規模は町指定史跡比丘尼塚古墳とあまり変わらず、また、周辺地域ではほとんど横穴式石室をもつ古墳が知られていないことから、調査と並行して遺跡の取扱い協議を行った。したがって、調査は古墳の現地保存を行いたい得る方法を探ることとし、墳丘については部分的なトレント調査、横穴式石室については内部の発掘のみに留め、石室自体を解体するような調査は行っていない。

第2節 墳 丘

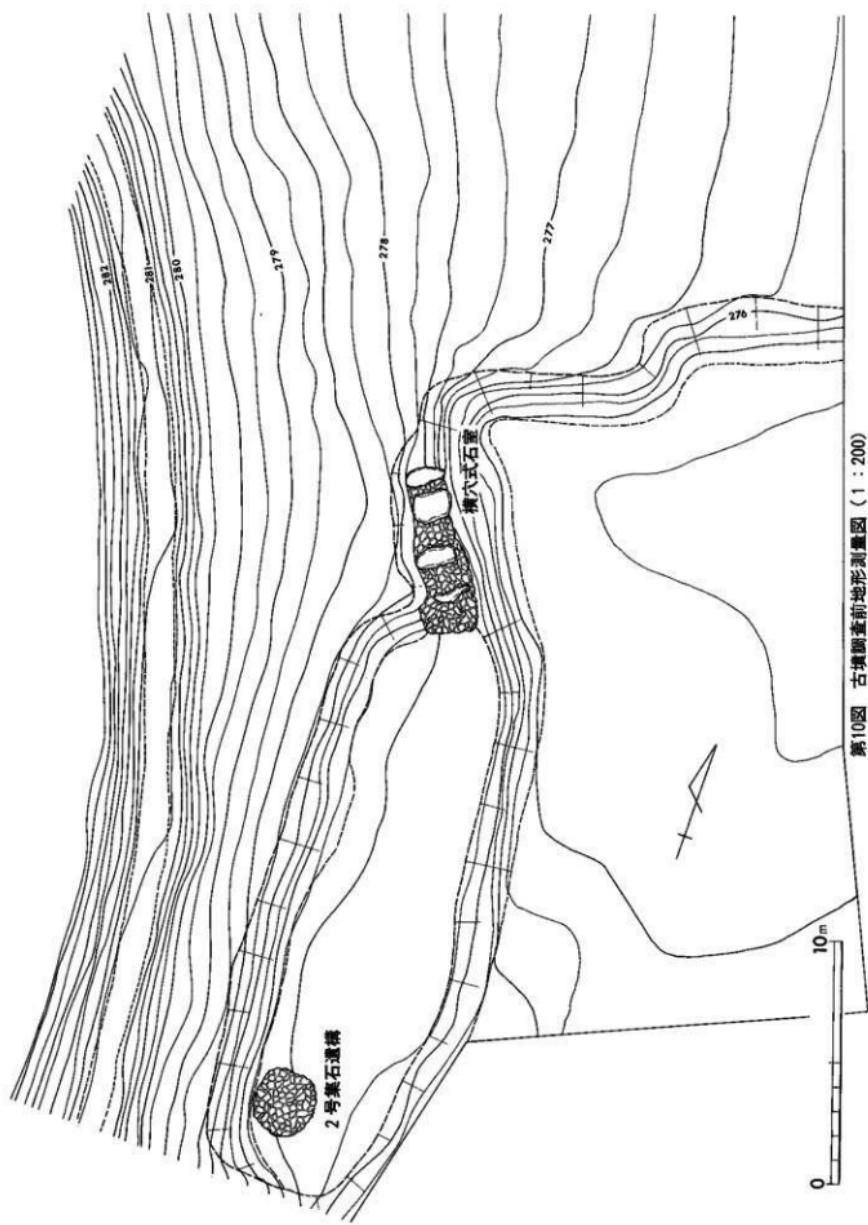
古墳は調査区中央よりやや南寄り、西側の丘陵と河岸段丘が接する傾斜変換点付近に位置する。同じ段丘上には他に古墳や同時期の遺構・遺物は全く見られず、1基のみの単独墳である。

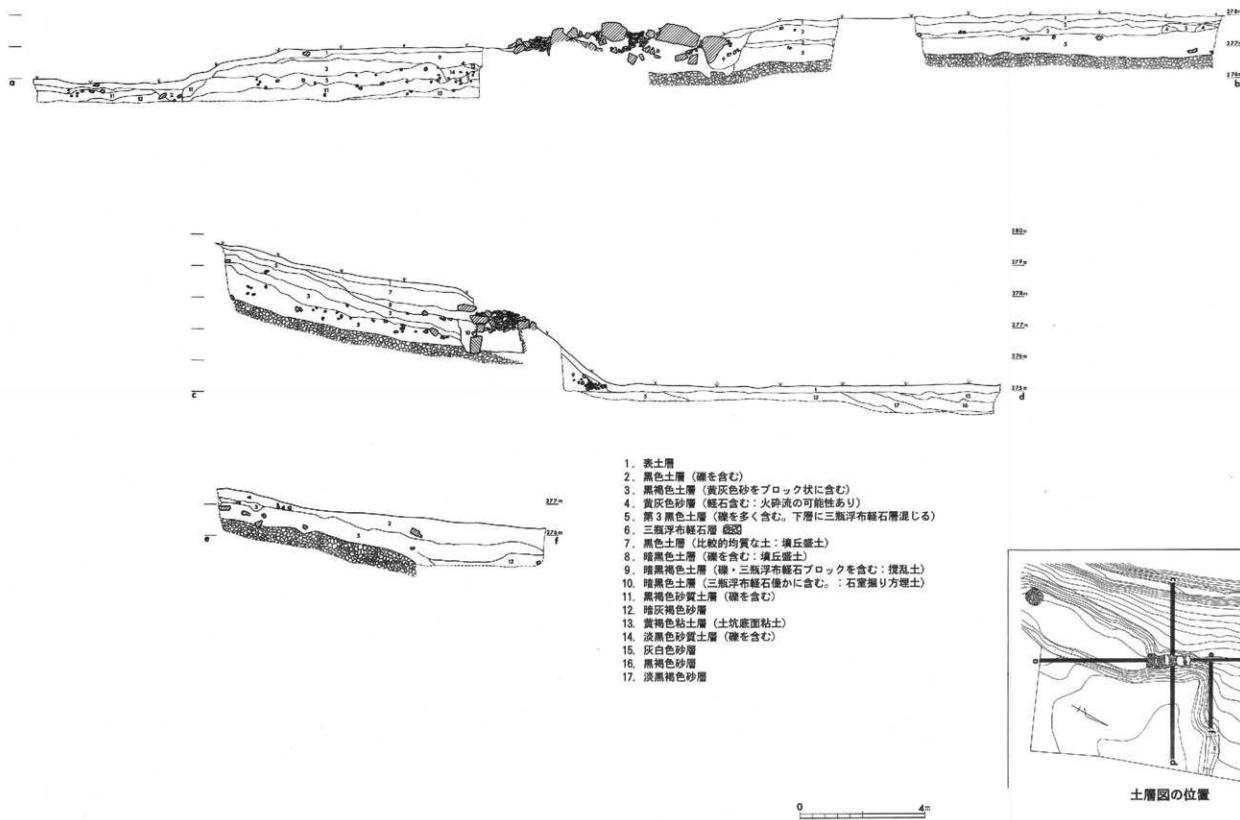
墳丘（第10図）は南及び東側を大きく削り取られており、遺存状況は良くない。調査前の地形を見ると、横穴式石室西側に僅かな盛り上がりが見られ、これが墳丘の一部と考えられる。墳丘の周囲の地形は、石室から西へ9m程のところから丘陵斜面が急勾配になるが、周溝など顕著な遺構は認められなかった。

墳丘の断面は、後世の改変が著しいこともあって不明な点が多い。しかし、横穴式石室を丘陵側から横断する第11図c-d断面を見ると、石室より東側は削り取られ全く墳丘を留めないものの、西側は比較的その様子が分かる。古墳築造以前の地山は、黒色土層（2層：礫を含む）、黒褐色土層（3層：黄灰色砂を部分的に含む。）、第3 黒色土層（5層：礫を多く含む。下層に三瓶浮布軽石混じる。）、三瓶浮布軽石層（6層）で、黒色系の堆積土は丘陵斜面下に位置するせいか、礫を含むのが特徴である。横穴式石室の掘り方は、これらの地山を深さ1.1mまで掘り込んでおり、石室の基底部は比較的しっかりした三瓶浮布軽石層の上面に置かれている。掘り方の埋土は暗黒色土層（10層：三瓶浮布軽石僅かに含む。）で、互層構造など突き固めたような形跡は認められなかった。石室中央部の天井石は失われていたが、側壁の高さからすると掘り方よりも高い位置に架けられていたものと見られ、この上に墳丘盛土である黒色土層（7層：比較的均質な上）、暗黒色土層（8層：礫を含む。）が盛られている。盛土は、古墳周囲の土と同じ所謂「黒ボク土」であり、掘り方の掘削や整地を行った際に生じた土を盛り上げたものと考えられる。周溝など地山を掘り込んで墓域を画す遺構は見られなかったが、本来は石室側に盛土を行うことで丘陵斜面との間が周溝状になっていたものと推定される。

a-b断面は、横穴式石室の主軸に沿うものである。石室北側の部分は2層、3層、5層、6層といった地山のみで盛土は認められないが、後世、石室の石材を抜き取ろうとした際に掘り込まれた穴の埋土である暗黒褐色土層（9層：礫を含む。）が見られる。石室の南側も墳丘盛土と考えられるものはなく、2層、5層及び黒褐色砂質土層（11層：礫を含む。）が地山である。また、石室前庭部には近世に掘り込まれた土坑である黄褐色粘土層（13層）があり、これより上層も搅乱され

第10圖 古墳調查前地形測量圖 (1 : 200)





第11図 古墳周辺土層実測図 (1 : 120)

たものであることが分かる。石室北側・南側とも周溝などは認められなかった。

e - f 断面も、2層、3層、5層、6層と地山のみ認められ、これに掘り込まれた遺構も確認されなかった。

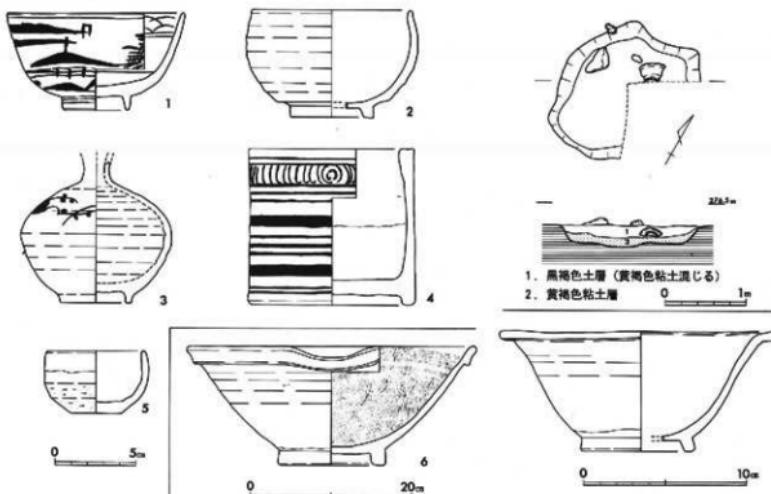
墳丘を推定復原することは困難であるが、墳丘測量図では石室北西側部分に盛土と周辺地形の境とみられる谷状地形が僅かに弧状を呈している。これと c - d 断面石室西側の盛土である7層の範囲を墳丘として、石室を中心に反転復原すると径12m程度の円墳が想定できる。

第3節 横穴式石室

- 横穴式石室は、主軸を丘陵斜面に対し平行におくもので、南南東～南東方向 (S-34°-E) に開口する。

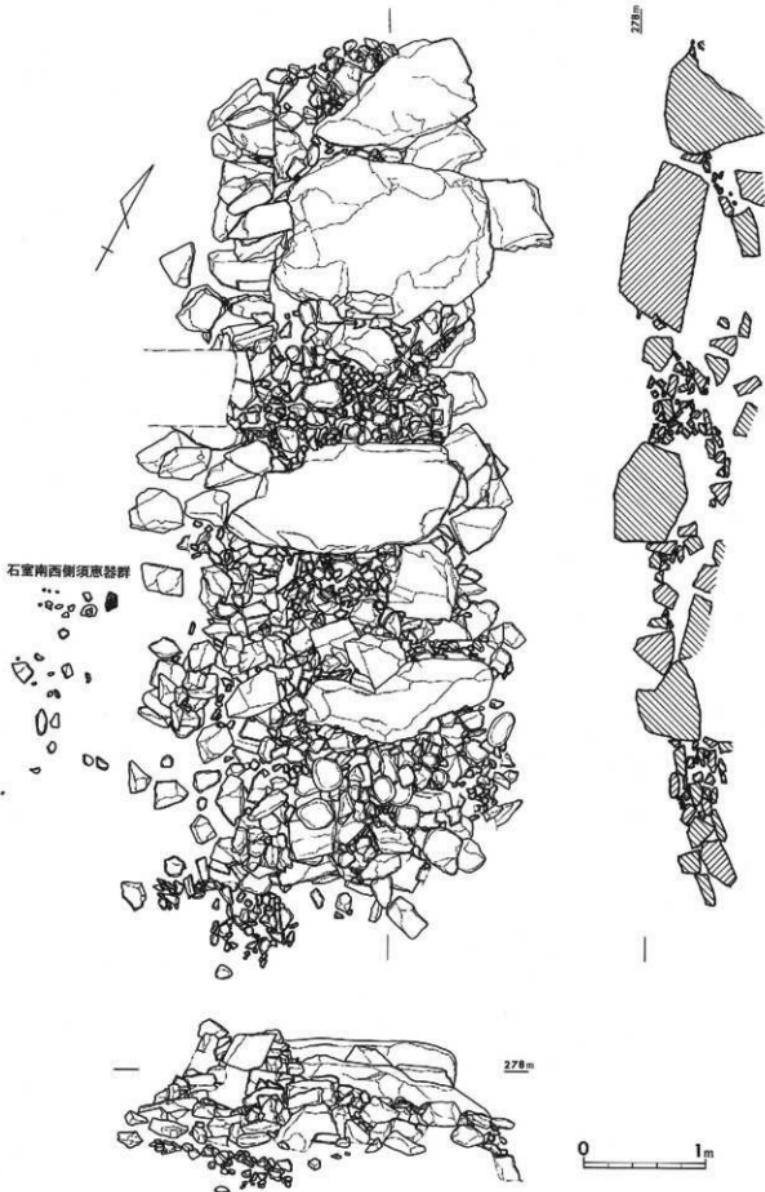
調査時には石室上部の墳丘盛土は既に失われ天井石が露出した状態で、天井石は石室中央に架かる1枚と、奥壁側・羨道側にそれぞれ1枚の計3枚が残っていた。石室中央の天井石は原位置を保っていたが、奥壁側・羨道側のものはともに西側が側壁より外れ内部に落ちこんだ状態であり、その間には無数の石が詰め込まれていた(第14図)。

天井石間で検出された石の間からは、近世の陶磁器がまとまって検出されている。第12図はその一部で、1・3・4は肥前系磁器類、2・5・6が在地窯系陶器類である。これらの時期は江戸時代末を中心とした頃のものと見られ、横穴式石室がこの段階に発見され、一部石材の抜取りなど改変が加えられたものと考えられる。また、石室前部にあたる位置には、2号土坑がある。これは径1.7m・深さ0.25mほどの不整形なもので、底面には黄褐色粘土が貼られている。内部からは在地窯系陶器鉢が検出されており、やはり石室の改変が行われた時に營まれたものと見られる。



第12図 石室攪乱部出土陶磁器実測図 (1:3, 1:6)

第13図 石室前部2号土坑と
出土陶磁器実測図 (1:3)



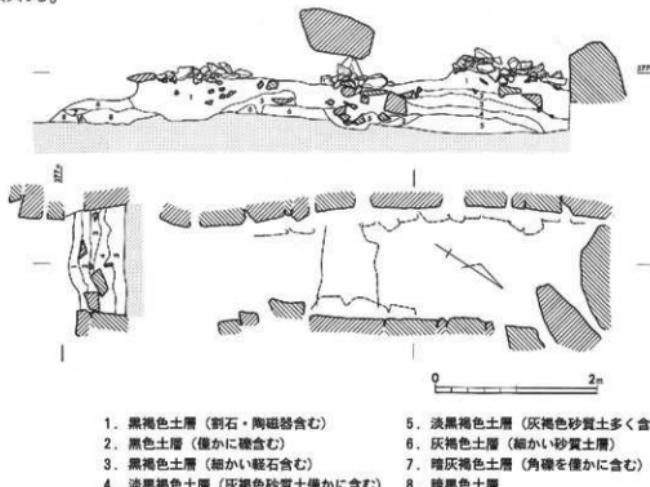
第14図 横穴式石室天井石検出状況実測図1 (1:40)

横穴式石室内の土層（第15図）は、その大半が江戸時代末に石室が発見・改変された後に埋め戻し、または堆積したものと見られる。石室内の土層は基本的には5層で、上層より黒褐色土層（1層：割石・陶磁器を含む。）、黒色土層（2層：僅かに礫を含む。）、黒褐色土層（3層：細かい軽石含む。）、淡黒褐色土層（4層：灰褐色砂質土層僅かに含む。）、淡黒褐色土層（5層：灰褐色砂質土層多く含む。）となっている。1層は上面を中心に多量の割石が見られ、石室内がある程度埋め戻された後、残された天井石の間から石が詰められたものと思われる。また、奥壁石材の下には1層及び3層が入っており、奥壁抜取りが試みられた際に埋まったものと見られる。これらの点からすると、石室内の埋土は大半が掻き出されており、そのため石室内部からの出土遺物は奥壁付近で須恵器壊小片（第20図-3）が確認された程度で、ほとんどが持ち去られたものと考えられる。

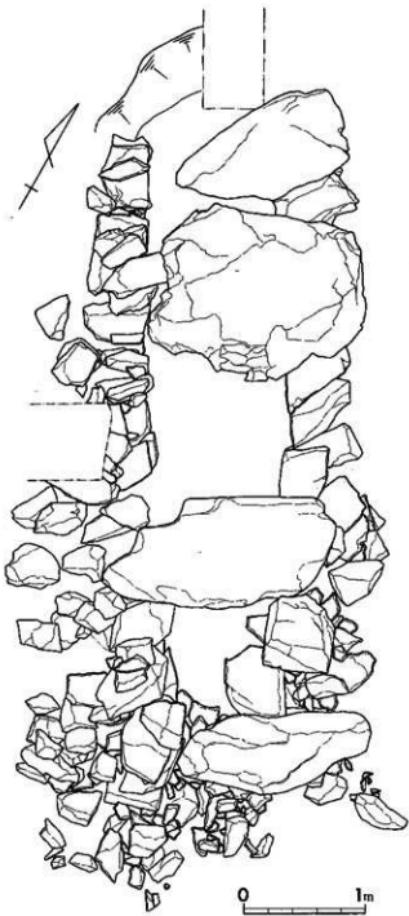
石室中央部から羨道部にかけては、上面中心に多量の割石がある1層の下に、5層、灰褐色土層（6層：細かい砂質土層）、暗黒色土層（8層）が見られる。6層は1層または5層によって切られたような状況を示すことから、石室本来の埋土であった可能性があるが、遺物は含まれていなかった。また、8層は6層の下層にあたり、須恵器高壊脚部（第20図-5）が検出されていることから、擾乱を受けていないものと思われる。

横穴式石室は、奥壁及び東側壁奥部の石材が動かされているが、現状で全長5.2m、最大幅1.35m・高さ1.5mの規模を有する。平面形は袖をもたない無袖式で、羨道及び奥壁より石室中央部の幅が広い胴張りのある形態を呈している。

石材は石室の各部で使い分けが見られ、側壁は細粒花崗岩の割石、奥壁は粗粒黒雲母花崗岩の転石、天井石は結晶凝灰岩または凝灰角礫岩の転石である。奥壁・天井石は石材の角が取れていますことから、付近の河原などから適当な大きさ形状のものを採取したものと見られる。また、側壁は割石で適当な大きさに揃えられおり、場所は特定できないが細粒花崗岩の露頭から採取されたものと思われる。



第15図 横穴式石室内土層堆積状況実測図（1:60）



第16図 横穴式石室天井石検出状況実測図2 (1:40)

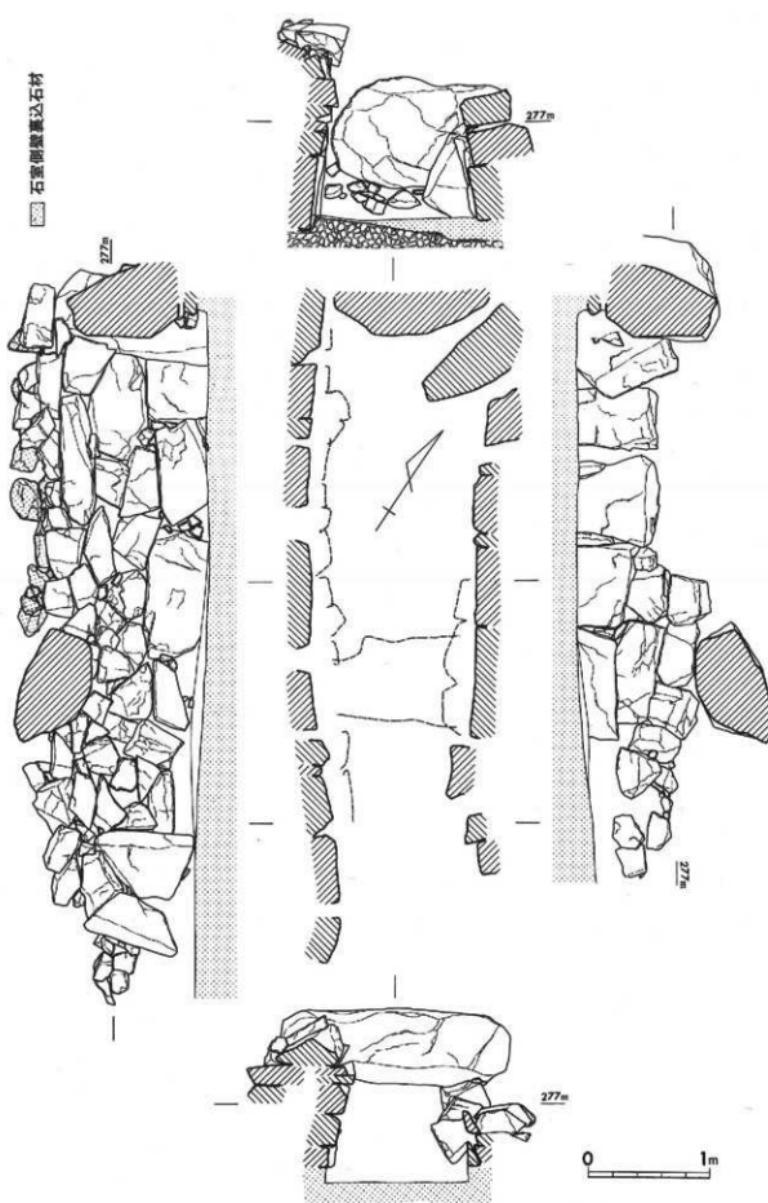
斜していることも考えられる。

奥壁は既に動かされており、その下には抜取りを試みた際に詰められた小形の石が見られる。側壁の高さが1.5mあるのに対し、現在残る奥壁の高さが0.9mほどしかないことから、これを腰石としてさらに上部に1~2段程度石材が積まれていたと考えられる。

床面は羨道から奥壁に向かってやや傾斜している。石室中央部の西側壁基部では、浮布降下輕石層を10cm掘り下げて腰石が据えられているが、東側壁基部は黒色土にのった状態で確認された。

側壁は、西側壁はほぼ原形を留めており、原位置を保つ石室中央部の天井石が奥壁側より1段下がった位置に架かるところから、羨道と玄室を区別する柵石状になるものと思われる。すなわち、石室の平面形は無袖式であるが、立面形は柵石で羨道と玄室を分けたものに復原できる。西側壁は、この柵石を挟んで奥壁(玄室)側は基底部にやや大きめの腰石を横置きに据え、その上に3~4段ほど横目地を通しながら積み上げる。これに対し羨道側は顯著な腰石がなく、石材の積み方も横目地が通らず、雑である。ただ、羨道の入口にあたる部分には立石が2個見られ、羨門が意識されているとも考えられる。

東側壁は、遺存状況があまり良好ではなく、奥壁沿いの石材が動いている他、玄室内は上部の石材が抜き取られている。玄室から玄門部にかけては腰石が残っているが、玄室内のものは西側壁とは対照的に継置きにされているのが特色である。玄門付近は腰石の上に横目地が通るよう石材が2段に置かれ、柵石を受けている。羨道は石の積み方が雑で、基底部に石が見られない。これは羨道側壁の基部が南ほど上がっている西側壁と共にした点であり、石室掘り方が羨道側から奥壁側に向かって傾



第17図 横穴式石室実測図 (1 : 40)

第4節 遺物の出土状況

既に述べたように、横穴式石室内部で確認された遺物はごく僅かであったが、この他に墳丘内や前庭部でも遺物が出土している。

横穴式石室の南西側では、墳丘内に置かれていたと見られる須恵器（第20図-1・2・6・7・8）が検出されている。（第14・18図）これらは天井石よりも低い位置で、玄室側が高く羨道側が低い状態で出土しており、横穴式石室の構築がほぼ終了し、墳丘の盛土を天井石付近までした段階で置かれたものと見られる。その状況は、ほぼ完形品である2を除けば、1・6・7・8は小片となってしまっており、意図的に割られた可能性が高い。また、破片を含め1・2・6は口縁または脚部側を下にした正位の状態であったが、7は口縁部を下に伏せた形で検出されている。

前庭部では、須恵器と鉄釘（第20図-4・9）が確認されている。このうち、9の出土状況は不明であるが、4は石室西側壁の延長線上に位置し、口縁を下に傾いた状態であった（第19図）。

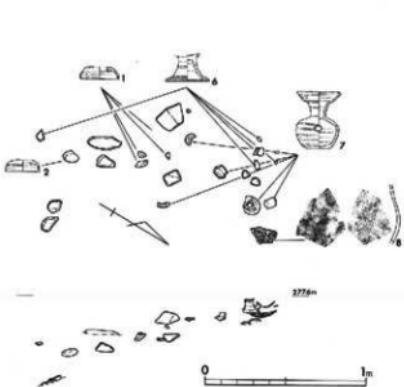
第5節 出土遺物

遺物には、須恵器壺蓋1・蓋1・壺身1・高杯3・鏡1・甕片1、鉄釘1がある。

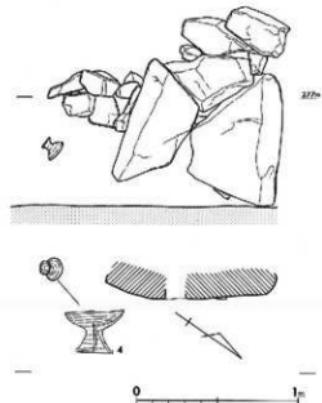
1は壺蓋で、復原口径9.4cm・器高3.0cmである。外面頂部にはヘラ切り痕状の痕跡を残し、調整は内外面とも回転ナデである。胎土は2mm大までの長石を含み、焼成は良好、色調は淡青灰色から暗青灰色を呈する。外面に灰かぶりが見られる。

2は蓋で、口径8.4cm・器高2.9cmである。口縁がやや外反し、頂部との間に浅い凹線が見られることから、短径壺などの蓋になる可能性がある。外面頂部にはヘラ切り痕状の痕跡を残し、調整は口縁内外面が回転ナデで、内面頂部がナデである。胎土は密で、焼成は良好、色調は青灰色を呈する。

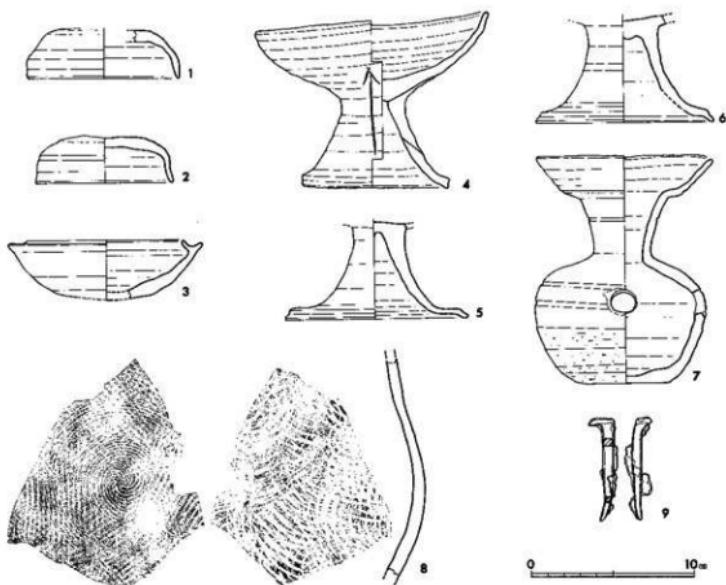
3は壺身で、復原口径9.6cm・器高3.5cmである。口縁内面に短いかえりを有しており、調整は内外面とも回転ナデである。胎土は密で、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈する。



第18図 石室南西側遺物出土状況実測図 (1:30)



第19図 石室入口遺物出土状況実測図 (1:30)



第20図 古墳出土遺物実測図 (1 : 3)

4は高環で、口径14.4cm・器高10.8cm・脚径9.0cmである。環部は丸みを帯び外傾する口縁を有しており、脚部はやや外反し、端部には稜がある。環部の下側から脚部にかけては、浅い線状の透しが2方向に付けられている。調整は環部内面がナデ、他は回転ナデである。胎上は4mm大までの長石・石英を含み、焼成は普通（一部不良）、色調は暗青灰色～淡褐色である。環部内面には、焼成時に重ね焼きされたことを示す径9.0cmの脚端部の痕跡が残る。

5・6は高環脚部の破片で、前者が復原脚径11.3cm・後者が10.8cmである。ともに脚部は大きく開き、端部にはにぶい稜がある。前者の調整は風化のため不明であるが、胎土は7mm大までの長石を含み、焼成は不良、色調は外面が淡黒灰色、内面が灰白色である。後者の調整は内外面とも回転ナデで、胎上は3mm大までの石英を多く含み、焼成は不良、色調は灰白色である。

7は壺で、復原口径10.8cm・器高14.0cmである。外傾しよく開く口縁と平底状の底部を有しており、口縁と頸部及び肩部には1～2条の浅い凹線がある。調整は外面底部が回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎上は2mm大の長石・石英を含み、焼成は良好、色調は青灰色である。

8は壺片である。焼成時の歪みが著しく、外面には平行タタキの後、カキメ、内面には同心円状のあて具痕を残す。外面中央にカキメがあることから底部と見られる。胎上は1mm大の長石を含み、焼成は良好、色調は青灰色である。

9は鉄釘で、長さ6.4cm・幅0.8cm・厚さ0.5cmである。断面形は台形～隅丸方形で、折り返し部と先端部がやや曲がっている。古墳に伴うものではなく、近世末のものである可能性もある。

第6章 歴史時代の遺構・遺物

第1節 遺構の配置状況

歴史時代の遺構・遺物は、調査区南部の細長い平坦面を中心に分布している。このうち、最も遡るものは平安時代末から鎌倉時代の瓦質土器が出土している1号集石遺構で、周囲に比較的整然と並んでいる3～9号土坑も出土遺物こそないが同時期の可能性がある。

歴史時代の遺構で主体を占めるのは江戸時代末のもので、1～5号掘立柱建物跡（人鍛冶場跡を含む）、10～12号土坑、1～7号焼土面、2号集石遺構などが上げられる。その配置状況は1～4号掘立柱建物跡、1～7号焼土面、2号集石遺構が丘陵裾部に沿うように並び、5号掘立柱建物跡や10～12号土坑が平坦面でも川寄りに位置している。

また、調査区北部の平坦面は遺構が疎らな状況であるが、一部で牛骨が検出された13～16号土坑や3号集石遺構がある。なお、調査区北部の6L・7L・6O・6P・7O・7P付近に規則的な浅い土坑の配列が見られたが、埋土にガラス瓶を含んでおり近代以降のものである。

第2節 掘立柱建物跡

1. 1号掘立柱建物跡（第23図）

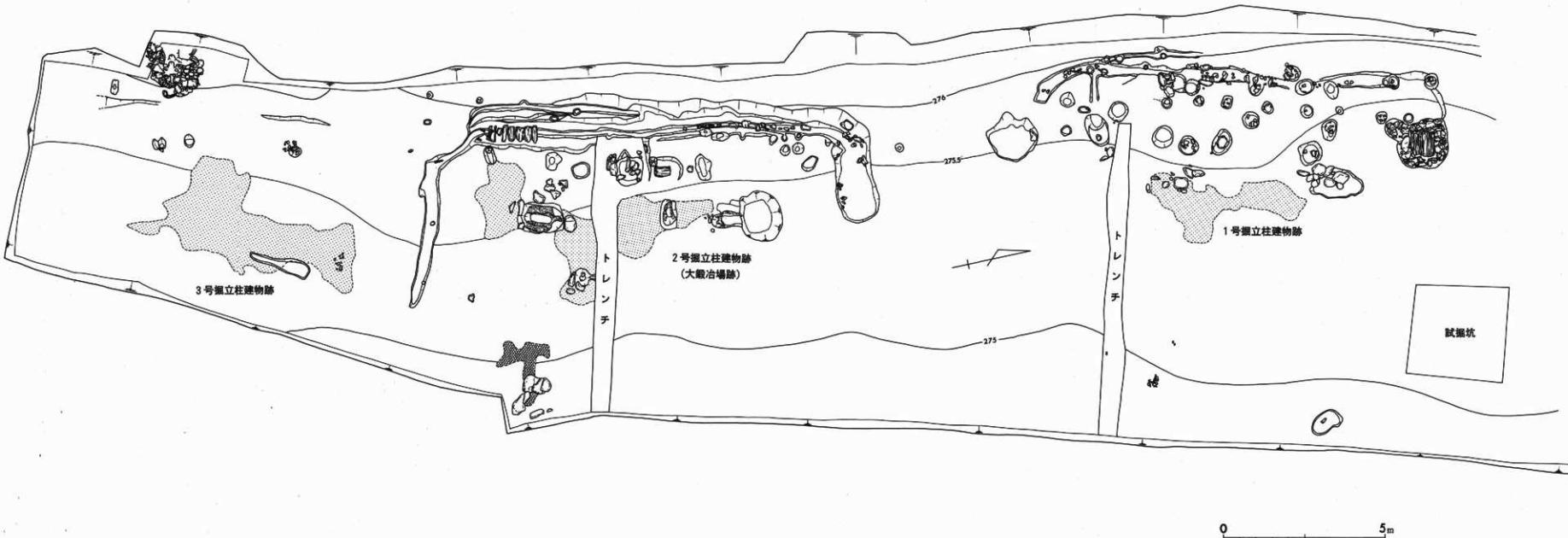
丘陵裾部に営まれた建物跡で、川寄りの柱穴列は既に失われており、丘陵側の柱穴列のみ遺存している。柱穴列の配置状況及び丘陵側に巡る溝が切り合っていることから見て、建て替えが行われ2棟分の建物跡が重複している。また、建物の北端部では滝折状遺構、中央部では焼土を含んだ粘土面が検出されており、1号掘立柱建物跡に関わるものと見られる。

古段階の建物跡は溝1によって囲まれた柱穴列で、P. 4-P. 5-P. 6-P. 7-P. 8-P. 9-P. 11が1棟分になるものと思われる。復原される桁行は7.5mで、柱穴心々間の距離はP. 4-P. 5が1.2m、P. 5-P. 6が1.2m、P. 6-P. 7が0.9m、P. 7-P. 8が1.0m、P. 8-P. 9が1.5m、P. 9-P. 11が1.5mである。このうち、P. 8には柱根（第24図-3）が遺存している。径14～16.5cmのクリ材が用いられ、底面に切断痕が残っている。

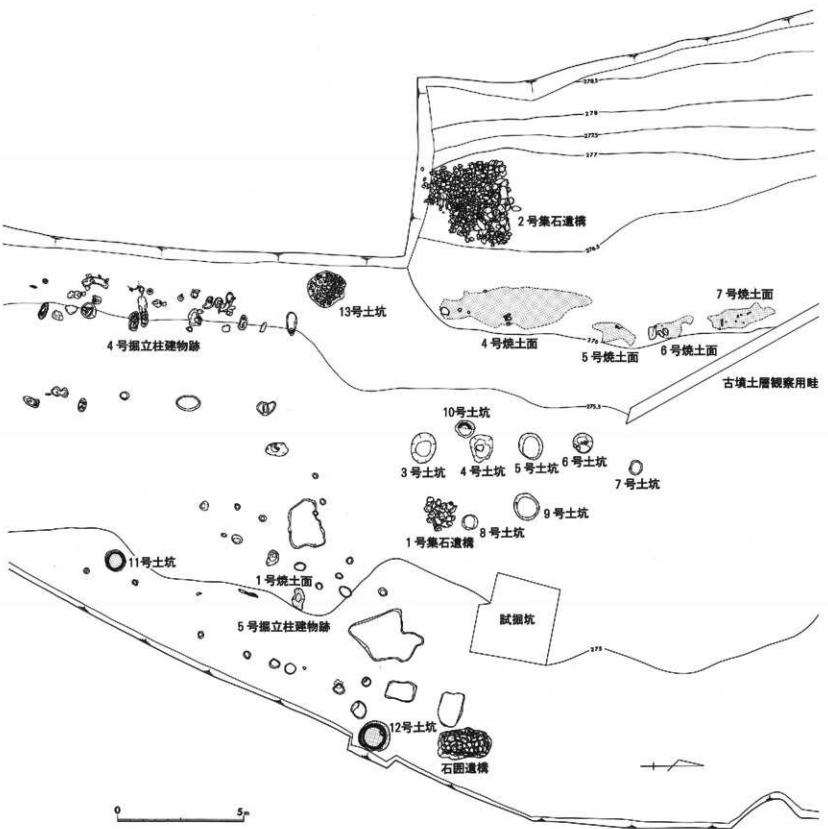
新段階の建物跡は溝2によって囲まれた柱穴列で、P. 1-P. 2-P. 3-P. 16-P. 17-P. 18が1棟分になるものと思われる。復原される桁行は7.5mで、柱穴心々間の距離はP. 1-P. 2が1.2m、P. 2-P. 3が1.8m、P. 3-P. 16が0.9m、P. 16-P. 17が1.5m、P. 8-P. 9が2.0mである。このうち、P. 1及びP. 2には柱根（第24図-1・2）が遺存している。1は径13.5～14.5cm、2は径9.5～11.0cm・長さは現状で58.5cmと比較的よく残る。ともに柱の先端が杭状に加工されており、樹種は後者がクリ材であることが判明している。

建物跡中央部の焼土を含む面（第25図）は、桁行方向4.6m、梁行方向2.3mの範囲に不整形な形で広がっている。土層断面は炭・焼上・粘土を多く含む灰褐色土層の下に、炭を多く含む灰褐色土層が見られ、前者の下には部分的に3～5cm前後で薄い褐色粘土層がある。

この焼土を含む面では僅かに遺物が検出されており、瓦質土器製品（第31図-1）と在地系陶器碗（同図-2）が見られる。1は隅部しか遺存していないが、平面形が方形状を呈するもので、側面には4ヶ所にわたって方形の透し穴が設けられている。胎土は密だが僅かに2～3mm大の砂粒を含



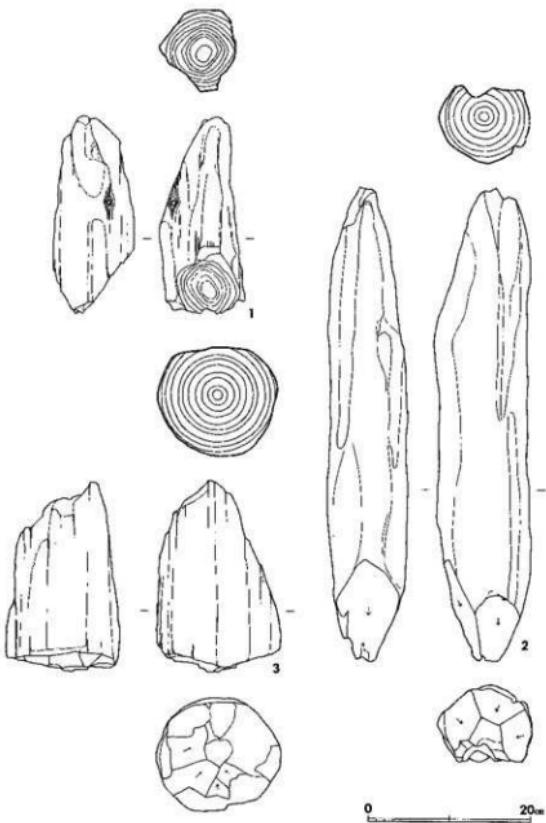
第21図 1～3号掘立柱建物跡周辺遺構配置図 (1 : 100)



第22図 4・5号据立柱建物跡、3～13号土坑周辺遺構配置図 (1:150)



第23図 1号掘立柱建物跡遺構実測図 (1 : 80)



第24図 1号掘立柱建物跡柱根実測図 (1 : 6)

み、焼成は良好、色調は淡黒色から暗灰色を呈する。2は底部の小片で、高台内面を含め黄白色の釉がかけられているが、見込は釉ハギである。胎土は密、焼成は良好である。

溜枡状造構は、南西側が突出した方形の掘り方の中に設けられており、周壁を石積みとし、底面に底板を敷いたものである。掘り方の大きさは南西側の突出部分を除くと、南北1.6m、東西1.3~1.4m、深さは西側で0.55m・東側で0.45mである。石積みの大きさは内法で、南北0.8m、東西0.9mである。各壁ともあまり日地の通る積み方はしていないが、特に南壁・東壁は石のない部分もあり、粗雑な積み方となっている。石積みの横断面形は上方が外側に開き、外傾している。

底板は4枚のクリ材を東西方向に向けて敷き並べており、中央部がやや低く置かれている。

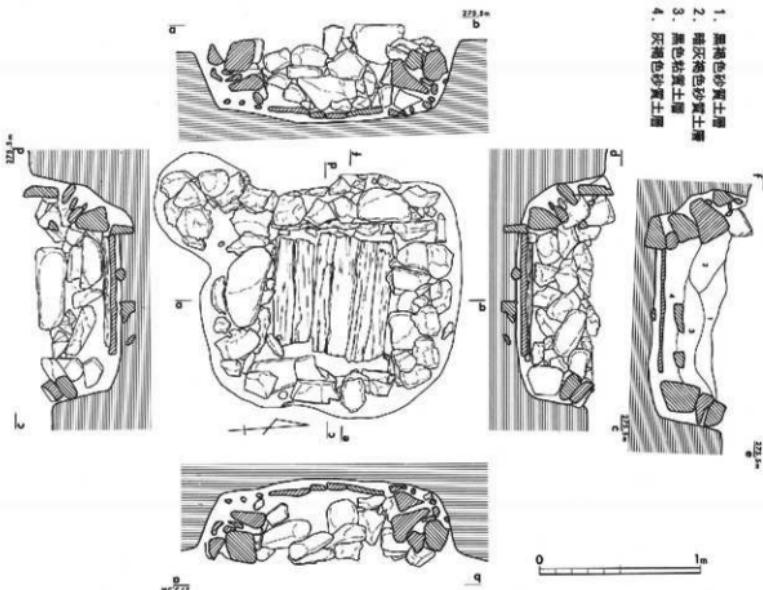
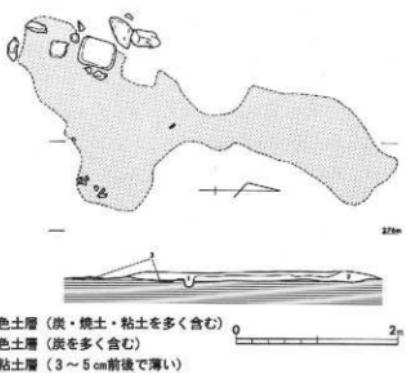
溜枡状造構の埋土は、上層より黒褐色砂質土層(1層)、暗灰褐色砂質土層(2層)、黒褐色粘質

土層（3層）、灰褐色砂質土層（4層）となっている。比較的最下層の4層が厚く漬っており、砂質であることから、水溜めとしての機能が想定できそうだ。

溜枡状造構の南西側には、長さ0.6m、幅0.6mの突出した部分があり、内部に石が詰められているが、溜枡状造構との機能的な関係などは不明である。

1号掘立柱建物跡は、中央部の焼土を含む面より検出された陶器などか

ら江戸時代末頃に営まれたものと考えられる。これは隣接する2号掘立柱建物跡（大鍛冶場跡）と同時期であり、後述するようにともに建て替えが考えられることから、大鍛冶作業に当たった技術者である「大工」の住居など、その関連施設であった可能性が考えられる。



第26図 溝枡状造構実測図（1:30）

2. 2号掘立柱建物跡（大銀治場跡）

(1) 建物跡（第28図）

丘陵裾部に営まれた建物跡で、川寄りの柱穴列は既に失われており、丘陵側の柱穴列のみ遺存している。柱穴列より丘陵側には溝1・溝2と2本の溝が巡っており、溝1を溝2が切っていると見られることから、北側に向かって拡張が行われたと考えられる。また、建物の内部には大銀治に関わる炉や、作業面があり、これらがそれぞれ新旧2つの建物跡に対応している。

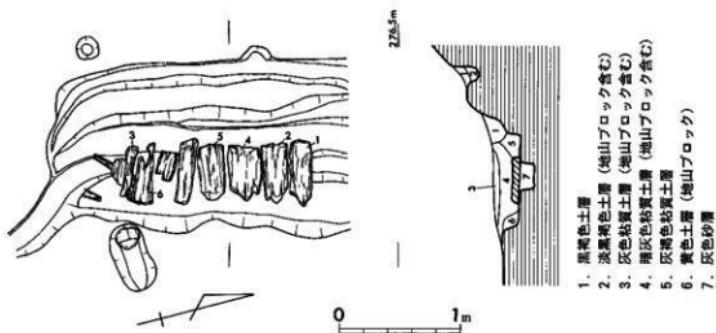
古段階の建物跡は溝1によって開まれていたと見られる柱穴列で、P. 1-P. 2-P. 3-P. 4が1棟分になるものと思われる。復原される桁行は6.6mで、柱穴心々間の距離はP. 1-P. 2が2.0m、P. 2-P. 3が1.8m、P. 3-P. 4が2.7mである。このうち、P. 1には柱根が遺存しており、クリ材が用いられていたことが分かっている。

溝1は南側の隅部を僅かに残すが北側は溝2によって切られており、長さは5.5m、幅0.2m、深さ0.2mと浅いものである。現状では斜面に位置しているが、新段階の建物が建てられた際、建物側が一段削平された可能性もある。

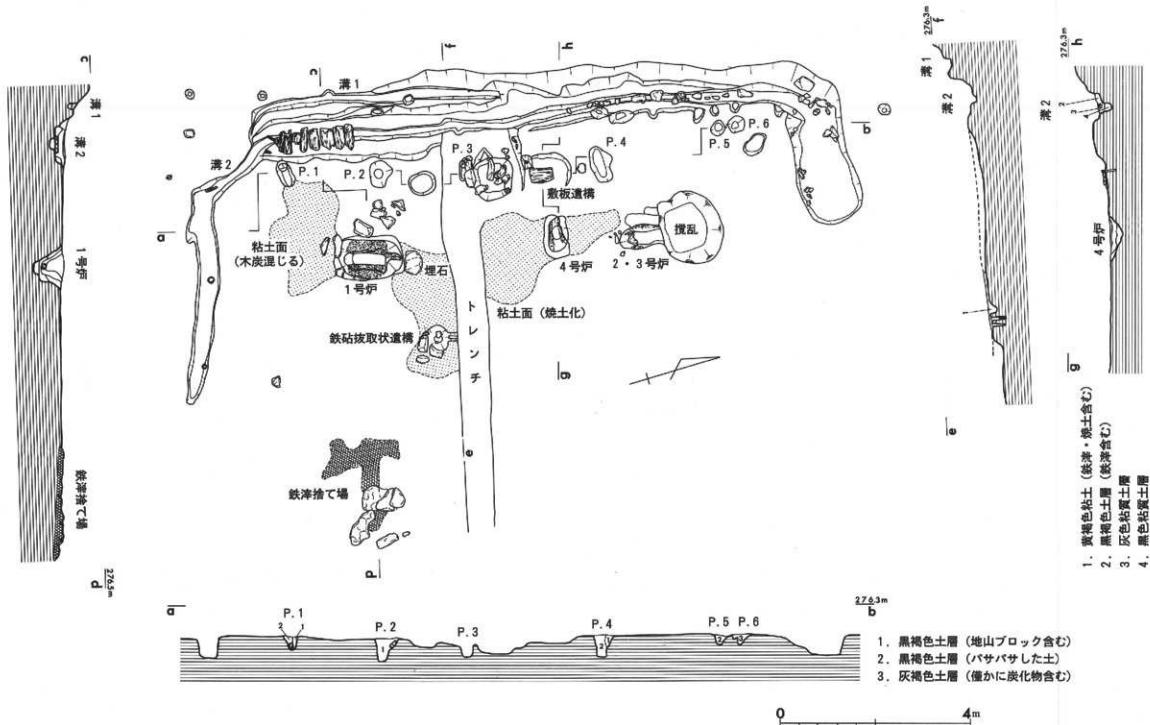
新段階の建物跡は溝2によって開まれたと柱穴列で、古段階のものと同様P. 1-P. 2-P. 3-P. 4が引き続き使われ、P. 4の北にも柱があったと考えられるが判然としない。溝2は丘陵斜面側に「コ」字状に残っており、南北14m、東西は現状で6m、深さ0.2mである。南西隅部付近には溝の上に架けられた蓋板（第27・29図）が残っており、クリ材が用いられている。蓋板は溝2の上端の両側を平に削り込んでから架けられており、こうした段が残る溝2の西辺には本来蓋板が架かっていたと考えられる。また、蓋板の上には地山ブロックを含んだ暗灰色粘質土や灰色粘質土、灰褐色粘質土が盛られており、本来は蓋板は埋め込まれ溝が暗渠状になっていたと思われる。

これらの建物跡に伴う大銀治関連の遺構は、古段階の建物跡が1号炉と4号炉、新段階の建物跡が1号炉と2・3号炉である。つまり、1号炉は新旧両段階を通して使われているが、4号炉は新段階の建物が作られる際に粘土面の下に埋め戻され、その北側の拡張部分に2・3号炉が営まれたことが明らかになっている。

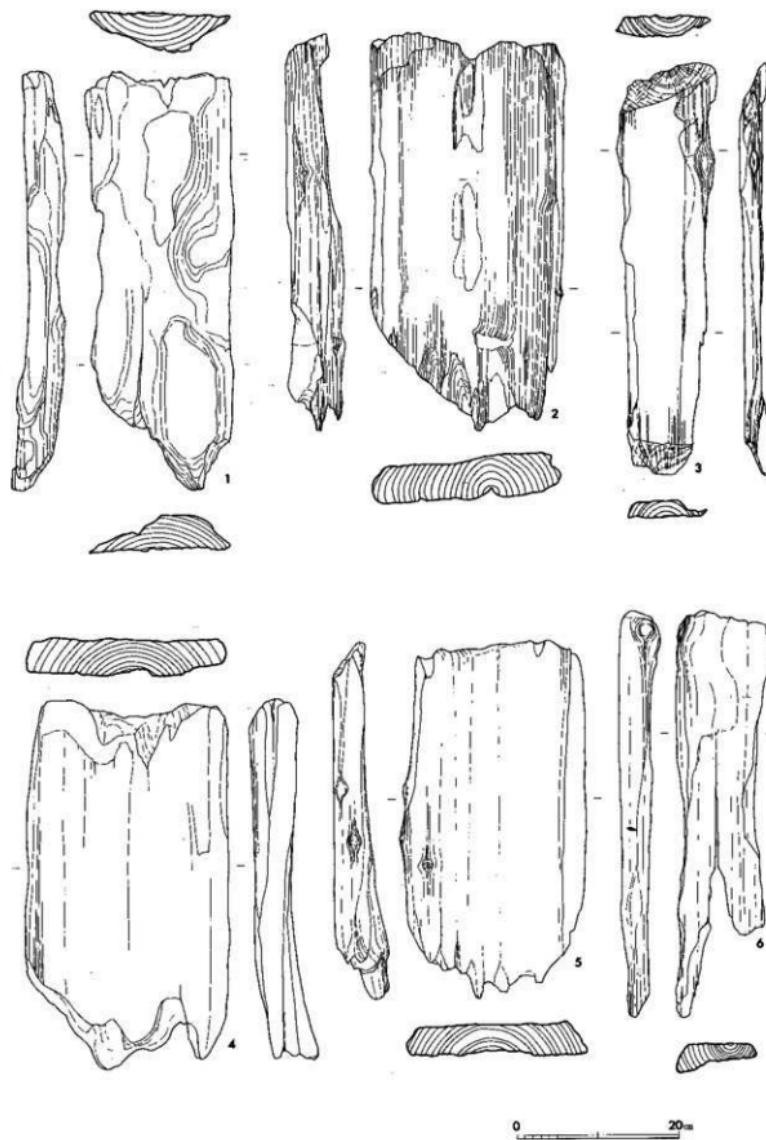
1号炉の北東1.5mには鉄砧抜取状遺構があり、周囲には焼土化した粘土面が広がっている。ま



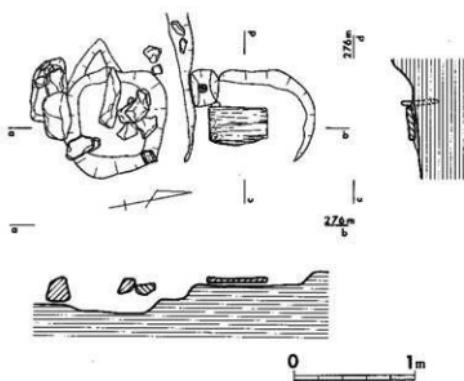
第27図 2号掘立柱建物跡溝2蓋板遺構実測図（1:40）



第28図 2号掘立柱建物跡（大鍛冶場跡）遺構実測図（1:80）

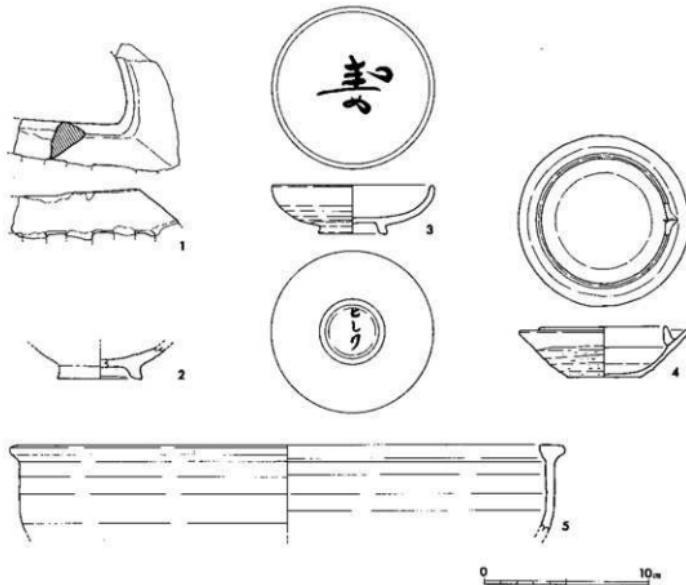


第29図 側溝蓋板実測図 (1:6)



第30図 敷板遺構及び周辺遺構実測図（1：40）

2号掘立柱建物跡に伴う遺物はあまり多くないが、在地系陶器（第31図-3～5）が検出されている。このうち、3は見込みに「寿」と書かれた皿で、口径10.0cm・器高3.0cmである。内済する体部と高台を有し、体部外面及び内面には淡褐色の釉が掛けられているが、高台は露胎である。また、



第31図 1・2号掘立柱建物跡出土陶磁器他実測図（1：3）
1・2：1号掘立柱建物跡、3～5：2号掘立柱建物跡

た、P.3とP.4の間には、浅く掘り込まれた土坑の中に板が敷かれていた（第30図）。敷板は長さ48cm・幅32cm・厚さ4cmのクリ材で、南西隅部に杭が打ち込まれ留められたものと見られる。この南側には1辺0.8～0.9m・深さ20cm程度の浅い土坑があり、内部には石や瓦が転落していた。これらの遺構も大鉄冶作業に伴うものと思われる。

鉄滓捨て場は、建物の南東方向にあり、ここから神戸川の河原に向けて廃棄されている。

高台内面には「ヒシリ」とも読める墨書きがあり、胎土は密、焼成は良好である。4は灯明皿で、口径7.7cm・器高3.0cmである。口縁の一部に灯芯を受ける切れ込みがあり、内面から口縁外面にかけては灰白色の釉がかかる。外面底部は露胎で、回転ヘラケズリが見られる。胎土は密、焼成は良好である。5は鉢で、復原口径34cmである。口縁端部は玉縁状に肥厚し、内外面に淡灰緑色の釉が掛けられている。胎土は密、焼成は良好である。

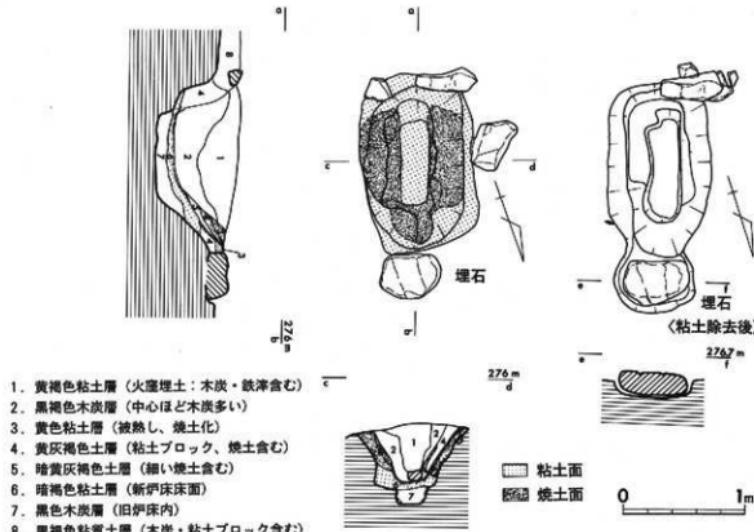
(2) 1号炉 (第32図)

丘陵斜面に対し主軸が平行に置かれたものである。建物跡が建て替えられているのに対応するように1度大きな作り替えが行われ、新旧2つの炉床が見られる。

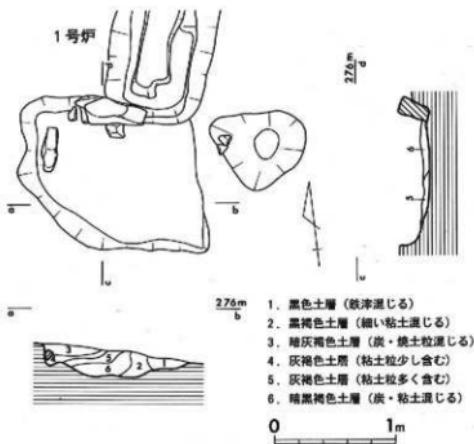
旧炉床は、新炉床に上部を切られているため正確な規模は不明であるが、底面で長さ0.8m、幅0.25mである。両側壁は被熱して赤く酸化しており、内部には黒色木炭層（7層）がある。

新炉床は、旧炉床を主として南と東方向に広げ、その上に暗褐色粘土層（6層）を貼ったもので、掘り方の規模は上端で長さ1.4m、幅0.9m、深さは6層の下で0.5mである。6層は壁面の上部が被熱しており、中心に近い側が還元されて青灰色に、その周辺が赤褐色になっている。6層の内側、すなわち火窓にあたる部分は、上端で長さ1.2m、幅0.7m、深さは0.45mである。縦断面または横断面の観察によれば、6層の内側にさらに粘土ブロック・焼土を含む黄灰褐色土層（5層）、細かい焼土を含む暗黃灰褐色土層（5層）が貼られ、火窓の補修が3回以上繰り返されており、その内側に火窓の中に詰められた黒褐色木炭層（2層）が見られる。なお、黄褐色粘土層（1層）は大鍛冶場跡廃棄時に火窓に詰められた埋土である。

1号炉の北端部には埋石がある。長さ50cm、幅35cm、厚さ18cmの川石を地面に掘り方を設けて据



第32図 1号炉遺構実測図 (1 : 40)



第33図 1号炉南側土坑遺構実測図 (1 : 40)

また、1号炉の南側端部には不整形な土坑（第33図）が見られる。土坑は東西1.5m、南北1.1m、深さは0.25mで、北西側隅部に沿うように板石が置かれており、その位置からすれば1号炉に送風する差し吹き竈が設置されたと考えられる。埋土は鉄滓混じる黒色土層（1層）、細かい粘土が混じる黒褐色土層（2層）、炭・焼土粒混じる暗灰褐色土層（3層）、粘土粒少し含む灰褐色土層（4層）、粘土粒多く含む灰褐色土層（5層）、炭・粘土混じる暗黒褐色土層（6層）が見られ、埋められた状況を示しており、竈設置の痕跡などを確認するには至らなかった。

(3) 2・3号炉 (第34図)

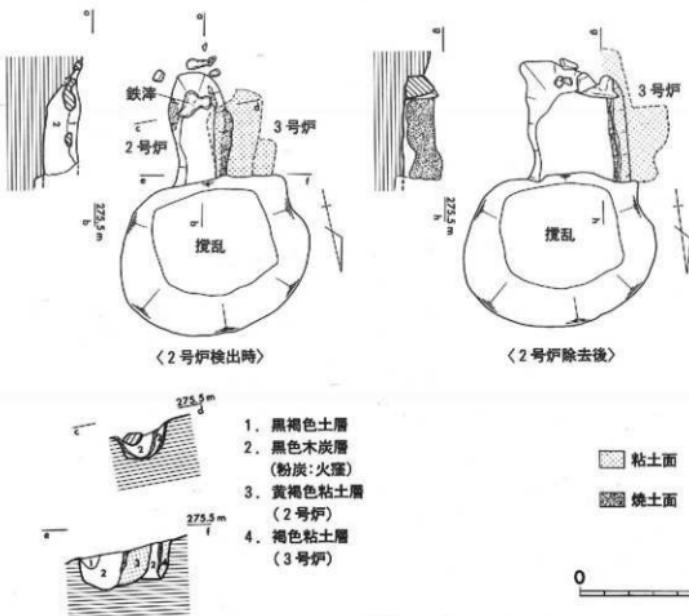
丘陵斜面に対し主軸が平行に作られたもので、1号炉の北4.5mのところに位置している。両者とも北端部を後の攪乱坑によって破壊されており、遺存状況は良好ではないが、3号炉→2号炉の順に2基のが切り合っていることが明らかになっている。

2号炉は現状で長さ0.9m、掘り方幅が0.55m、火窓幅0.34m、深さ0.3mと1号炉に比較して規模がかなり小さいものである。中央部のe-f横断面を見ると、掘り方の西側にのみ黄褐色粘土層（3層）が貼られており、その内壁は被熱して赤くなっている。底面や東壁にはこうした粘土ではなく素掘りのままとなっている。また、c-d横断面を見ると、弱い被熱部が2枚見られ、小規模な補修が行われたことも分かる。火窓の内部には黒色木炭層（2層）があり、その南端部には僅かに内に残留した鉄滓も見られる。

3号炉は大きく2号炉に壊されており、その規模など不明な点が多いが、長さは現状で0.85m、深さは0.3mである。e-f横断面を見ると、2号炉と同様に西壁のみ褐色粘土層（4層）が貼られ、その内壁が被熱して赤くなっている。僅かに残る火窓には黒色木炭層（2層）がある。底面には粘土が貼られておらず、規模・構造とも2号炉と非常に類似しているものと考えられるが、南端部に石を用いる点のみが異なっている。

えており、石の表面は被熱して赤く焼け剥離していた。これは鉄を引き上げる時に、炉の端部が壊れないために埋め込まれたと考えられるものである。⁵

主として鍛打作業の際に出る鍛造剥片・粒状滓の分布は（第45～50図）は、1号炉周辺と鉄滓捨て場付近に高い密度で集中している。これは微小な遺物であり移動し易いため深い遺構には多く入り込む傾向があることから、そのままその位置で鍛打作業が行われたことはならない。しかし、その分布密度を見ると、1号炉北端部の埋石で鍛打が行われた可能性も残っている。



第34図 2・3号炉遺構実測図 (1:40)

(4) 4号炉 (第35図)

丘陵斜面に対し、主軸が直交するように配置されたもので、1号炉の北3mのところに位置している。1号炉と2・3号炉間に敷かれた粘土面の下から検出されたことから、古段階の建物に伴うものと考えられる。

炉床の掘り方は、長さ0.9m、幅0.5m、深さ0.25mである。その内部に黄色粘土層(4層)が薄く貼られており、両側壁の上端が弱く被熱して赤くなっていた。火窓は長さ0.75m、幅0.4m、深さ0.2mで、内部には黒色木炭層(2層)、焼上が混じる黒色木炭層(3層)が見られた。

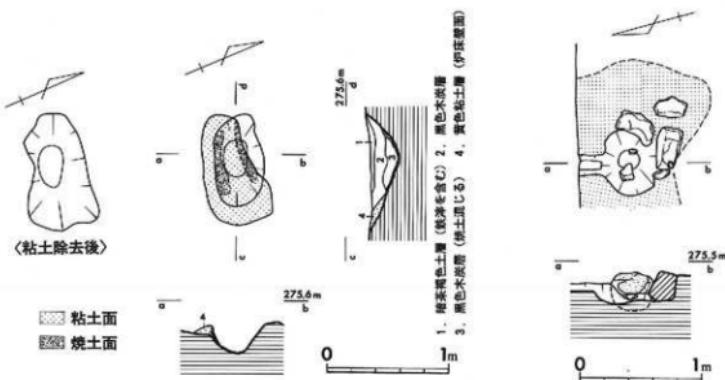
2・3号炉とほとんど変わらない規模・構造をもっていることから、両者はほぼ同様の機能をもっていたと考えられる。しかし、作業場内における1号炉との位置関係については、4号炉は主軸が直交しているのに対し、2・3号炉は平行するように置かれており、大鋳冶場の改修が行われた際にその配置が変更されている。

(5) 鉄砧抜取状遺構 (第36図)

1号炉の北東1.5mに位置するものである。

東西50cm、南北45cm、深さ25cmほどの楕円形を呈しており、南及び東側に石が置かれ、その表面の一部に鉄滓が付着している。北側には幅15cm、深さ5cmほどの深い溝がある。

周囲に焼上化した粘土面があり、鍛造剝片、粒状滓の分布密度も高いことから、鉄砧石が抜き取られ、これを据えた掘り方と根石が残ったものと見ることもできる。



第35図 4号炉遺構実測図 (1:40)

第36図 鉄粘抜取状遺構実測図 (1:40)

(6) 大鋳冶関連遺物

① 遺物整理の方法

大鋳冶関連遺物は、2号掘立柱建物跡（大鋳冶場跡）内に50cm方眼を設定し、基本的にはこれに基づいて取上げを行った。方眼は南から北方向に0・1・2・3……、西から東方向にイ・ロ・ハ・ニ………とし、その北西側交点の名称（例えばイー1……）で、1辺50cmの方眼を呼称することとした。

遺物は下記の流れで整理・分類を行った。



② 1号炉に伴う遺物（第37図）

鍛冶滓・楕形鍛冶滓・火窓壁がある。

1～5は鍛冶滓である。1は分析試料（NKA-1）としたもので、黒色を呈し流動状の精錬鍛冶滓である。火窓の木炭層に入ったためか、全面に顕著な木炭痕が残っている。2～4も淡黒色または黒褐色を呈する流動状の鍛冶滓で、1と同様に木炭痕が顕著である。5は横断面形が逆三角形状を呈する流動状の滓で、幅5cmである。両端が欠損し、上面には小石が付着している。

6は楕形鍛冶滓で、底面が船底状を呈しており、前面に木炭の嗜み込みが認められる。厚さは3.9cmと薄く、周縁はすべて破面である。

7は分析試料（NKA-2）である。表面が鉄滓化した火窓壁の破片で、上半は被熱し淡褐色に変色している。胎土中には多数の木炭の嗜み込みがみられる。

③ 2号炉に伴う遺物（第37・40図）

鍛冶滓・楕形鍛冶滓・再結合滓がある。

9～11は流動状の鍛冶滓である。9は下面・側面に木炭が付着しており、10・11は火窓の木炭層に入ったためか、全面に顕著な木炭痕が残っている。

8・12・33・34は楕形鍛冶滓である。8は分析試料（NKA-11）で、両端は欠損しているが、幅7.5cm、厚さ2.8cmと小形である。淡黒褐色を呈する流動状の精錬鍛冶滓で、下面には幅2.7cmの棒状の工具痕が残っている。12は分析試料（NKA-12）で、含鉄楕形鍛冶滓の端部破片である。幅は12.9cm+δ、厚さは6.4cmで、横断面は船底状を呈している。下半部に比較的緻密な滓層、上半部に気孔の多い滓層が形成されている。全体に多数の木炭が嗜み込んでおり、底面には工具痕が残っている。メタル度⁶はH（○）である。33は隅部の一部を残し、厚さ11.5cmで、木炭が多量に嗜み込んでいる。34は片側の側縁を残すもので、厚さは5cmと薄く、木炭が多量に嗜み込む。

13は再結合滓である。小さな窪みに鍛冶滓・石・粘土・木炭が溜り再結合したものと見られ、長さ12.0cm、幅14.8cm、厚さ7.7cmである。

④ 4号炉に伴う遺物（第38図）

鍛冶滓・再結合滓がある。

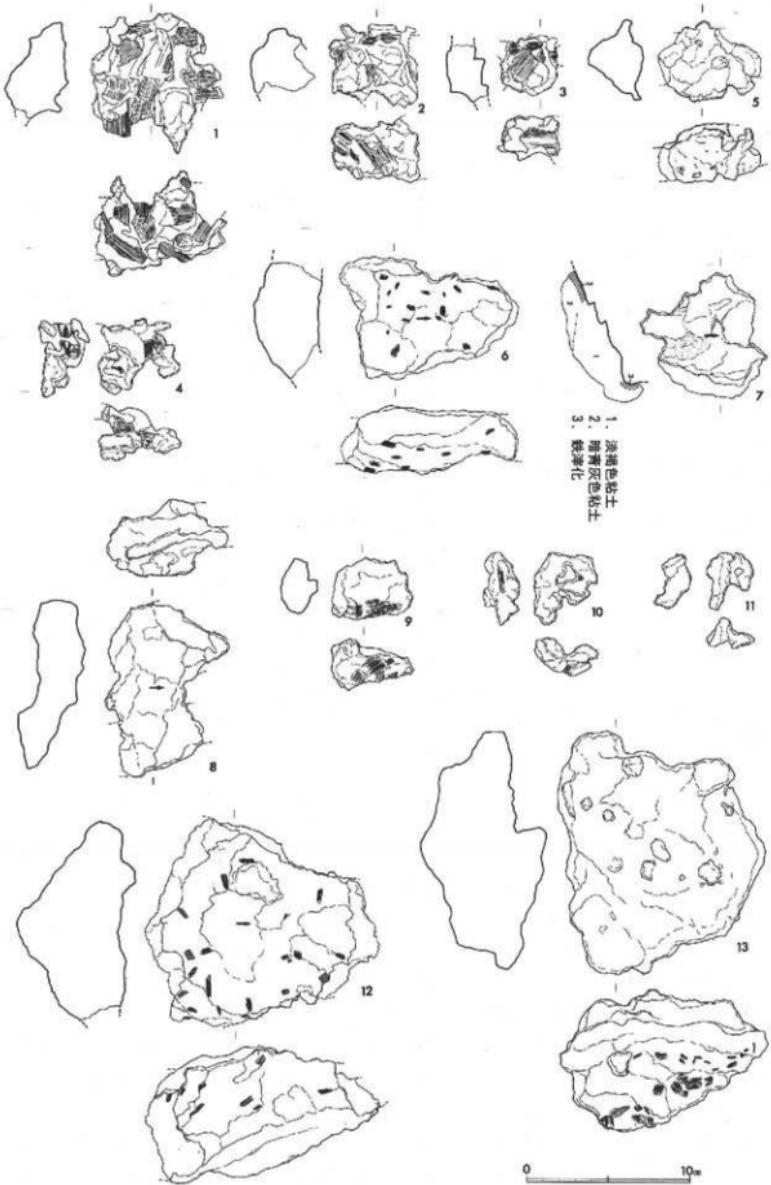
14は分析試料（NKA-7）である。小形の精錬鍛冶滓で、表面に細かい木炭が見られる。

15～17は含鉄再結合滓である。15は分析試料（NKA-8）で、白銅鉄、粒状滓、鍛造剥片などが固着しており、メタル度はL（●）である。16は酸化上砂、木炭、石などが固着しており、メタル度はL（●）である。17は片側の周縁が残るもので、鉄塊、土砂、木炭片、粒状滓などが見られ、メタル度はM（◎）である。

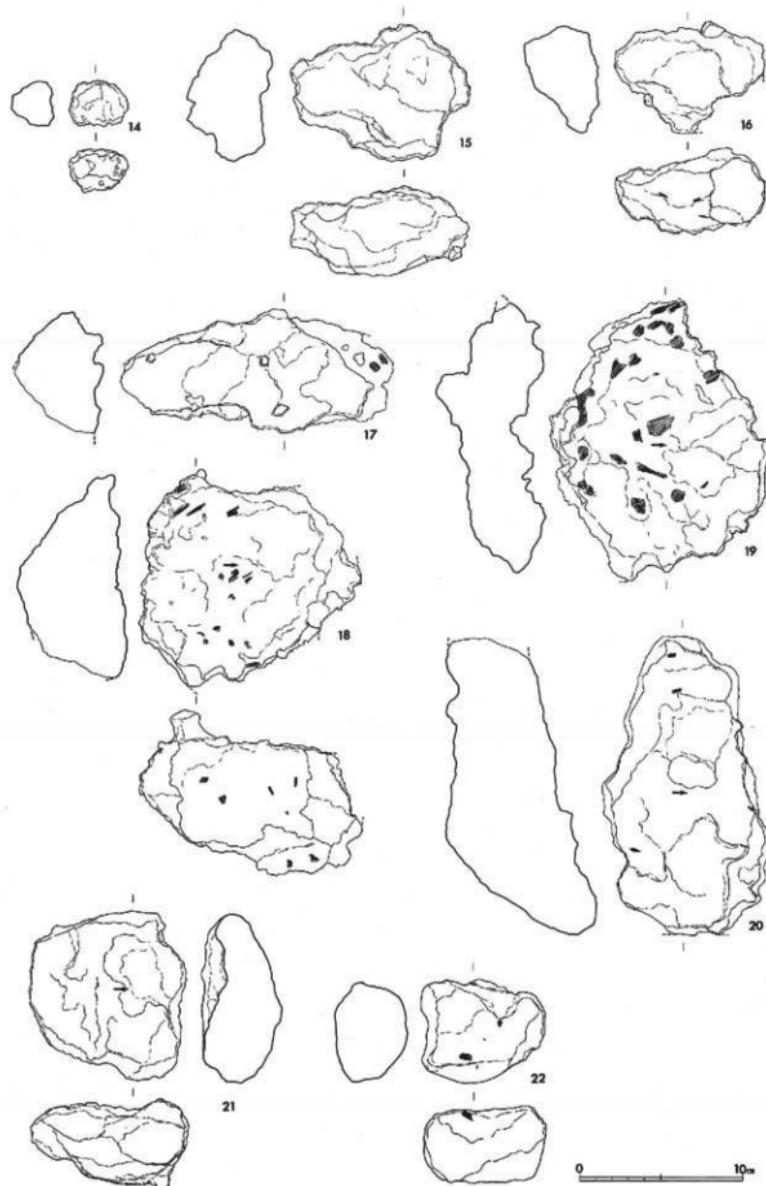
⑤ 倒溝周辺部の出土遺物（第38・40・42図）

楕形鍛冶滓、火窓壁、羽口、含鉄鍛冶滓がある。

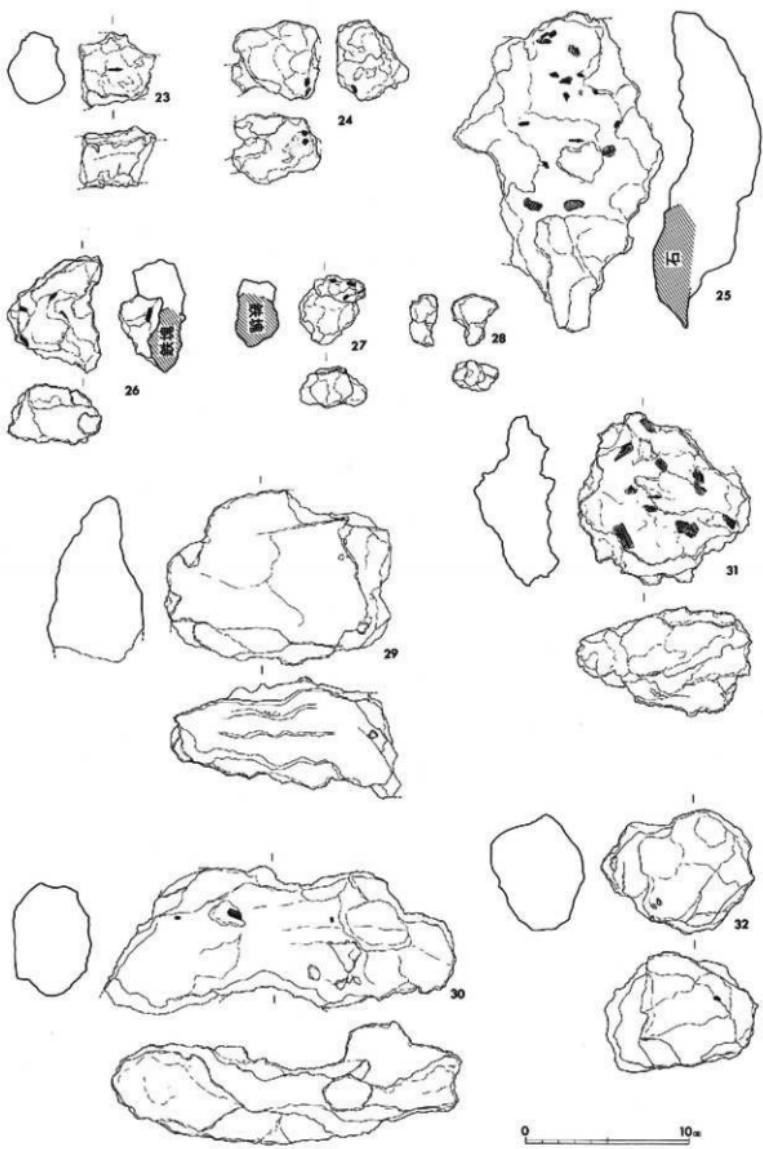
18～21、35～39は楕形鍛冶滓で、20・21・35が含鉄である。このうち、20は分析試料（NKA-17）で、メタル度は特L（☆）である。鉄塊部分は炭素量が高い過共析鋼である。35は分析試料（NKA-16）で、メタル度は特L（☆）である。鉄塊部分はフェライトまたはパーライトで炭素量にバラツキがある。37は分析試料（NKA-5）で、精錬鍛冶滓である。長さ26.8cm、幅16.0cm、厚さ8.3cmで、ほぼ完形であることから、これが木炭を敷き詰めた火窓の規模・形状を示すものと見られる。底面には工具痕が5ヶ所ほど確認できる。39は分析試料（NKA-15）で、精錬鍛冶滓



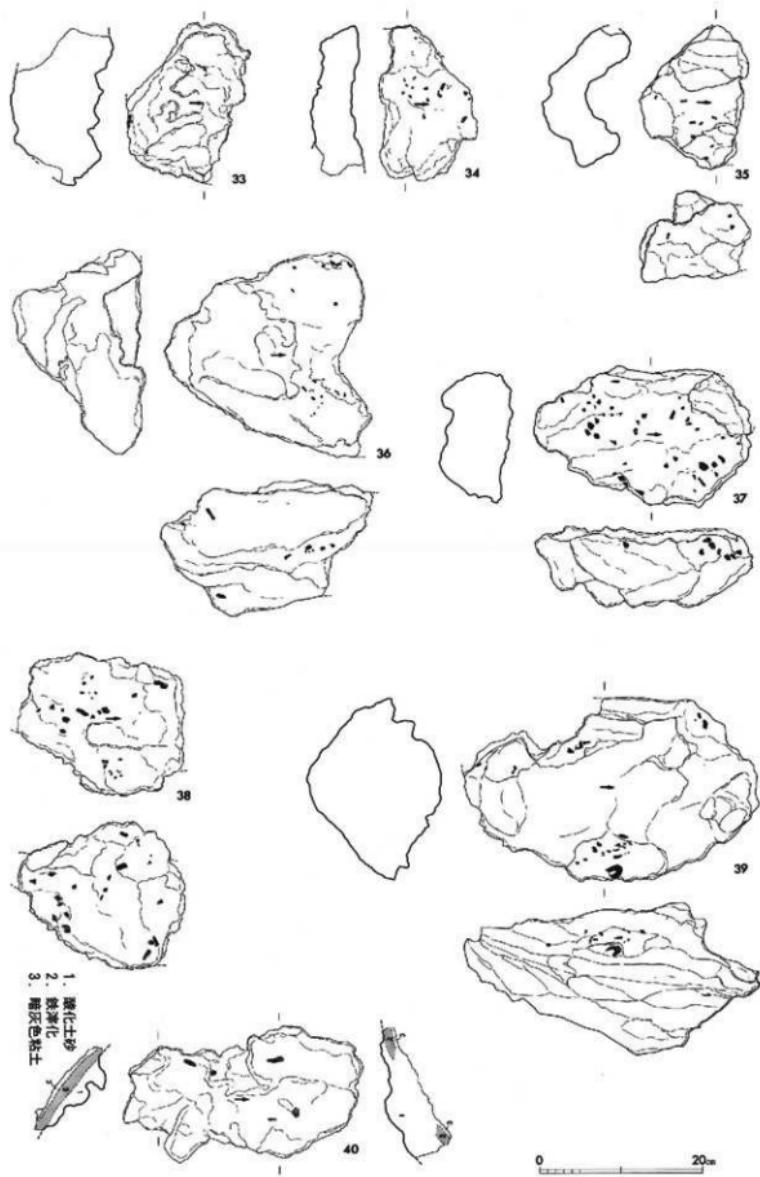
第37図 大鍛冶場跡 1・2号炉出土鉄滓実測図 (1 : 3)



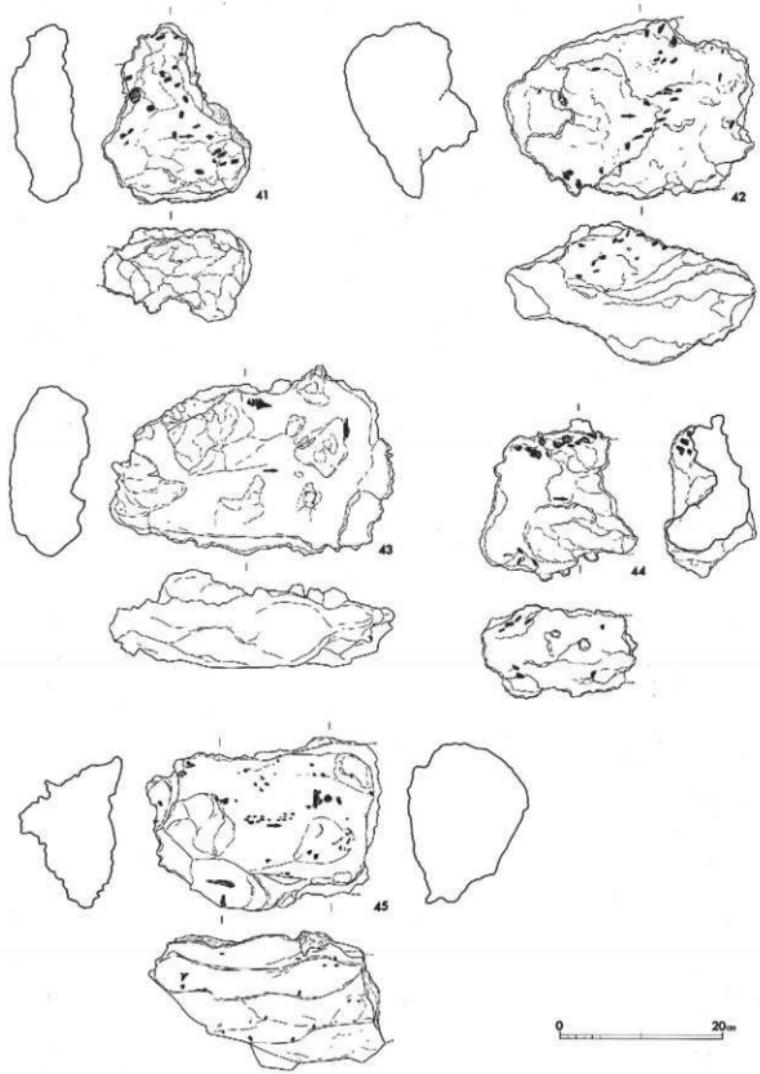
第38図 大鍛冶場跡 4号炉・側溝周辺出土遺物実測図 (1 : 3)



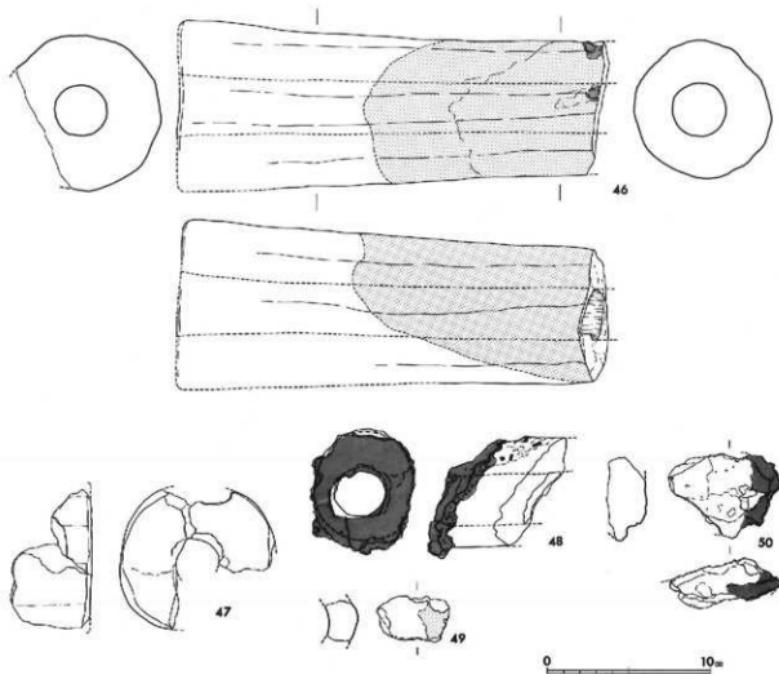
第39図 鉄津捨て場他出土遺物実測図 (1 : 3)



第40図 大鍛冶場跡 2号炉・側溝周辺出土遺物実測図 (1:4)



第41図 大銅治場跡鉄滓捨て場他出土遺物実測図 (1 : 4)



第42図 大鐵冶場跡出土羽口実測図（1：3）

である。ほぼ完形で、大きさは長さ36.1cm、幅22.4cm、厚さ16.5cmと37よりもかなり厚く、大きい。

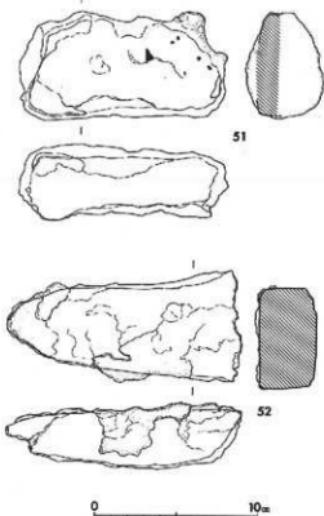
18と21は小形の楕円形鐵冶爐である。前者は長さ13.5cm、幅13.5cm、厚さ6.0cm、後者は長さ9.5cm、幅10.5cm、厚さ5.5cmで、メタル度は特L（☆）である。19は楕円形爐の先端部で、厚さは5.0cmと薄い。

36・38は大形の楕円形鐵冶爐破片である。36は端部の上面が凹むという羽口前面の爐の状況を良く留めており、幅25.2cm、厚さ16.0cmである。38は側縁部の破片で、厚さは18cmと非常に厚い。

40は火窓壁である。周縁はすべて破面であるが、緩やかに外傾する火窓壁の形状を良く残している。横断面は内壁に酸化上砂が厚く付着しているが、その下に津層、暗灰色粘土が見られる。

46は羽口で、分析試料（NKA-6）である。先端部は欠け落ちた後、若干被熱しており、現状で長さ26.4cm、外径10.0cm、内径3.3cmである。胎土中には細かいスサや粗粒が混和されており、耐火度は1555°Cと良い。

22は含鉄鐵冶爐で、メタル度はL（●）である。鐵塊の周囲に酸化した土砂や木炭、粒状滓などが付着している。



第43図 大鐵冶場跡出土粗鉄錠実測図 (1 : 3)

はバラツキがある。27は分析試料 (NAK-20) で、マルテンサイトと微細バーライトが見られ、急冷されたものと見られる。

29・30は再結合滓である。29は含鉄でメタル度はL (●)、木炭片、粒状滓、酸化土砂などが層状に見られる。30は分析試料 (NAK-21) で、鐵造剥片、粒状滓、白鑄鉄、木炭片などが酸化した土砂とともに固着している。

⑦その他の遺物 (第39・41・43図)

31・42~45は楕形鐵冶滓である。このうち、42は分析試料 (NAK-23) で、ほぼ完形品である。長さは30.6cm、幅22.0cm、厚さ16.8cmで、精鍊鐵冶滓である。44は分析試料 (NAK-24) で、幅18.0cm、厚さ11.2cmである。白鑄鉄・過共析鋼など炭素量が高めの鉄塊が見られる。43は完形品で、長さは35.3cm、幅21.0cm、厚さ11.5cmである。45は端部を欠損するが、長さ28.8cm、幅19.5cm、厚さ16.5cmである。

32は分析試料 (NAK-25) で、含鉄鐵滓、メタル度はL (●) である。亞共析鋼～過共析鋼と炭素量の高い鉄塊である。

51・52は粗鉄錠である。51は分析試料 (NAK-26) で、長さ12.0cm、幅6.4cm、厚さ3.0cmである。亞共析鋼であるが、精鍊鐵冶組織のヴスタイトの出る半製品である。52は分析試料 (NAK-27) で、長さ14.4cm、幅7.0cm、厚さ3.5cmである。端部は一方が斜めに成形され、一方は整で断ち落されている。亞共析鋼であるが、局部的に急冷組織のマルテンサイトも見られる。精鍊鐵冶組織のヴスタイトの残る半製品である。

⑥鐵滓捨て場の遺物 (第39・41・42図)

楕形鐵冶滓、流出溝滓、羽口、含鉄鐵滓、再結合滓が検出されている。

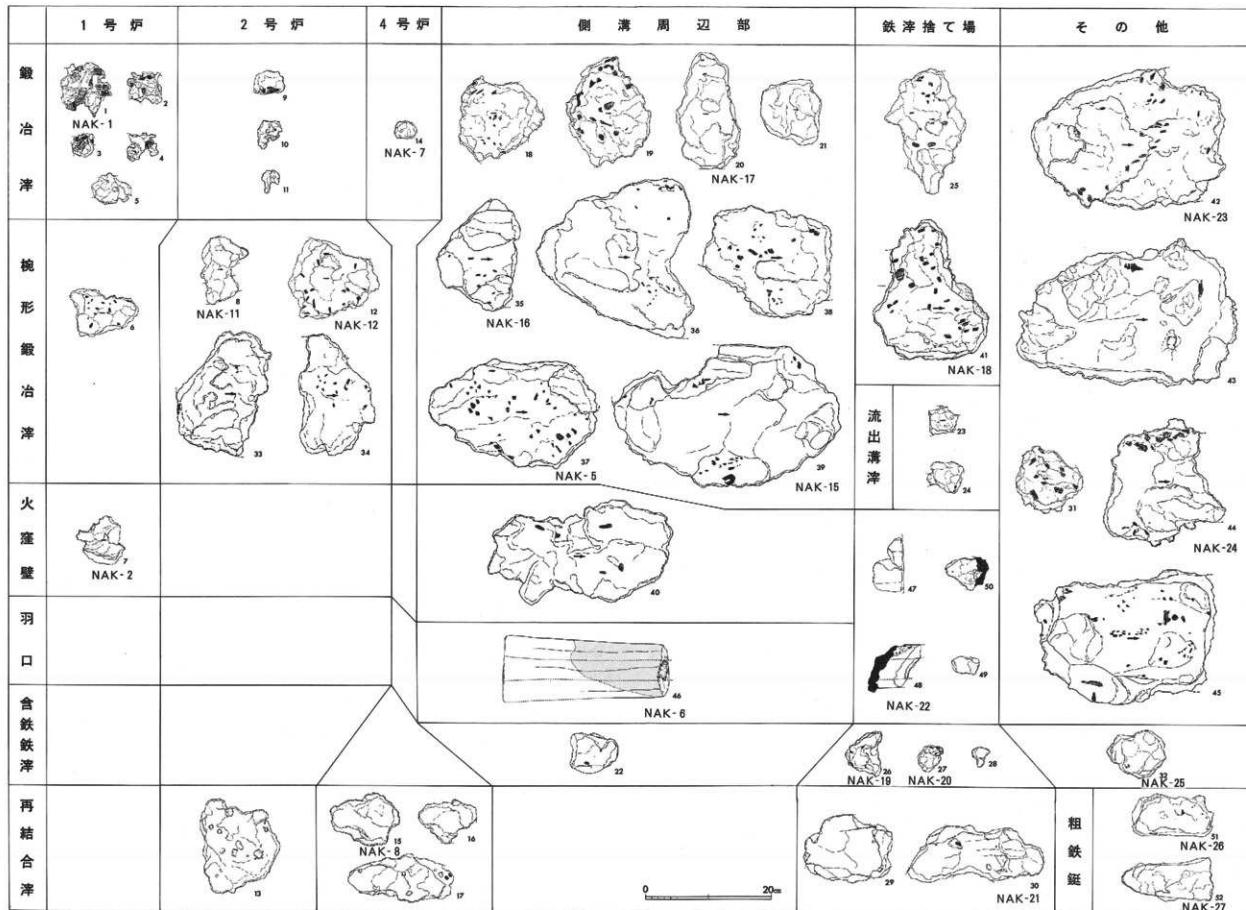
25・41は含鉄楕形鐵冶滓で、ともに端部の破片である。25はメタル度はL (●) で、幅17.5cm、厚さ4.2cmを測る。41は分析試料 (NAK-18) で、メタル度は特L (☆) である。幅22.0cm、厚さ7.0cmで、鉄塊部分は低炭素系のフェライトである。

23・24は流出溝滓である。23は幅4.5cm、厚さ3.0cmで、淡黒色の流動性のよい滓である。24は滓の表面が流動滓状を呈するが、破面はガラス質滓になっており、羽口先滓の可能性がある。

47~50は羽口である。47は基部の破片で、外径9.0cm、内径2.7cmである。胎土中には粉殻が含まれている。48は分析試料 (NAK-22) である。外径6.0~6.4cm、内径3.2cmで、羽口先溶融部の角度は60°である。耐火度は1320°Cと46に比べ低い。

26~28は含鉄鐵滓で、メタル度はL (●) である。26は分析試料 (NAK-19) で、鉄塊部の炭素量にはバラツキがある。

27は分析試料 (NAK-20) で、マルテンサイトと微細バーライトが見られ、急冷されたものと見られる。



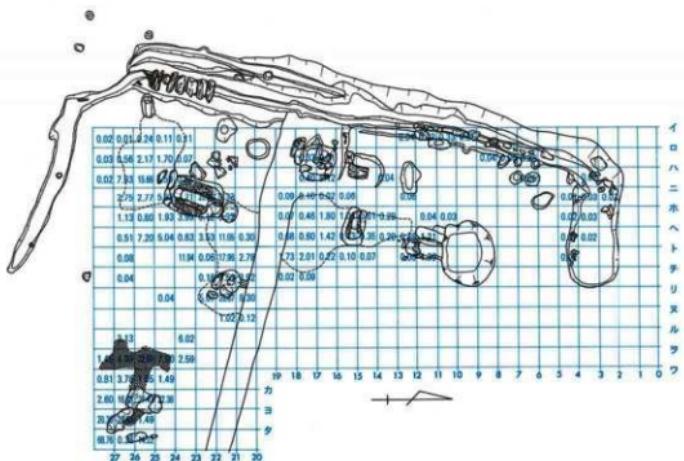
第44図 大鍛冶関連遺物構成図 (1 : 6)

第1表 大鍛冶場跡出土粒状滓、鍛造剝片ほか地点別計測値一覧表

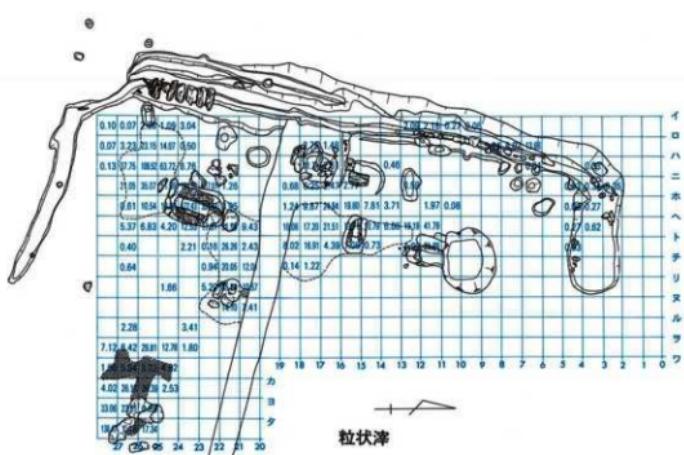
| 出土面積 | 粒 状 濁 | | | | 鍛 造 剥 片 | | | | 微小遺物 (g) | 鐵 濁 (g) | |
|------|---------|-----------|-----------|---------|---------|---------|-----------|-----------|-------------|------------|--------|
| | 1.0mm以下 | 1.1~2.5mm | 2.6~5.0mm | 5.1mm以上 | 合計(g) | 1.0mm以下 | 1.1~2.5mm | 2.6~5.0mm | 5.1mm以上 | 合計(g) | |
| イ-9 | 0.03 | 1.62 | 0.26 | 0.22 | 2.13 | 0.01 | 0.04 | | | 0.05 | 50.10 |
| イ-10 | 0.02 | 0.42 | 0.09 | 2.74 | 3.27 | 0.03 | 0.30 | | | 0.33 | 43.11 |
| イ-11 | 0.01 | 0.60 | 0.68 | 0.89 | 2.18 | 0.01 | 0.01 | | | 0.02 | 26.43 |
| イ-12 | 0.02 | 0.74 | 0.75 | 0.58 | 2.09 | 0.01 | 0.03 | | | 0.04 | 25.50 |
| イ-23 | 0.05 | 0.37 | 2.62 | | 3.04 | 0.01 | 0.02 | | | 0.03 | 8.83 |
| イ-24 | 0.01 | 0.66 | 0.42 | | 1.09 | 0.01 | 0.07 | 0.03 | | 0.11 | 24.59 |
| イ-25 | 0.01 | 1.57 | 0.50 | | 2.06 | 0.03 | 0.20 | 0.01 | | 0.24 | 48.42 |
| イ-26 | | 0.07 | | | 0.07 | | 0.01 | | | 0.01 | 17.71 |
| イ-27 | | 0.01 | | | 0.01 | | 0.02 | | | 0.02 | 6.73 |
| ロ-6 | 0.10 | 7.19 | 3.15 | 3.42 | 13.86 | 0.02 | 0.23 | 0.03 | | 0.28 | 140.67 |
| ロ-7 | 0.05 | 4.52 | 1.99 | 1.51 | 8.07 | 0.01 | 0.05 | | | 0.06 | 97.09 |
| ロ-8 | 0.03 | 3.07 | 1.44 | 0.70 | 5.24 | 0.01 | 0.03 | | | 0.04 | 63.57 |
| ロ-16 | 0.01 | 1.47 | | | 1.48 | | 0.01 | | | 0.01 | 18.03 |
| ロ-17 | 0.04 | 2.25 | 0.32 | 0.14 | 2.75 | 0.01 | 0.32 | | | 0.33 | 38.44 |
| ロ-23 | 0.01 | 0.18 | 0.31 | | 0.50 | 0.01 | 0.05 | 0.01 | | 0.07 | 40.03 |
| ロ-24 | 0.03 | 10.36 | 2.44 | 1.24 | 14.07 | 0.10 | 1.46 | 0.14 | | 1.70 | 113.72 |
| ロ-25 | 0.21 | 15.76 | 5.99 | 1.19 | 23.15 | 0.04 | 1.96 | 0.07 | 0.10 | 2.17 | 191.10 |
| ロ-26 | 0.04 | 1.51 | 1.01 | 0.67 | 3.23 | 0.08 | 0.47 | 0.01 | | 0.56 | 60.17 |
| ロ-27 | | 0.07 | | | 0.07 | | 0.02 | 0.01 | | 0.03 | 5.78 |
| ハ-3 | 0.01 | 0.21 | 0.11 | | 0.33 | 0.01 | 0.01 | | | 0.02 | 19.02 |
| ハ-5 | 0.03 | 0.42 | 0.16 | 0.36 | 0.61 | 0.03 | 0.02 | | | 0.05 | 12.92 |
| ハ-13 | 0.01 | 0.38 | 0.07 | | 0.46 | 0.01 | 0.03 | | | 0.04 | 19.05 |
| ハ-16 | 0.02 | 1.87 | 0.28 | 0.44 | 2.61 | 0.01 | 0.11 | | | 0.12 | 52.20 |
| ハ-17 | 0.11 | 8.92 | 2.13 | 0.15 | 11.31 | 0.08 | 0.38 | | | 0.40 | 41.88 |
| ハ-23 | 0.63 | 4.55 | 1.58 | | 6.76 | 0.08 | 0.16 | | | 0.24 | 51.34 |
| ハ-24 | 0.36 | 46.33 | 13.94 | 3.09 | 63.72 | 0.12 | 4.00 | 0.21 | 0.17 | 4.50 | 161.44 |
| ハ-25 | 0.46 | 74.30 | 25.50 | 9.26 | 109.52 | 0.69 | 14.77 | 0.20 | | 15.66 | 282.65 |
| ハ-26 | 0.34 | 27.89 | 7.47 | 2.05 | 37.75 | 0.52 | 7.35 | 0.06 | | 7.93 | 109.68 |
| ハ-27 | 0.06 | 0.07 | | | 0.13 | 0.01 | 0.01 | | | 0.02 | 4.55 |
| ニ-2 | 0.02 | 0.14 | 0.19 | | 0.35 | 0.01 | 0.01 | | | 0.02 | 17.90 |
| ニ-3 | 0.01 | 0.10 | 0.09 | 0.14 | 0.34 | 0.01 | 0.02 | | | 0.03 | 23.58 |
| ニ-4 | 0.01 | 0.02 | | | 0.03 | 0.01 | | | | 0.01 | 4.66 |
| ニ-12 | 0.03 | 0.27 | 0.29 | | 0.59 | 0.01 | 0.05 | | | 0.06 | 15.58 |
| ニ-15 | 0.05 | 1.81 | 0.85 | 0.06 | 2.77 | 0.03 | 0.03 | | | 0.06 | 38.17 |
| ニ-16 | 0.04 | 1.63 | 0.47 | 0.33 | 2.47 | 0.01 | 0.01 | | | 0.02 | 15.27 |
| ニ-17 | 0.08 | 4.28 | 1.09 | 0.80 | 6.25 | 0.01 | 0.09 | | | 0.10 | 70.40 |
| ニ-18 | 0.02 | 0.52 | 0.14 | | 0.68 | 0.03 | 0.06 | | | 0.09 | 6.66 |
| ニ-21 | 0.03 | 1.05 | 0.18 | | 1.26 | 0.09 | 0.24 | | | 0.33 | 7.96 |
| ニ-22 | 2.84 | 271.69 | 106.48 | 36.00 | 417.01 | 0.98 | 17.92 | 1.81 | 0.09 | 20.80 | 771.60 |
| ニ-23 | 1.68 | 104.04 | 32.15 | 5.65 | 144.52 | 0.61 | 6.08 | 0.48 | 0.04 | 7.21 | 563.07 |
| ニ-24 | 0.29 | 32.79 | 12.89 | 5.12 | 51.09 | 0.25 | 4.52 | 0.45 | 0.10 | 5.32 | 287.99 |
| ニ-25 | 0.25 | 22.67 | 8.81 | 3.34 | 35.07 | 0.16 | 2.41 | 0.20 | | 2.77 | 104.02 |
| ニ-26 | 0.27 | 15.16 | 4.31 | 1.31 | 21.05 | 0.11 | 2.55 | 0.09 | | 2.75 | 51.49 |
| ホ-3 | 0.01 | 0.09 | 0.02 | 0.15 | 0.27 | 0.01 | 0.02 | | | 0.03 | 13.38 |
| ホ-4 | 0.02 | 0.01 | | | 0.03 | 0.01 | 0.01 | | | 0.02 | 5.23 |
| ホ-10 | 0.06 | 0.02 | | | 0.08 | 0.02 | 0.01 | | | 0.03 | 4.48 |
| ホ-11 | 0.04 | 1.16 | 0.77 | | 1.97 | 0.01 | 0.03 | | | 0.04 | 39.94 |
| ホ-13 | 0.05 | 2.63 | 0.67 | 0.35 | 3.71 | 0.02 | 0.27 | | | 0.29 | 101.04 |
| ホ-14 | 0.06 | 4.25 | 1.91 | 1.59 | 7.81 | 0.03 | 0.56 | 0.02 | | 0.61 | 204.94 |
| ホ-15 | 0.30 | 14.32 | 3.86 | 1.32 | 19.80 | 0.18 | 0.83 | | | 1.01 | 285.74 |
| ホ-16 | 0.27 | 16.97 | 5.31 | 2.29 | 24.84 | 0.16 | 1.57 | 0.03 | 0.04 | 1.80 | 272.81 |
| ホ-17 | 0.10 | 6.81 | 1.78 | 1.18 | 9.87 | 0.07 | 0.39 | | | 0.46 | 90.00 |
| ホ-18 | 0.02 | 1.12 | 0.08 | | 1.24 | 0.01 | 0.06 | | | 0.07 | 23.30 |
| ホ-21 | 0.05 | 3.55 | 0.35 | | 3.95 | 0.05 | 1.27 | | | 0.32 | 26.68 |
| ホ-23 | 1.31 | 211.85 | 104.24 | 34.04 | 351.44 | 0.27 | 5.40 | 0.36 | 0.09 | 6.12 | 599.34 |
| ホ-23 | 1.33 | 104.13 | 47.71 | 19.26 | 172.43 | 0.29 | 3.57 | 0.13 | | 3.99 | 329.65 |
| ホ-24 | 0.08 | 9.05 | 1.72 | | 10.89 | 0.06 | 1.62 | 0.23 | 0.02 | 1.93 | 67.87 |
| ホ-25 | 0.12 | 7.15 | 2.00 | 1.27 | 10.54 | 0.06 | 0.69 | 0.05 | | 0.80 | 77.25 |
| ホ-26 | 0.02 | 0.37 | 0.12 | 0.10 | 0.61 | 0.05 | 0.76 | 0.32 | | 1.13 | 16.64 |
| ハ-3 | 0.04 | 0.16 | 0.10 | 0.32 | 0.62 | 0.01 | 0.01 | | | 0.02 | 5.23 |
| ハ-4 | 0.05 | 0.18 | 0.04 | | 0.27 | 0.01 | 0.06 | | | 0.07 | 16.78 |
| | | | | | | | | | | | 180.0 |

第2表 大鋼冶場跡出土粒状滓、鐵造剝片ほか地点別計測値一覧表

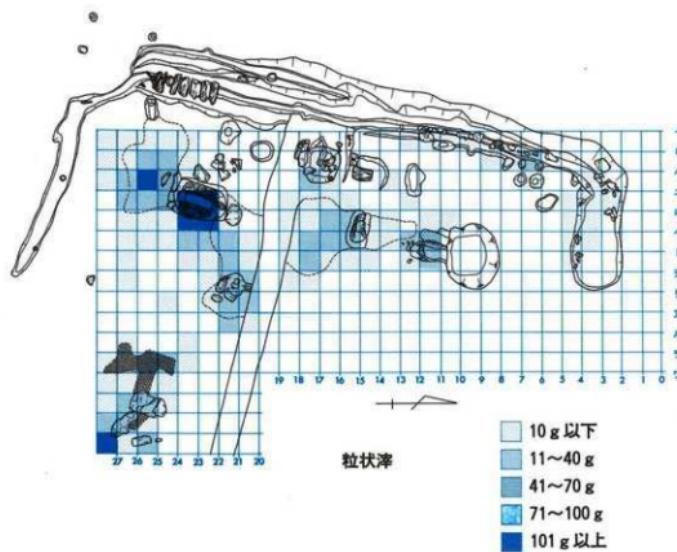
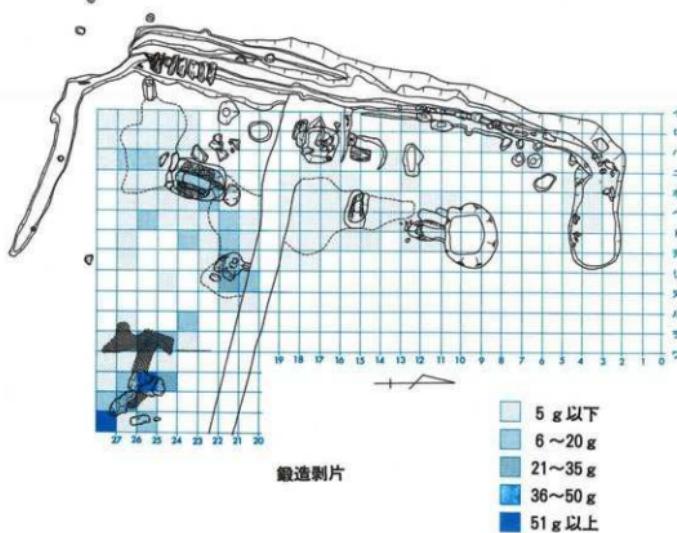
| 出土位置 | 粒 状 汚 | | | | 鐵 造 剥 片 | | | | 微小遺物 (g) | 統 計 (g) | |
|------|---------|-----------|-----------|---------|---------|---------|-----------|-----------|-------------|------------|----------|
| | 1.0mm以下 | 1.1~2.5mm | 2.6~5.0mm | 5.1mm以上 | 合計(g) | 1.0mm以下 | 1.1~2.5mm | 2.6~5.0mm | 5.1mm以上 | 合計(g) | |
| ～-11 | 0.26 | 21.02 | 14.13 | 6.38 | 41.79 | 0.08 | 1.08 | 0.05 | — | 1.21 | 332.35 |
| ～-12 | 0.12 | 9.19 | 6.91 | 2.97 | 19.18 | 0.06 | 0.35 | 0.07 | — | 0.48 | 217.15 |
| ～-13 | 0.01 | 2.86 | 1.86 | 1.27 | 6.00 | 0.02 | 0.15 | 0.03 | — | 0.20 | 79.17 |
| ～-14 | 0.07 | 6.18 | 2.82 | 1.72 | 10.79 | 0.04 | 0.30 | 0.01 | — | 0.35 | 139.43 |
| ～-15 | 0.27 | 9.87 | 3.57 | 0.76 | 13.71 | 0.04 | 0.44 | — | — | 0.48 | 177.90 |
| ～-16 | 0.20 | 17.02 | 3.92 | 0.37 | 21.51 | 0.08 | 1.34 | — | — | 1.42 | 218.73 |
| ～-17 | 0.26 | 12.86 | 3.27 | 0.81 | 17.20 | 0.12 | 0.46 | 0.02 | — | 0.60 | 98.30 |
| ～-18 | 0.15 | 6.78 | 2.06 | 1.09 | 10.88 | 0.07 | 0.55 | 0.05 | — | 0.68 | 53.65 |
| ～-19 | 0.08 | 6.19 | 2.33 | 0.82 | 9.43 | 0.04 | 0.25 | 0.01 | — | 0.30 | 37.31 |
| ～-21 | 0.71 | 18.45 | 9.40 | 3.00 | 31.56 | 0.59 | 9.54 | 0.64 | 0.28 | 11.05 | 152.80 |
| ～-22 | 0.05 | 9.93 | 6.15 | 1.65 | 17.81 | 0.13 | 3.35 | 0.15 | — | 3.53 | 83.80 |
| ～-23 | 0.34 | 12.19 | — | — | 12.53 | 0.14 | 0.59 | — | — | 0.63 | 119.65 |
| ～-24 | 0.03 | 3.37 | 0.80 | — | 4.20 | 0.06 | 4.74 | 0.18 | 0.06 | 5.04 | 32.99 |
| ～-25 | 0.04 | 4.71 | 2.08 | — | 6.83 | 0.04 | 1.60 | 0.40 | 0.06 | 7.20 | 52.56 |
| ～-26 | 0.04 | 3.20 | 1.73 | 0.40 | 5.37 | 0.03 | 0.39 | 0.09 | — | 0.51 | 30.83 |
| ト-4 | 0.01 | 0.02 | — | — | 0.03 | 0.01 | 0.01 | — | — | 0.02 | 9.25 |
| ト-11 | 0.50 | 9.72 | 7.63 | 4.05 | 21.88 | 0.09 | 1.97 | 0.20 | 0.03 | 1.39 | 80.90 |
| ト-12 | 0.03 | 0.86 | 0.46 | 0.55 | 1.90 | 0.02 | 0.04 | — | — | 0.06 | 101.69 |
| ト-14 | 0.01 | 0.33 | 0.14 | 0.25 | 0.73 | 0.01 | 0.06 | — | — | 0.07 | 15.82 |
| ト-15 | 0.02 | 0.48 | 0.24 | 0.34 | 1.08 | 0.01 | 0.09 | — | — | 0.10 | 13.57 |
| ト-16 | 0.04 | 3.88 | 0.47 | — | 4.39 | 0.01 | 0.21 | — | — | 0.22 | 42.89 |
| ト-17 | 0.15 | 10.48 | 4.40 | 1.88 | 16.81 | 0.10 | 1.84 | 0.07 | — | 2.01 | 134.76 |
| ト-18 | 0.05 | 5.65 | 2.32 | — | 8.02 | 0.05 | 0.91 | 0.06 | 0.71 | 1.73 | 98.28 |
| ト-20 | 0.02 | 1.34 | 0.66 | 0.41 | 2.43 | 0.22 | 2.50 | 0.06 | — | 2.78 | 19.19 |
| ト-21 | 0.26 | 13.91 | 6.57 | 5.52 | 26.26 | 0.45 | 17.22 | 0.29 | — | 17.96 | 77.95 |
| ト-22 | 0.01 | 0.11 | 0.04 | — | 0.16 | 0.01 | 0.05 | — | — | 0.06 | 2.78 |
| ト-23 | 0.09 | 1.96 | 0.05 | 0.11 | 2.21 | 0.61 | 10.73 | 0.60 | — | 11.94 | 19.56 |
| ト-26 | 0.01 | 0.30 | 0.09 | — | 0.40 | 0.01 | 0.07 | — | — | 0.08 | 13.12 |
| チ-17 | 0.04 | 0.73 | 0.31 | 0.14 | 1.22 | 0.04 | 0.05 | — | — | 0.09 | 16.24 |
| チ-18 | 0.01 | 0.13 | — | — | 0.14 | 0.01 | 0.01 | — | — | 0.02 | 32.26 |
| チ-20 | 0.15 | 6.78 | 4.53 | 0.56 | 12.01 | 0.10 | 2.32 | 1.41 | 0.09 | 3.92 | 165.66 |
| チ-21 | 0.24 | 13.24 | 4.56 | 2.01 | 20.05 | 0.30 | 7.13 | 0.08 | — | 7.51 | 440.40 |
| チ-22 | 0.01 | 0.53 | 0.27 | 0.13 | 0.94 | 0.01 | 0.17 | — | — | 0.18 | 32.48 |
| チ-26 | 0.02 | 0.23 | 0.10 | 0.29 | 0.64 | 0.01 | 0.03 | — | — | 0.04 | 16.02 |
| リ-20 | 0.05 | 8.61 | 1.74 | 0.17 | 10.57 | 0.15 | 8.15 | — | — | 8.30 | 206.15 |
| リ-21 | 0.23 | 24.53 | 7.37 | 3.71 | 35.84 | 0.60 | 25.61 | 0.46 | — | 26.67 | 714.76 |
| リ-22 | 0.04 | 4.03 | 0.72 | 0.41 | 5.20 | 0.10 | 5.57 | — | — | 5.67 | 48.00 |
| リ-24 | 0.01 | 1.28 | 0.37 | — | 1.66 | 0.01 | 0.03 | — | — | 0.04 | 16.35 |
| ヌ-20 | 0.05 | 2.90 | 2.17 | 2.29 | 7.41 | 0.02 | 0.10 | — | — | 0.12 | 101.23 |
| ヌ-21 | 0.05 | 9.04 | 3.02 | 1.93 | 14.10 | 0.01 | 1.01 | — | — | 1.02 | 74.76 |
| ル-23 | 0.11 | 2.63 | 0.67 | — | 3.41 | 0.90 | 5.12 | — | — | 6.02 | 47.87 |
| ル-26 | 0.01 | 1.49 | 0.78 | — | 2.28 | 0.10 | 1.98 | 0.05 | — | 2.13 | 13.43 |
| ヲ-23 | 0.04 | 1.37 | 0.39 | — | 1.80 | 0.12 | 2.40 | 0.07 | — | 2.59 | 12.15 |
| ヲ-24 | 0.06 | 7.29 | 3.69 | 1.74 | 12.78 | 0.20 | 7.41 | 0.29 | — | 7.90 | 78.58 |
| ヲ-25 | 0.18 | 18.76 | 6.85 | 4.02 | 29.81 | 0.43 | 22.23 | 0.03 | — | 22.69 | 181.58 |
| ヲ-26 | 0.03 | 3.58 | 1.99 | 1.22 | 6.42 | 0.15 | 4.78 | 0.06 | — | 4.99 | 48.92 |
| ヲ-27 | 0.07 | 3.79 | 2.25 | 1.01 | 7.12 | 0.06 | 0.04 | 1.35 | — | 1.45 | 69.45 |
| ワ-24 | 0.04 | 3.09 | 0.95 | 0.74 | 4.82 | 0.02 | 1.35 | 0.12 | — | 1.49 | 25.58 |
| ワ-25 | 0.05 | 2.19 | 0.82 | 0.17 | 3.23 | 0.09 | 0.94 | 0.02 | — | 1.05 | 52.36 |
| ワ-26 | 0.05 | 4.37 | 0.62 | — | 5.04 | 0.24 | 3.54 | — | — | 3.78 | 81.17 |
| ワ-27 | 0.03 | 1.01 | 0.36 | 0.26 | 1.66 | 0.05 | 0.71 | 0.05 | — | 0.81 | 19.45 |
| カ-24 | 0.04 | 2.01 | 0.48 | — | 2.53 | 0.11 | 22.20 | 0.05 | — | 22.36 | 54.54 |
| カ-25 | 0.10 | 19.90 | 8.01 | 2.38 | 30.39 | 0.81 | 36.46 | 0.16 | — | 37.43 | 858.99 |
| カ-26 | 0.17 | 17.78 | 5.91 | 2.24 | 26.10 | 0.37 | 16.22 | 0.09 | — | 16.68 | 339.58 |
| カ-27 | 0.05 | 2.53 | 1.44 | — | 4.02 | 0.20 | 2.38 | 0.08 | — | 2.60 | 30.65 |
| ヨ-25 | 0.01 | 0.79 | 0.09 | — | 0.89 | 0.11 | 1.35 | 0.03 | — | 1.49 | 25.47 |
| ヨ-26 | 0.11 | 15.32 | 5.09 | 2.09 | 22.61 | 1.51 | 26.75 | 0.56 | 0.06 | 28.88 | 315.10 |
| ヨ-27 | 0.15 | 25.00 | 9.91 | 2.07 | 33.06 | 0.61 | 18.85 | 0.85 | 0.05 | 20.36 | 318.34 |
| タ-25 | 0.05 | 12.79 | 4.26 | 0.24 | 17.34 | 0.35 | 13.77 | 0.10 | — | 14.22 | 150.24 |
| タ-26 | 0.02 | 0.65 | 0.31 | 0.20 | 1.18 | 0.04 | 0.34 | — | — | 0.38 | 45.00 |
| タ-27 | 0.79 | 87.98 | 39.91 | 9.79 | 138.47 | 1.27 | 82.16 | 2.92 | 0.41 | 86.76 | 1,063.70 |
| | | | | | | | | | | | 32900.0 |



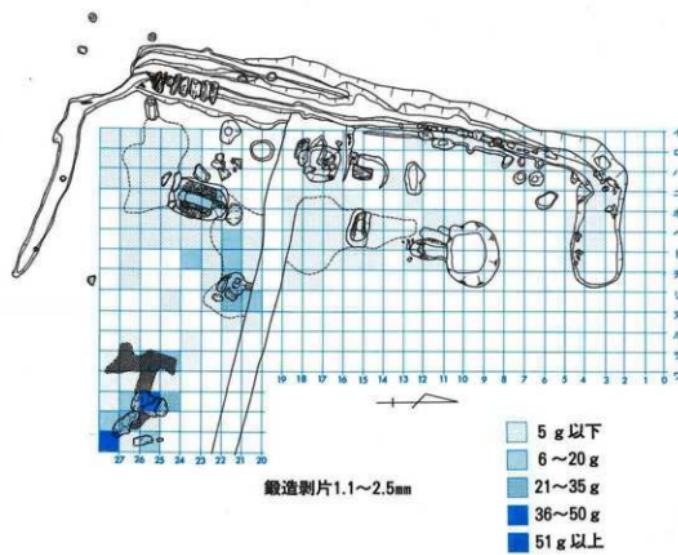
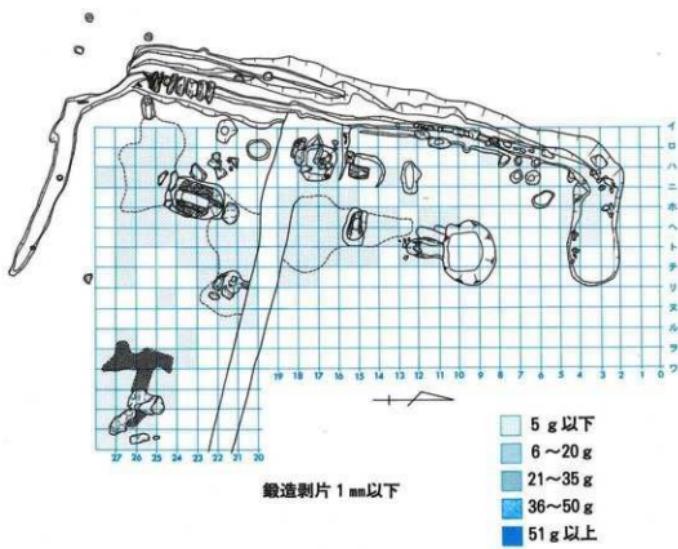
鋳造剥片



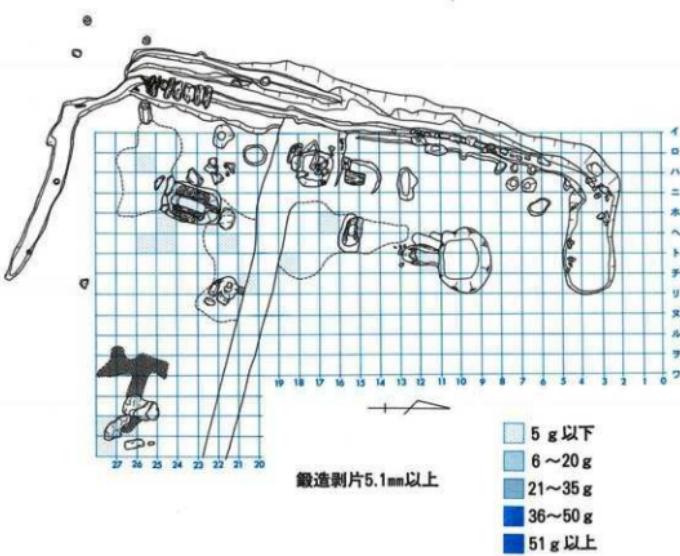
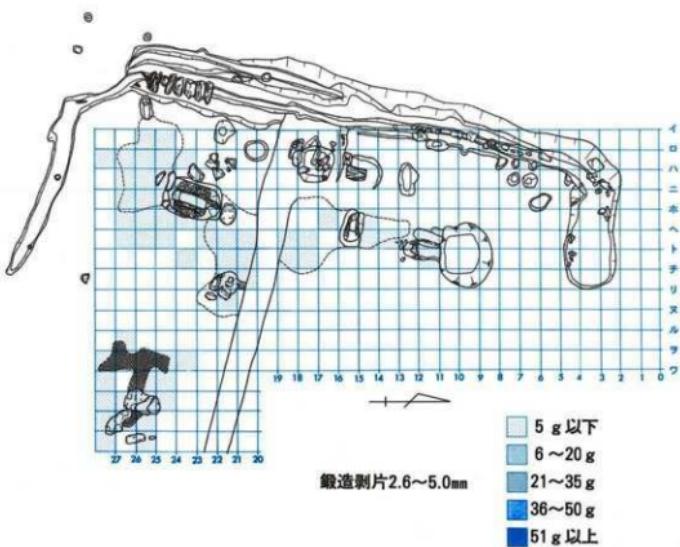
第45図 大鍛冶場跡鋳造剥片・粒状津分布図(1)



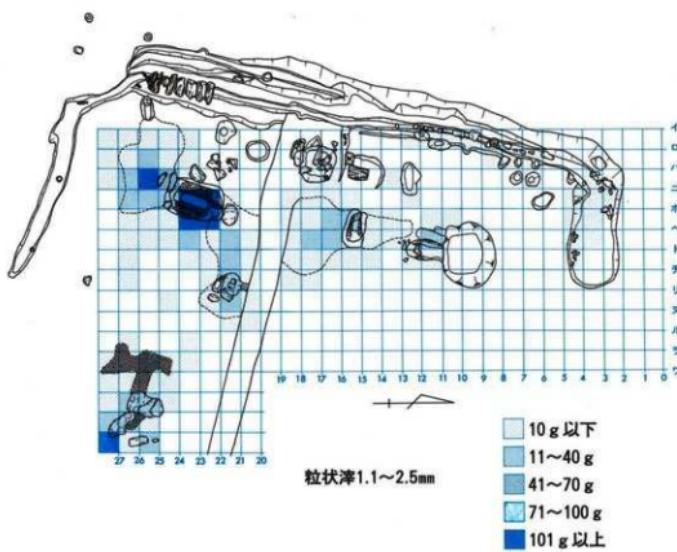
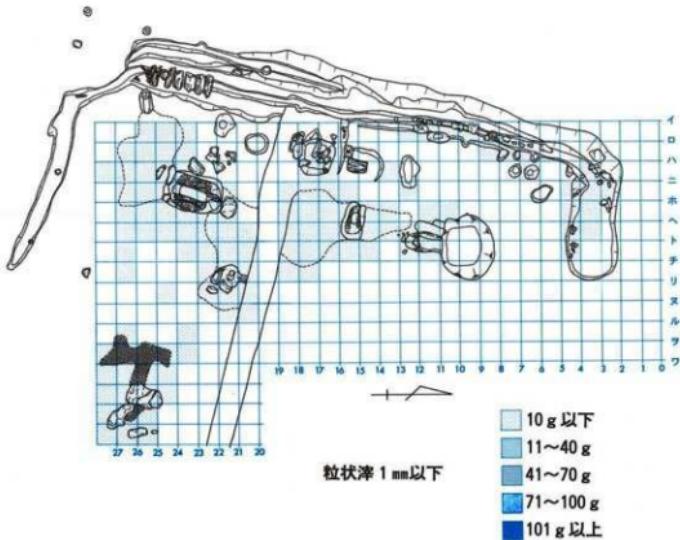
第46図 大鋳冶場跡鋳造剥片・粒状滓分布図（2）



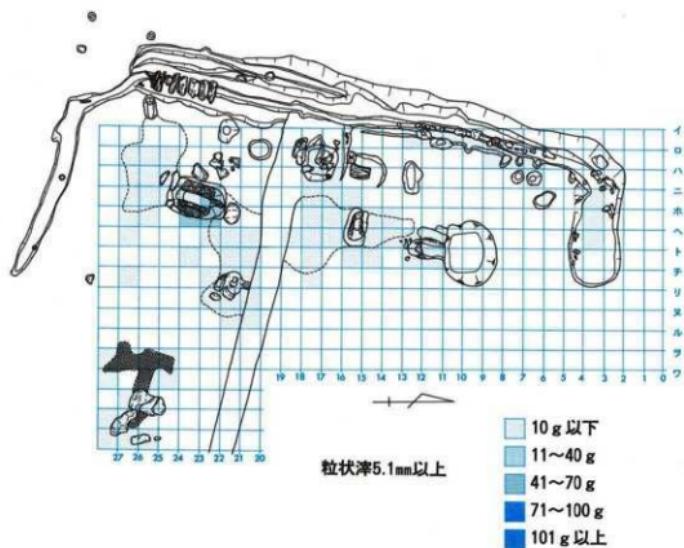
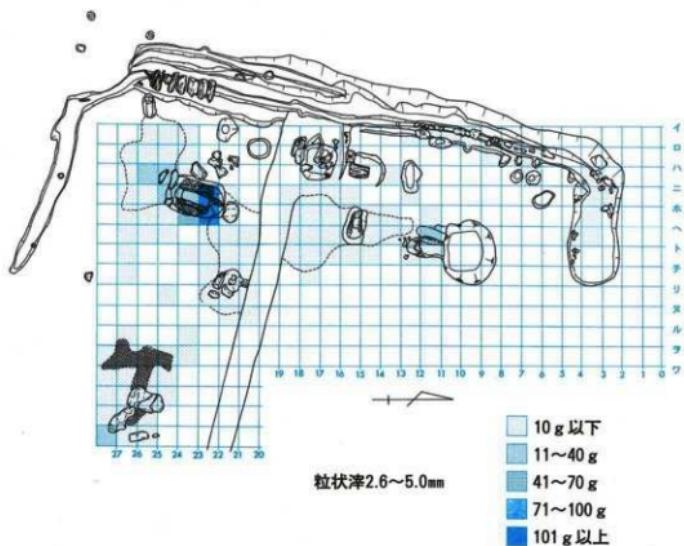
第47図 大鐵冶場跡鍛造剥片大きさ別分布図（1）



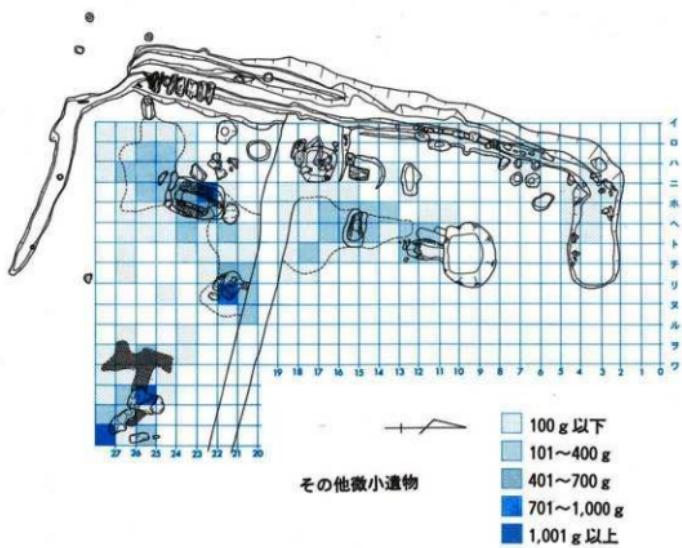
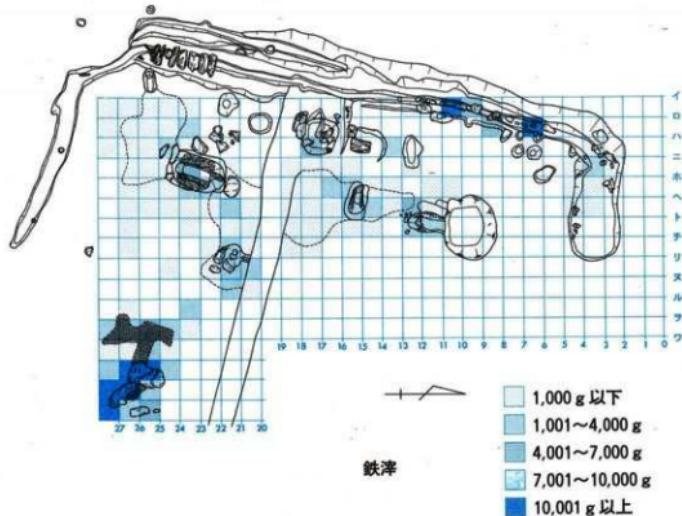
第48図 大鋳冶場跡鉄造剥片大きさ別分布図（2）



第49図 大鍛冶場跡粒状津大きさ別分布図（1）



第50図 大鐵冶場跡粒状大きさ別分布図（2）



第51図 大銀冶場跡鉄津及びその他微小遺物分布図

3. 3号掘立柱建物跡（第52図）

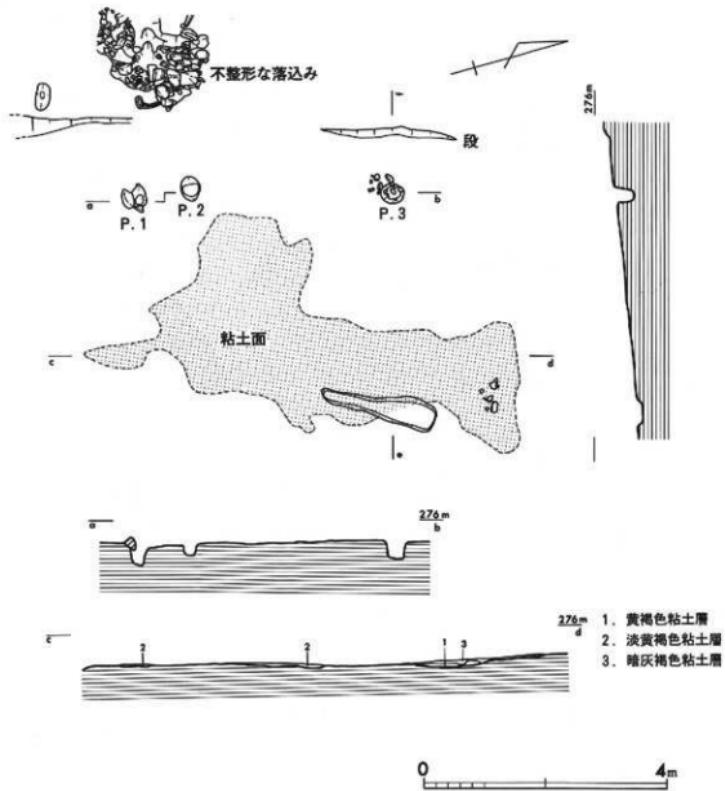
2号掘立柱建物跡（大鍛冶場跡）の南側に隣接するものである。

遺存状態はあまり良好ではなく、丘陵斜面を僅かに加工した段と粘土面、僅かに柱穴が認められる程度で構造などは明確ではないが、丘陵斜面に平行して建物があったものと思われる。

柱穴はP. 1、P. 2、P. 3が認められ、心々間の距離はP. 1-P. 2が0.9m、P. 2-P. 3が3.3mである。

加工段は、中央部が途切れているが、長さ7m程度があり、高さは10~20cm程度で非常に浅いものである。粘土面は長さ7.1m、幅3.5mの範囲に広がっており、北側では上層より暗灰褐色粘土層（3層）、黄褐色粘土層（1層）、南側では淡黄褐色粘土層（2層）が薄く広がっている。また、粘土面の東側には長さ1.9m、幅0.2~0.5m、深さ0.1mほどの溝状遺構も認められた。

なお、建物跡西側の斜面には長さ1.5m、幅1m程度の不整形な落ち込みがあり、内部には多数の石が見られた。



第52図 3号掘立柱建物跡構造実測図（1:80）

4. 4号掘立柱建物跡（第53図）

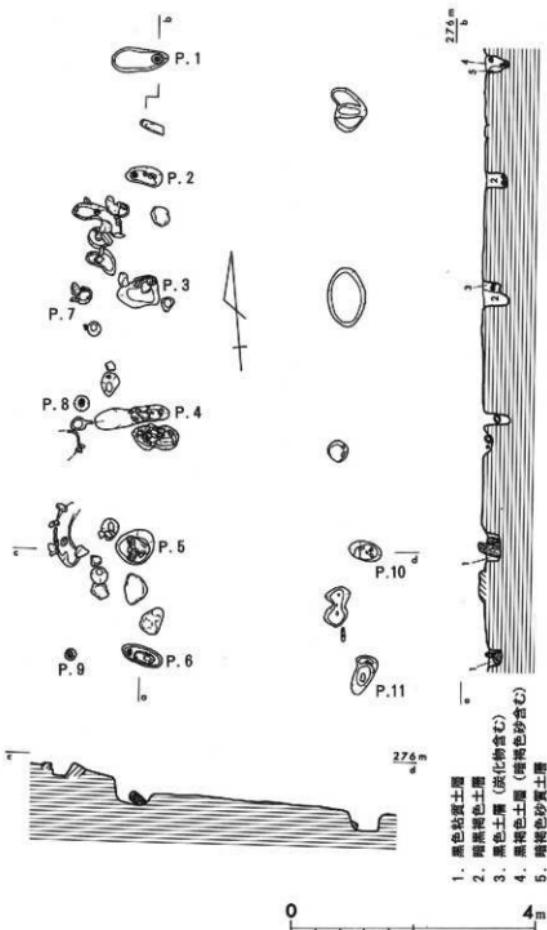
1号掘立柱建物跡の北側に隣接する建物跡である。丘陵裾部に営まれており、柱穴列は丘陵側は遺存状況が良好であるが、川寄りのものは判然としない。

丘陵側の柱穴列は、P. 1-P. 2-P. 3-P. 4-P. 5-P. 6の5間で、桁行が9.8mである。心々間の距離はP. 1-P. 2が1.9m、P. 2-P. 3が1.9m、P. 3-P. 4が1.9m、P. 4-P. 5が2.2m、P. 5-P. 6が1.8mである。このうち、P. 1、P. 2、P. 4、P. 5、P. 6には柱根が残っており、P. 4はトネリコ属、P. 6はクリ材が柱に用いられていたことが分かっている。また、P. 5、P. 6には柱根にそって根留めに使われたと見られる加工された木材も検出されている。

川側の柱穴ははっきりしないが、P. 10、P. 11がほぼP. 5、P. 6に対応しており、4号掘立柱建物跡のものと思われる。この場合建物の梁行は3.9mに復原される。

P. 3、P. 4、P. 6の西側には、0.9mほどの間隔をとってP. 7、P. 8、P. 9があり、P. 7、P. 8には柱根が残っていた。廂など建物の周間に構造物があったことが窺われる。

4号掘立柱建物跡の時期については、出土遺物がないため不明であるが、1号、2号掘立柱建物跡と同様に丘陵裾部に営まれていることや、建物の構造に大きな違いがあるとは考えられないことから、同じ時期のものであると考えておきたい。

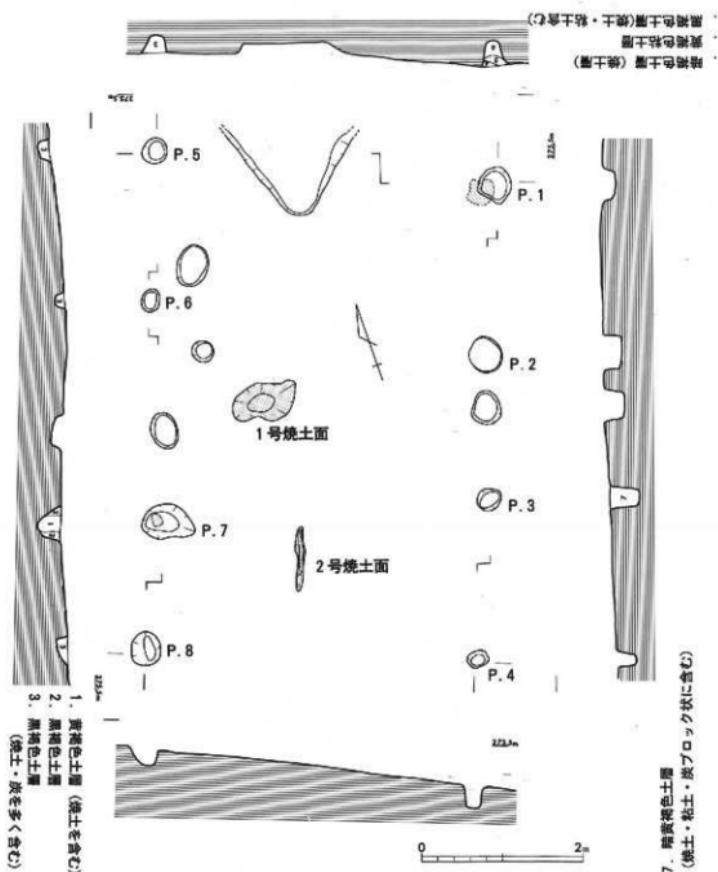


第53図 4号掘立柱建物跡遺構実測図 (1 : 80)

5. 5号掘立柱建物跡（第54図）

4号掘立柱建物跡の北東5mに位置するもので、丘陵裾部にある1～4号掘立柱建物跡とは異なり、川寄りの平坦面に立地している。

桁行は3間で6m、梁行は1間で4.2mの建物跡である。桁行柱穴列の心々間の距離は、P. 1-P. 2が2.1m、P. 2-P. 3が1.8m、P. 3-P. 4が2.0m、P. 5-P. 6が1.8m、P. 6-P. 7が2.7m、P. 7-P. 8が1.6mである。柱穴の埋土は、焼土を含むものが多く、P. 1は暗褐色土層（焼土層：4層）、黄褐色粘土層（5層）、焼土・粘土を含む黒褐色土層（6層）、P. 3が焼土・粘土・炭をブロック状に含む暗黄褐色土層（7層）、P. 5が焼土・炭を多く含む黒褐色土層（3層）、P. 8も3層である。また、P. 7は焼土を含む黄褐色土層（1層）が黒褐色土層（2層）に挟まれる。



第54図 5号掘立柱建物跡遺構実測図 (1:60)

る形で柱痕状に検出されている。

建物の内部では焼土面が2つ認められた。このうち、1号焼土面（第55図）は長さ85cm、幅50cmの不整形なもので、深さ7cmと浅い。内部には炭・鉄滓・焼土を含む暗赤褐色土層（1層）、赤褐色粘土層（焼土層：2層）があり、水洗選別の結果、粒状滓・鍛造剥片も検出されている。これらはそれぞれ分析試料NKA-29、30として分析を行っており、前者は精錬鍛冶段階の粒状滓であることが分かっている。

2号焼土面は、1号焼土面の南1.4mにあり、長さ80cm、幅10cmほどのものである。この部分が直接焼けたというよりも、落ち込みに焼土が入り込んだ状況であり、溝状構造の上に何らかの構造物があった可能性もある。

これらの遺構の機能については、1号焼土面から少量の鉄滓・鍛造剥片・精錬鍛冶段階の粒状滓が検出されていることからすれば精錬鍛冶を行なっていたと見られる。しかし、2号掘立柱建物跡（大鍛冶場跡）の遺構とは異なっており、その機能的な位置づけについては不明な点がある。

第3節 その他の遺構

1. 3～8号土坑、1号集石遺構（第56図）

ほぼ南北方向に3～7号土坑、1号集石遺構・8号土坑が比較的整然と並んでいる。土坑の形状や埋土なども類似しており、近い時期に同様の性格をもって営まれたと考えられるものである。各遺構間の距離は3号土坑-4号土坑間が1.5m、4号土坑-5号土坑間が1.0m、5号土坑-6号土坑間が1.2m、6号土坑-7号土坑間が1.7m、3号土坑-1号集石遺構間が1.4m、1号集石遺構-8号土坑間が0.4mである。

3号土坑は楕円形を呈するもので、長さ120cm、幅96cm、深さ52cmである。

4号土坑は不整な楕円形で、長さ110cm、幅88cm、深さ42cmである。埋土は上層より黒褐色土層、暗黒褐色土層、黒褐色土層となっている。埋土中に若干円礫が見られる他、底面には板石が1枚敷かれていた。

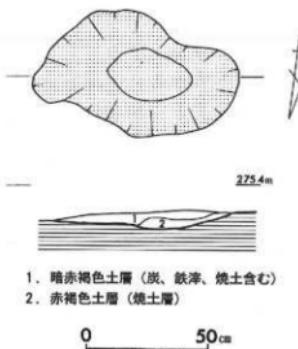
5号土坑は楕円形を呈するもので、長さ106cm、幅96cm、深さ58cmである。埋土は上層より黒褐色土層、暗黒褐色土層、黒褐色土層である。

6号土坑は楕円形で、長さ80cm、幅78cm、深さ36cmである。埋土は上層より黒褐色土層、淡黒褐色土層、黒褐色土層で、若干円礫が入っている。

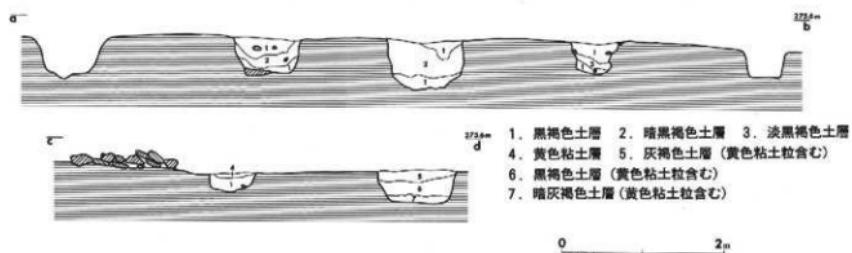
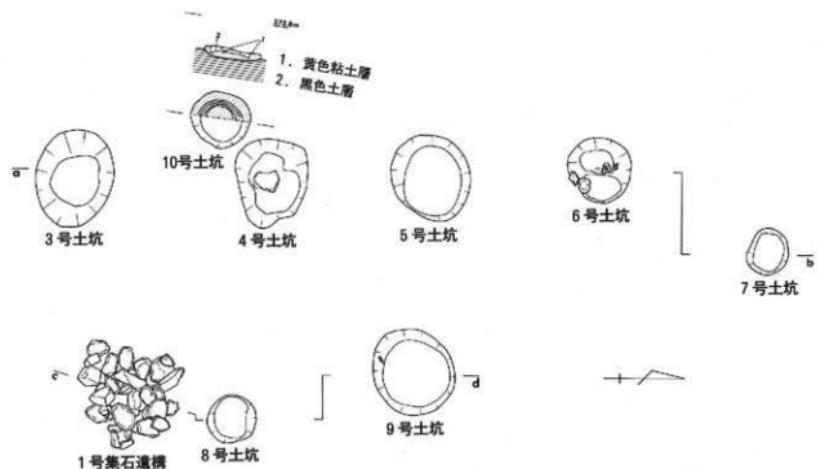
7号土坑は楕円形で、長さ58cm、幅50cm、深さ32cmである。

8号土坑は不整な円形を呈するもので、径60cm、深さ22cmである。埋土は上層より黄色粘土層、黒褐色土層である。

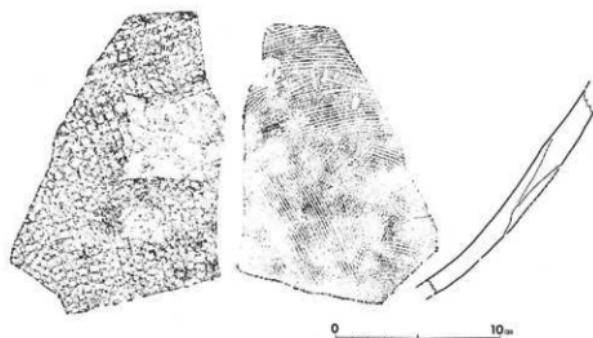
1号集石遺構は径130cmほどの範囲で高さ20cm程度に転石が積まれたものである。石積みに規則性は見られない。また、石積みの下で土坑等の施設も検出されなかった。出土遺物としては石積み



第55図 1号焼土面遺構実測図（1:20）



第56図 1号集石遺構、3~10号土坑遺構実測図 (1:60)



第57図 1号集石遺構出土物実測図 (1:3)

の上にのる状態で、瓦質土器の大形壺甌類底部（第57図）が確認された。外面には格子目タタキがあり、内面はハケメ状の調整が行われている。いわゆる龜山系のもので、平安時代後半から鎌倉時代にかけてのものと考えられる。

以上の遺構の性格については、直接的な根拠がなく不明と言わざるを得ないが、集石を伴う点や、土坑の配置状況から古墓である可能性が考えられる。

2. 9号土坑（第56図）

3～8号土坑に隣接し、形態・規模とも似たものであるが、底面や埋土中に粘土を含むことや僅かに近世陶磁器が含まれていることから、異なる性格をもつものと考えられる。

平面形はほぼ円形を呈し径100～106cm、深さは40cmである。埋土は上層より黄色粘土粒を含む灰褐色土層、黄色粘土粒を含む黒褐色土層、黄色粘土粒を含む暗灰褐色土層となっており、後述する底面に粘土を貼り桶を据えた土坑との関係を考えた方が良さそうである。

3. 10号土坑（第56図）

上面がかなり削平されているが、底面に粘土を貼り桶を据えた土坑である。

平面形は円形を呈し径48～54cmで、その中に厚さ7cm程度に黄色粘土を貼っている。粘土の上面には桶の底部の痕跡が残っており、桶の径は48cmに復原できる。

4. 11号土坑（第58図）

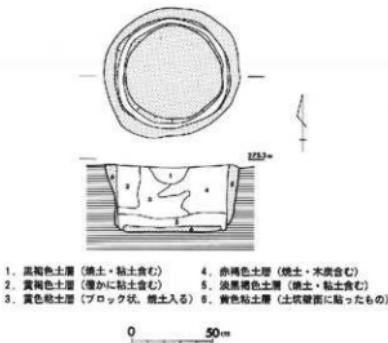
5号掘立柱建物跡の南3.5mに位置するものである。平面形は円形を呈しており、径80～84cm、深さ42cmである。底面及び壁面には3～7cmの厚さで黄色粘土が貼られている。底面の粘土には桶の底部の痕跡が残っており、桶の径は70cmに復原できる。

埋土は焼土を含んでいるのが特色で、上層から焼土・粘土を含む黒褐色土層、僅かに粘土を含む黄褐色土層、焼土塊が入る黄色粘土層、焼土・木炭を含む赤褐色土層、焼土・粘土を含む淡黒褐色土層が見られる。

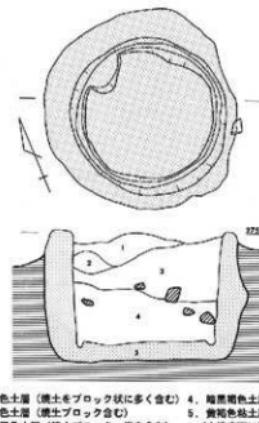
埋土中に多量の焼土が含まれる点では、5号掘立柱建物跡に近い状況を示しており、これに伴う水潤めとも考えられる。

5. 12号土坑（第59図）

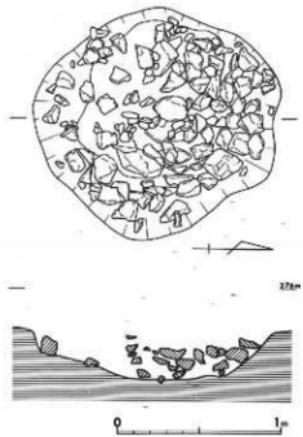
5号掘立柱建物跡の東1.5mに位置するものである。平面形は円形を呈しており、径118～122cm、深さ80cmである。底面及び壁面には10～18cmと厚く黄褐色粘土が貼られている。底面の粘土には桶の底部の痕跡が残っており、桶の径は85cmに復原できる。



第56図 11号土坑遺構実測図 (1 : 30)



第59図 12号土坑遺構実測図 (1 : 30)



第60図 13号土坑遺構実測図（1:30）
数入れられているが、性格等不明である。

7. 14～17号土坑（第61・62図）

調査区北部に4基がまとめて位置するもので、15号土坑→14号土坑、17号土坑→16号土坑の順に切合関係にある。

14号土坑はほぼ円形を呈するもので、径140cm、深さは60cmである。内部には2～20cmの厚さで黄褐色粘土が貼られているが、底面に桶等の痕跡は見られない。粘土内面の大きさは径120cm、深さは54cmである。横断面形は壁面が外傾する逆台形状を呈する。埋土は上層より粘土混じる黒褐色土層（3層）、暗黄褐色粘土層（粘土の動いたもの：2層）、粘土混じる淡黒色土層（4層）、黒色土層（6層）がある。

15号土坑は14号土坑に先行するもので、隅丸方形を呈している。大きさは1辺150cm、深さ60cmで、底面は中央部が一段浅く下がっている。掘り方内は少し裏込めの土を入れ、16～24cm内側に4～10cmの厚さで黄褐色粘土が貼られている。粘土内面の大きさは径110cm、深さは54cmで、底面に桶等の痕跡は見られない。横断面形は掘り方は外傾する逆台形状であるが、粘土の壁面はほぼ直立している。埋土は上層より5層、3層の順となっているが、3層からは牛の頭骨1頭分が単独で入れられていた。

16号土坑はやや不整な円形で、径150～160cm、深さは78cmである。内部には4～10cmの厚さで黄褐色粘土が貼られているが、底面に桶等の痕跡は見られない。粘土内面の大きさは径140cm、深さは70cmである。横断面形は壁面が外傾する逆台形状を呈する。埋土は上層より3層、2層、4層、5層、6層の順に堆積している。

17号土坑は16号土坑に先行するもので、やや不整な円形を呈している。大きさは径150cm、深さ76cmである。内部には2～8cmの厚さで黄褐色粘土が貼られている。粘土内面の大きさは径104cm、深さは52cmで、底面に桶等の痕跡は見られない。横断面形は掘り方は外傾する逆台形状である。埋土は上層より3層、2層、6層の順となっているが、6層からは牛の頭骨2頭分と四肢骨が入れられていた。

埋土は上部に焼土を含んでいるのが特色で、上層から焼土を塊状に含む茶黒色土、焼土を塊状に含む黒褐色土層、焼土塊・炭を含む暗茶黒色土、礫・陶磁器を含む暗黒褐色土層が見られる。

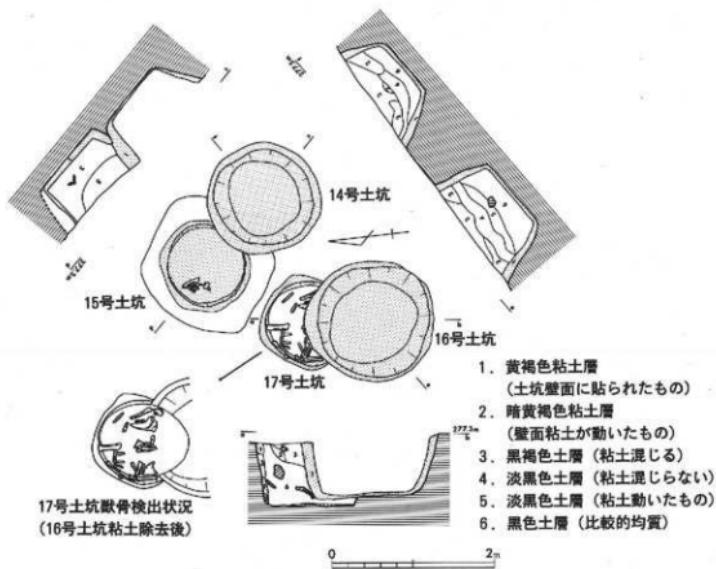
出土遺物としては、伊万里系磁器染付、寛永通宝があり江戸時代後葉頃のものと思われる。

位置関係からすると、5号掘立柱建物跡との関わりが考えられるが、埋土の上部にしか焼土が含まれていない点で、廃絶時まで機能していなかったことも考えられる。

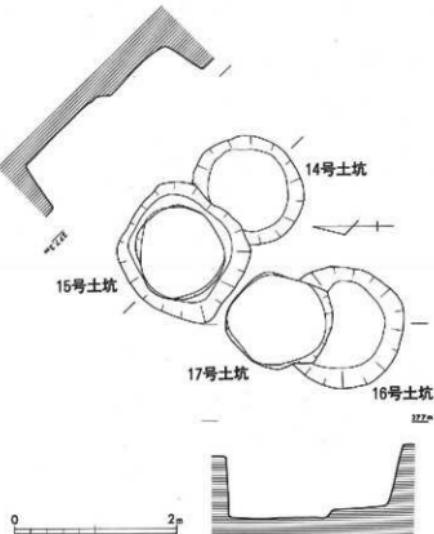
6. 13号土坑（第60図）

4号掘立柱建物跡の北西側斜面に位置するものである。

平面形は不整な円形で径145cm、深さは30cmと浅く、横断面形は皿状を呈している。内部には石が多く



第61図 14～17号土坑遺構実測図1 (1 : 60)



第62図 14～17号土坑遺構実測図2 (1 : 60)

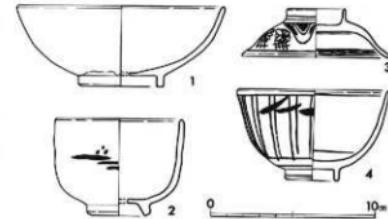
8. 2号集石遺構（第64図）

丘陵裾部に設けられた平坦面に位置するものである。

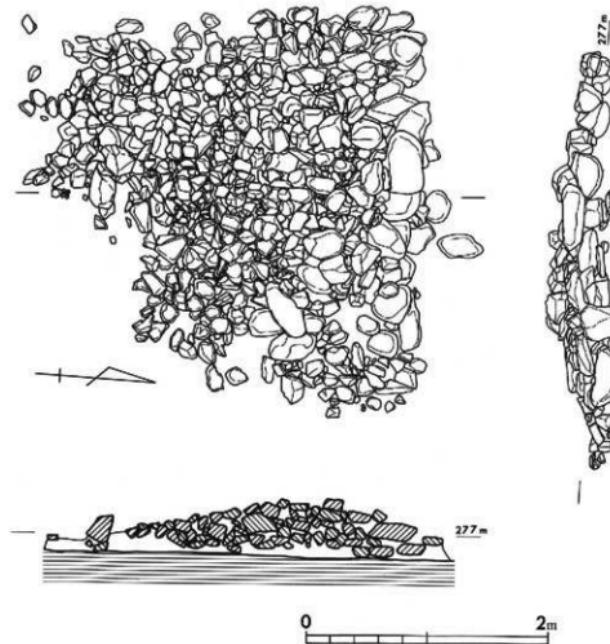
平面形は、北辺または東西辺の一部が直線的に造られていることから、本来は一辺3.1mの方形であったと考えられ、高さは現状で0.45mである。石積みは遺存状況が良好な北辺を見ると、板石状の比較的大きな石を一番外側に並べており、その内側に小形の転石を積み上げている。南辺や東西辺の一部は既に失われているが、同様の石積みがあったと推定される。石積みの下には土坑等の施設は認められなかった。

出土遺物としては、石積みの間から陶磁器（第63図）や鍛冶滓が確認されている。

1・2は在地系陶器である。1は碗で、口径12.7cm・器高5.0cmである。削り出し高台は露胎で、体部外面から内面に黄褐色の釉がかけられている。2は湯呑で、口径7.6cm・器高6.0cmである。削り出し高台は露胎で、体部外面から内面に黄褐色の釉がかけられて



第63図 2号集石遺構出土陶磁器実測図（1：3）



第64図 2号集石遺構実測図（1：40）

いる。

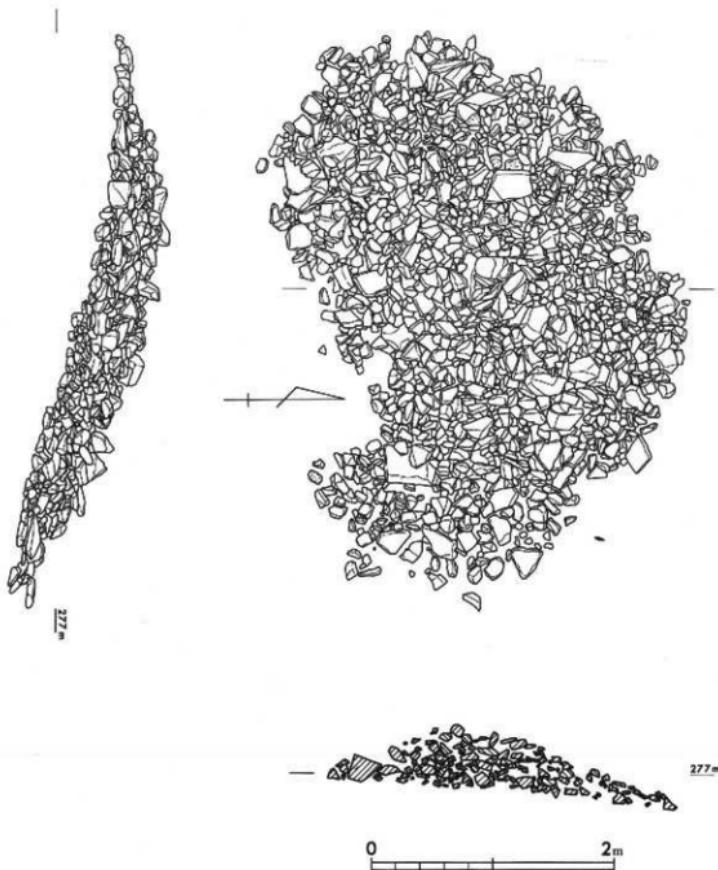
3・4は肥前系磁器染付である。3は蓋で、端反り碗に伴うものと見られる。口縁端部が僅かに外反し、頂部につまみがつくるもので、口径9.2cm・器高3.0cmである。外面には「花文」、内面頂部には「寿」とある。4は碗で口径9.4cm・器高5.5cmである。

以上の遺物の時期は、江戸時代末頃のものと考えられる。

9. 3号集石遺構（第65図）

調査区北部の緩斜面に単独で位置しているものである。

平面形は、不整な橢円形を呈しており、東西4.5m、南北1.4m、高さは0.5mである。石積みに規則性は見られず、その下部にも土坑等の施設は認められなかった。



第65図 3号集石遺構実測図（1：40）

10. 石圓造構（第66図）

5号掘立柱建物跡の北東3.5m、12号土坑の北2mに位置するものである。

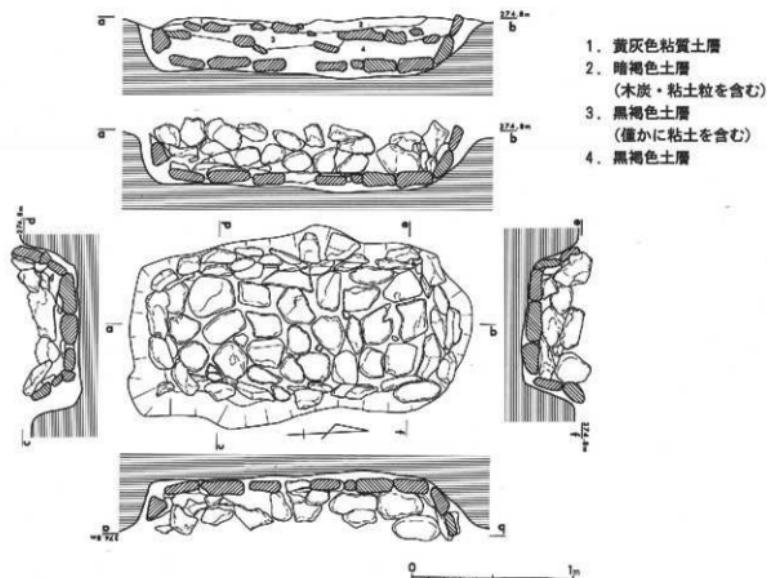
造構はやや不整な隅丸長方形の掘り方の中に、扁平な川原石を石圓状に組んだものである。掘り方の大きさは長さ211cm、幅100~114cm、深さ35cmで、横断面形は壁面が外傾する逆台形状を呈している。

石圓造構は長さ192cm、幅85~94cm、深さ29cmで、横断面形は掘り方と同様に壁面が外傾している。壁面の石積みは北辺及び東西辺が2段、南辺は1段で、底面にも3列にわたって石が敷かれている。石は一部に赤く被熱したものもあるが、石圓造構の内部で被熱したものではなく2次的に使用されたものと思われる。また、石の目地には粘土が詰められている。

埋土は上層より黄灰色粘質土層（1層）、木炭・粘土粒を含む暗褐色土層（2層）、僅かに粘土粒を含む黒褐色土層（3層）、黒褐色土層（4層）となっている。4層の上面では壁面に使用されているような偏平な川原石が比較的多数検出されており、また、埋土もこれより上層では粘土が含まれている。これらが壁面に使われた石材や目貼り粘土とすれば、この段階で上部が削平され埋められた可能性も考えられる。

出土遺物はほとんどないが、埋土の上面で鉄洋が若干確認された。

この造構の機能や時期については、直接的な根拠がなく不明と言わざるを得ないが、精錬鍛冶造構である5号掘立柱建物跡に隣接する点は留意の必要があろう。同様なものは頬原町の場尻遺跡でも確認されており、今後類例の増加を待つて位置づけを行いたい。



第66図 石圓造構実測図（1:30）

11. 4～7号焼土面（第67・68図）

丘陵裾部に設けられた平坦面にあり、2号集石遺構の東側に位置している。焼土面は南北方向に断続的に分布しており、各焼土面間の距離は3号焼土面～4号焼土面が0.8m、4号焼土面～5号焼土面が0.8m、5号焼土面～6号焼土面が0.6mである。

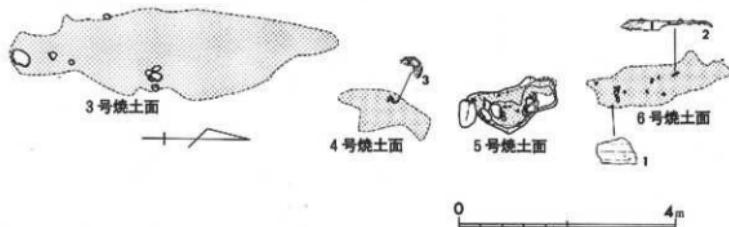
3号焼土面は、南北6.1m、東西1.65mの範囲に広がっており、上面には川原石が数ヶ所に見られた。

4号焼土面は、南北1.8m、東西0.8mである。近世陶磁器のほか寛永通宝（第68図-3）が出土している。

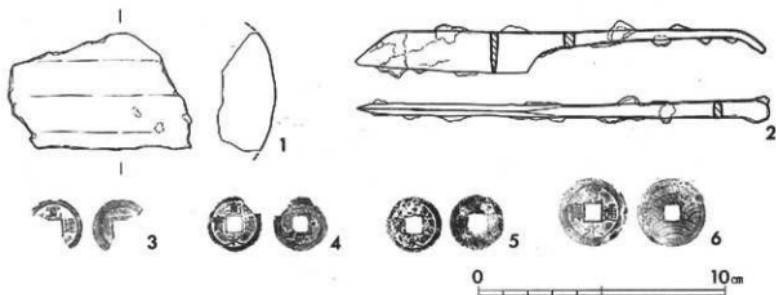
5号焼土面は、南北1.6m、東西0.8mで、上面には川原石が見られた。焼土面の下には不整形な土坑があり、長さ1.6m、幅0.8m、深さは7～24cmである。土坑の内部からは近世陶磁器片が出土している。

6号焼土面は、南北2.7m、東西0.7mである。上面では近世陶磁器片のほか、羽口片、刀子が検出されている。このうち、第68図-1は羽口片で、送風孔部は既に失われているが、外径は9.4cmに復原できる。2は刀子で、柄を含め鉄製である。長さ16.9cm、刃部長7.1cm、刃部幅1.7cm、刃部厚0.3cm、茎幅0.7cmである。

これらの焼土面の性格については、羽口が出土していることもあり、鍛冶関連遺構とも考えられるが、炉などが確認されておらず断定することは難しい。



第67図 3～6号焼土面遺構実測図（1：90）



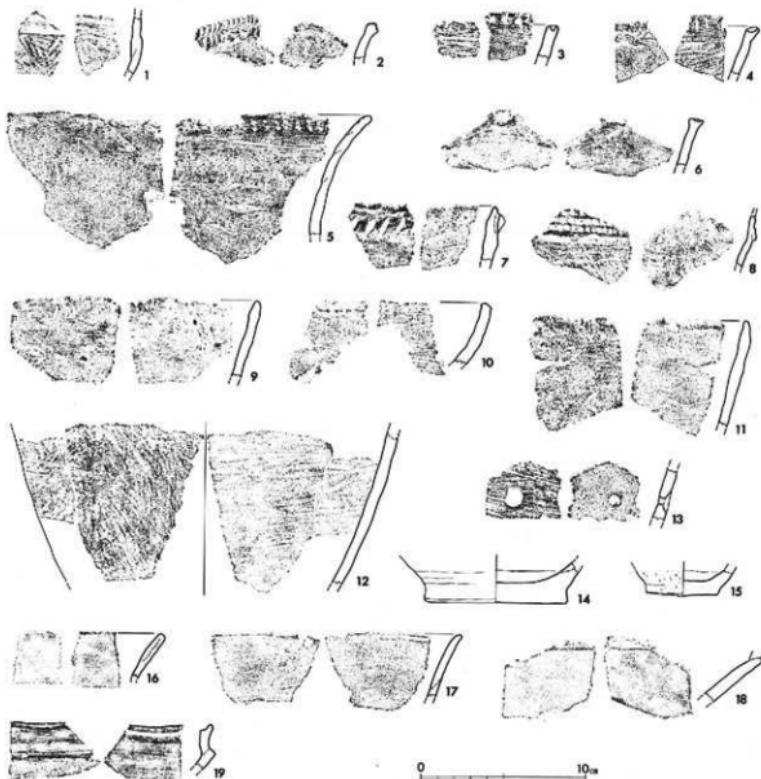
第68図 3～6号焼土面出土遺物実測図（1：2）

第7章 遺構に伴わない遺物

第1節 縄文土器 (第69図)

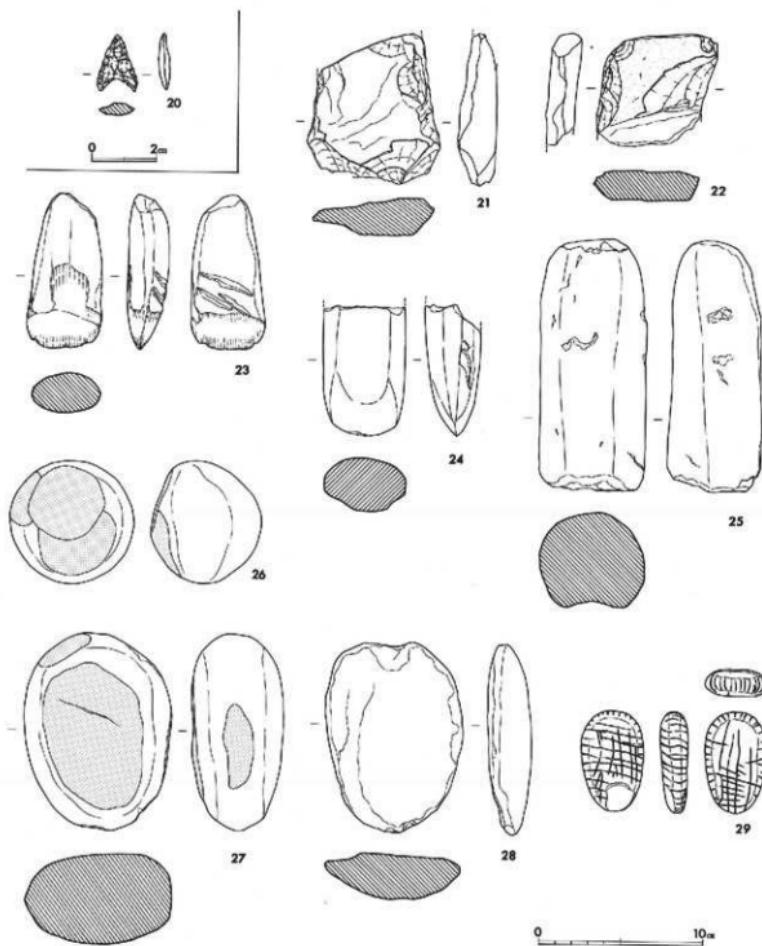
1は深鉢の胸部で肩部に段をもっており、外面胸部に羽状縄文、頸部はナデまたはミガキである。2～6は深鉢の口縁部である。2は端部を挟んで2列にキザミが入り、外面には縦方向に3本の沈線が入る。3・4は端部に刺突があるものである。5は長く外反する頸部をもつもので、口縁内面に半裁竹管状の工具端部を軽くあてた連続刺突文が見られる。6は波状口縁をもつもので、波頂部に刺突がある。調整は内外面ともミガキである。

7は突帯文土器深鉢の口縁部で、端部は無キザミで、これよりやや下がった位置にキザミ目突帶がつくものである。



第69図 縄文土器実測図 (1 : 3)

8はやや肥厚する口縁部をもつもので、外面には3段以上、押引状の刺突文が入る。
 9～13は粗製の無文深鉢である。9～11は口縁部で、9・11は外傾する器形をとっているが、10はやや内湾しやや浅い器形となる。12・13は胸部で、13には焼成後外面から穿孔されている。
 14・15は底部である。ともに平底で、底径は14が8.6cm、15が4.4cmである。
 16～19は黒色磨研系の浅鉢である。16・17は口縁部、18は体部下半の破片で、いずれも内外面が丁寧に研磨されている。19は口縁がやや波状になるもので、口縁端部内面には1条の沈線が入る。口縁内外面はミガキであるが、外面下半にはケズリが見られる。



第70図 石器実測図 (2:3, 1:3)

以上の遺物の時期は、1が縄文時代後期中葉、2～6が晩期中葉、16～17が晩期前葉から中葉、7・19が晩期後葉に位置づけられる。

第2節 石 器（第70図）

1は安山岩製の石鏃で、四基無茎式である。長さは1.7cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmで、重さは0.5gである。

21・22は打製十掘具である。ともに石材は凝灰質泥岩製で、21は刃部、22は基部のみの破片である。周縁を加工し成形しているが、一部には自然面を残す部分もある。

23・24は磨製石斧で、ともに石材は結晶片岩製である。このうち23は完形で、長さ9.6cm、幅4.6cm、厚さ2.5cm、重さ172.7gと小形のものである。刃部には顕著な研磨痕を残すが、基部は自然面を残している。24は刃部の破片で、よく研磨されているが、一部に自然面を残している。

25は石棒状のもので、一方の端部に切断痕が残る。石材は三群塙基性片岩で、長さ15.5cm、幅6.5cm、厚さ5.5cm、重さ1187.2gである。

26・27は磨石である。26は流紋岩質凝灰岩、27は石英閃綠岩で、ともに敲打痕はなく磨面のみ見られる。

28は石錘である。石材は安山岩で、両端部に浅い打ち欠き部がある。

29は線刻疊である。石材は安山岩で、長さ6.2cm、幅3.9cm、厚さ1.7cm、重さ47.5gである。円礫の両面及び周縁に細かい線刻が施され、両面は格子状になっている。周縁は比較的彫りが深いのに対し両面は浅く、また、横線の彫りが深いのに対し、縱線は浅い。

第3節 弥生土器（第71図）

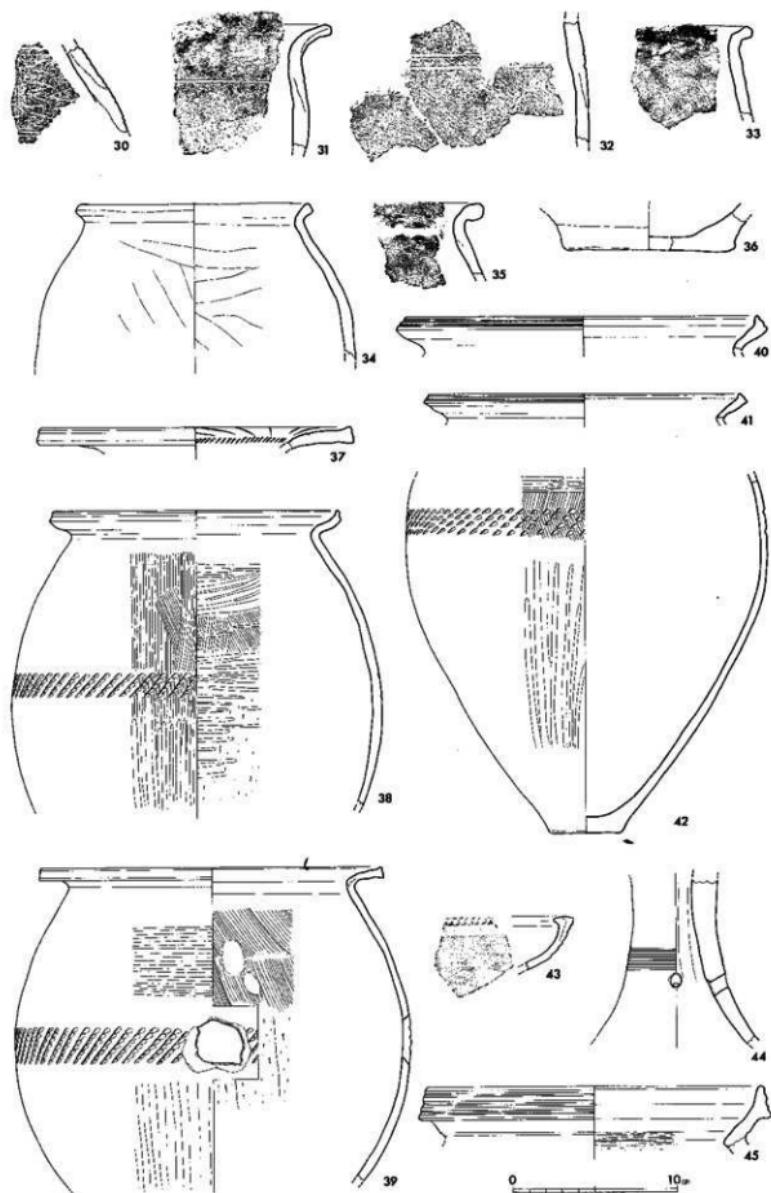
30は壺の肩部である。外面には貝殻腹縁を用いた文様が見られ、上下2段に2条づつ付された平行線の間に、羽状文が5段と3条が平行する垂線がある。断面に表れる粘土紐の接合状態は、外傾接合で、下側の破面は擬口縁と見られる。外面調整は不明だが、内面はミガキである。胎土は4mm大の石英を含み粗い。

31～35は甌である。このうち、31は外反する口縁部と直立気味に立つ胴部をもっており、肩部外面には1条のヘラ描き沈線が入っている。調整は胴部内外面は細かいハケメで、外面下半は火にかけられたためか表面が剥離している。胎土は4mm大の石英を含み粗い。32は甌の胴部で、肩部に2条のヘラ描き沈線が施されている。外面調整はハケメ、内面はナデである。胎土は4mm大の石英・長石を含み粗い。33・34は短く外反する口縁部とやや張る胴部をもつもので、外面に文様は見られない。調整は細かいハケメ、またはナデである。34は胎土中に7mm大の砂粒を含み粗い。35は33・34に近い器形を持つが口縁が肥厚しやや丸みを帯びているものである。調整はナデである。

36は底部である。平底で、復原底径は10.0cmと大きい。胎土は4mm大の石英・長石を含み粗い。

37は壺である。大きく開いた口縁部を有しており、端部がやや肥厚する。口縁内面には斜行沈線と刺突文が施されている。

38～42は口縁が屈曲し端部に面をもつ甌である。38は口縁端部が上方に肥厚するもので、復原口径は17.5cmである。胴部はよく張り、最大径付近に斜行刺突文が施されており、調整は外面はハケメの後胴部下半はミガキ、内面は胴部下半がケズリの後ミガキ、上半はハケメの後ミガキである。



第71図 弥生土器実測図 (1 : 3)

39は口縁端部がやや下方に肥厚するもので、復原口径は21.0cmである。胴部がよく張り、最大径のところに斜行刺突文が施されている。調整は外面胴部上半が横方向のハケメの後ナデ、胴部下半が粗いミガキ、内面は胴部下半がケズリの後一部ナデ、上半はケズリの後ハケメで一部に指頭圧痕が残る。なお、胴部最大径付近には焼成後外面から穿孔された形跡があり、この壺は埋葬用のものとして使われていた可能性がある。

40・41は口縁端部が上方に肥厚し、2条の凹線が施されたものである。

42は口縁を欠いているが、この種の壺の胴部と見られるものである。胴部はよく張り、最大径付近に斜行刺突文が施されており、底部は平底であるが、径4.2cmと小さい。調整は外面は上半がハケメの後ミガキ、胴部下半はミガキ、内面は上半にミガキが見られる。内面胴部下半には炭化物が付着している。

43・44は高壺である。43は口縁部で端部が横方向に肥厚し、外面にはキザミと4条の浅い凹線が見られる。調整は内外面ともミガキである。44は脚部の破片である。外面には6条のヘラ描き沈線が入り、1ヶ所焼成前に円孔が穿たれている。調整は風化のため不明である。

45は複合口縁をもつ壺である。復原口径は20.5cmで、口縁はやや内傾し3条の凹線、頸部にも1条の凹線が入る。調整は内面頸部にミガキ、頸部下半以下にはケズリが見られる。

以上の時期は、30～36が弥生時代前期中葉から後葉、37～39・42～44が中期後葉、40・41が中期末から後期初頭、45が後期前葉のものと考えられる。

第4節 その他の遺物（第72・73図）

46・47は土師器壺である。46は外反する口縁と比較的肩の張る胴部をもつもので、復原口径は33.3cmである。調整は胴部外面に僅かに粗いハケメが残り、内面はケズリである。47も外反する口縁をもつものである。復原口径は33.3cmで、頸部内面以下はケズリである。

48・49も土師器壺である。46・47と同様外反する口縁をもつが、胴部はあまり肩が張らず長くなる長胴形になるもので、外面には平行タタキが残る。内面はケズリの後、ナデである。復原口径は48が30.0cm、49が23.0cmである。

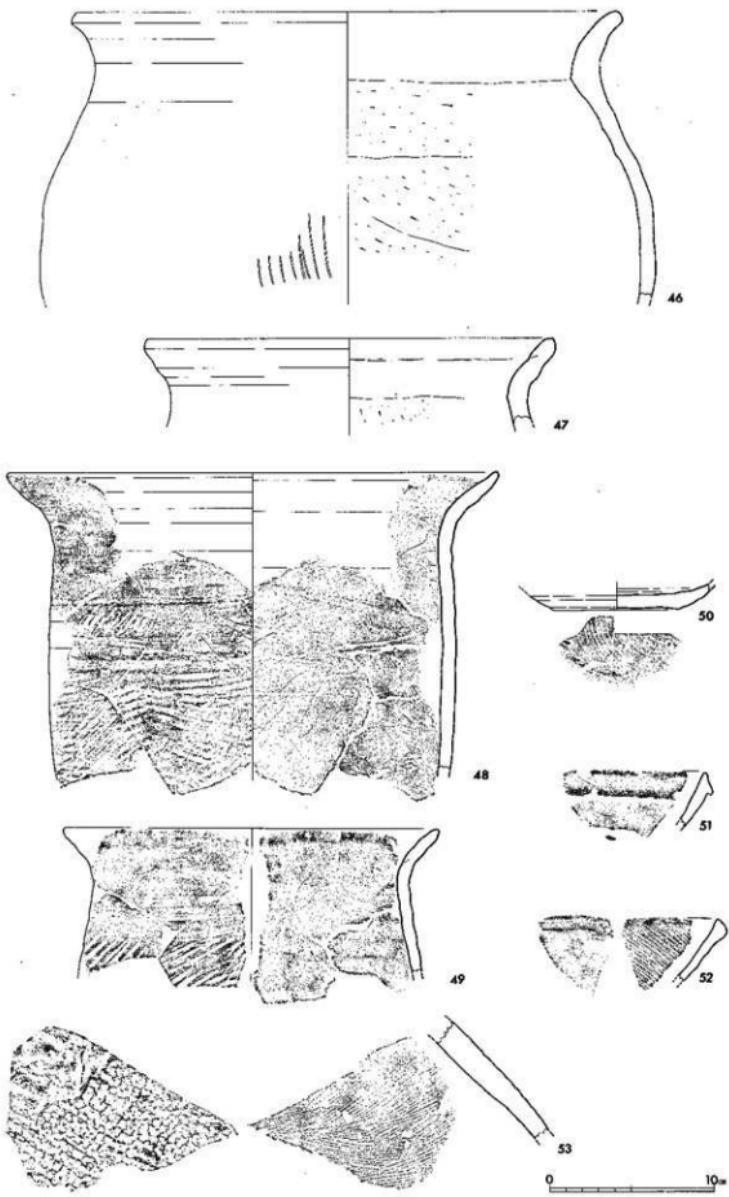
50は須恵器壺の底部である。高台のつかないもので、回転糸切り痕を残しており調整は施されていない。

51・52は瓦質土器鉢の口縁部である。51は肥厚した口縁がやや下方に下がるもので、風化のため調整等は不明である。52は口縁がやや丸く肥厚するもので、外面には指頭圧痕、内面にはハケメが見られる。

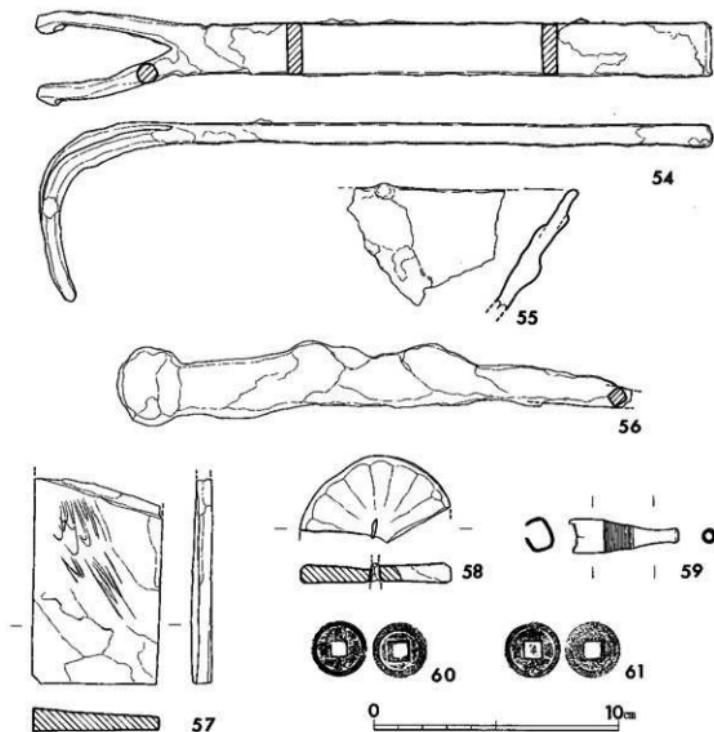
53は大形の瓦質土器壺肩部である。外面には丸山系の格子タタキが入っており、内面はハケメである。胎土中には8mm人までの長石を含んでいる。

以上の時期は、46・47が古墳時代後期から奈良時代、50が奈良時代後半から平安時代初め、51～53が平安時代末から鎌倉時代のものと考えられる。48・49については近隣地域ではあまり見られない器形・調整を加えており、奈良・平安時代頃のものと考えておきたい。¹⁰

54は先端部に二又に分かれた爪をもつもので、長さ27.8cm、爪長7.3cm、茎長22.2cm、茎幅2.1cm、茎厚0.8cmである¹¹。爪の横断面形は円形、茎は長方形である。茎は端部に成形時の切断痕が残り、目釘穴が見られないことから、木柄を装着したとすれば紐などで括り付けていたものと思われる。



第72図 土師器他実測図 (1 : 3)



第73図 鉄器・磁石他実測図 (1 : 2)

55は鉄鍋の破片で分析試料 (NAK-28) である。まだら鋳鉄製で、内外面に鋸掛けがある。

56は棒状の鉄製品で、全体に酸化土砂が厚く付着しているため詳細は不明である。現状で長さ21.0cm、幅0.9cmで、先端部の断面形は方形である。

57は磁石である。一部欠損しているが、現状で長さ8.4cm、幅5.2cm、厚さ0.5～0.9cmである。よく使い込まれ表面が凹面になっており、鋭利なものでつけられた傷も見られる。

58は紡錘車である。型作りのものと思われ、径6.2cm、厚さ0.5～0.7cmである、中央には鉄製の扁平な軸があり、紡錘車の部分を挟んで角度が90°変っている。

59は銅製のキセル吸口である。現状で長さ4.5cm、径0.5～1.4cmである。

60・61は寛永通宝で、ともに寛文年間以降作られた新寛永である。

第3表 土器觀察表1

| 番号 | 地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 調整の特徴 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 備考 |
|-------|----------------|------|----|------------------|------------------------------|----------------|---------------|-------------|------------|
| 9-1 | 8H | 縄文土器 | 深鉢 | | 例粗いナデ 鉗ナデか | 3mm大の長石・石英を含む。 | 例灰褐色 鉗灰褐色 | 普通 | |
| 9-2 | 8G | 縄文土器 | 深鉢 | | 例条痕の後、ミガキ 鉗ケズリの後、ミガキ | 4mm大の長石・石英を含む。 | 例灰褐色 鉗黑褐色 | 良好 | |
| 20-1 | 12N | 須恵器 | 蓋 | 口径 9.2 | (内・外)回転ナデ (外面部)ヘラ切り痕か | 2mm大の長石を含む。 | 淡青灰色～暗青灰色 | 良好 | 外面に灰をかぶる。 |
| 20-2 | 12N | 須恵器 | 蓋 | 口径 8.4 器高 2.9 | (内・外)回転ナデ (外面部)ヘラ切り痕か | 密 | 青灰色 | 良好 | |
| 20-3 | 玄室 奥壁 | 須恵器 | 环身 | 口径 9.6 器高 3.5 | 鉗回転ナデ 鉗回転ナデ | 密 | 暗青灰色 | 良好 | |
| 20-4 | 石室 前庭 | 須恵器 | 高坏 | 口径14.5 器高10.8 | (内・外)回転ナデ (内面部)ナデ | 4mm大の長石・石英を含む。 | 淡青灰色～淡褐色 | 普通 (一部鉗) | 2方向にスカシあり。 |
| 20-5 | 石室 漢道 8層 | 須恵器 | 高坏 | 脚径11.3 | 鉗不明 鉗不明 | 7mm大の長石を含む。 | 例淡墨灰色 鉗灰白色 | 不良 | 環部内面剥離 |
| 20-6 | 12N | 須恵器 | 高坏 | 脚径10.9 | 鉗回転ナデ 鉗回転ナデ | 3mm大の石英を含む。 | 灰白色 | 不良 | |
| 20-7 | 12N | 須恵器 | 甕 | 口径10.8 器高14.0 | (内・外)回転ナデ (外底部)回転ヘラケズリ | 2mm大の長石・石英を含む。 | 青灰色 | 良好 | 回転方向右回り。 |
| 20-8 | 12N | 須恵器 | 甕? | | 例平行タキの後、 カキメ 鉗同心円状あて具痕 | 1mm大の長石を含む。 | 青灰色 | 良好 | 焼成時の歪み著しい。 |
| 69-1 | 8L | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ナデまたはミガキ、 羽状縞文 鉗ナデ | 4mm大の石英を含む。 | 暗灰褐色 | 良好 | 外面に黒斑あり。 |
| 69-2 | 8Q | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ナデ 鉗ナデ | 3mm大の砂粒を含む。 | 鉗黑褐色 鉗灰褐色 | 良好 | |
| 69-3 | 8Q | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ケズリ 鉗ナデ | 4mm大の石英・長石を含む。 | 茶褐色 | 良好 | |
| 69-4 | 8Q | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ナデ 鉗ナデ | 1～2mm大の長石を含む。 | 灰褐色 | 良好 | |
| 69-5 | 9O | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ナデ 鉗ナデ | 5mm大の長石・石英を含む。 | 例淡褐色 鉗褐色 | 良好 | |
| 69-6 | 15O | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ミガキ 鉗ミガキ | 3mm大の長石・石英を含む。 | 暗褐色 | 良好 | |
| 69-7 | 8Q | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ナデ 鉗ナデ | 3mm大の長石・石英を含む。 | 例灰褐色 鉗暗茶褐色 | 良好 | 外面に煤が付着。 |
| 69-8 | 6H | 縄文土器 | 深鉢 | | 例条痕か 鉗条痕か | 2mm大の長石・石英を含む。 | 暗茶褐色 | 普通 | |
| 69-9 | 17O | 縄文土器 | 深鉢 | | 例条痕 鉗指頭圧痕 | 5mm大の石英を含む。 | 黄灰褐色 | 普通 | |
| 69-10 | 6L | 縄文土器 | 深鉢 | | 例条痕の後、ナデか 鉗ナデ | 3mm大の長石を含む。 | 例灰褐色 鉗淡褐色 | 良好 | |
| 69-11 | 6N | 縄文土器 | 深鉢 | | 例ケズリ 鉗ナデ | 2mm大の石英を含む。 | 黄灰褐色 | 普通 | |

第4表 土器觀察表2

| 番号 | 地點 | 種別 | 器種 | 法縁(cm) | 調整の特徴 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 備考 |
|-------|------|------|----|--------|--------------------------------------------------------------|-----------------|-----------------|----|-------------------|
| 69-12 | 16O | 縄文土器 | 深鉢 | | (例)ミガキ 内ミガキ | 4 mm大の石英を含む。 | 例)黒褐色 例)暗灰褐色 | 良好 | |
| 69-13 | 9 O | 縄文土器 | 深鉢 | | 例)条痕 内ナデ? | 4 mm大の石英を含む。 | 灰褐色 | 普通 | 焼成後、外側から穿孔する。 |
| 69-14 | 6 O | 縄文土器 | 深鉢 | 底径 8.6 | 例)ナデ 内ナデ | 4 mm大の長石・石英を含む。 | 例)黄灰褐色 例)灰褐色 | 普通 | |
| 69-15 | 7 J | 縄文土器 | 深鉢 | 底径 4.4 | 例)ケズリ 内ナデ | 4 mm大の長石を含む。 | 灰褐色 | 良好 | |
| 69-16 | 6 N | 縄文土器 | 浅鉢 | | (例)ミガキ 内ミガキ | 2 mm大の砂粒を含む。 | 黑褐色 | 良好 | 黒色磨研系土器 |
| 69-17 | 15 G | 縄文土器 | 浅鉢 | | (例)ミガキ 内ミガキ | 2 mm大の石英・長石を含む。 | 例)黒褐色 例)暗茶褐色 | 良好 | 黒色磨研系土器。外側黒斑あり。 |
| 69-18 | 9 N | 縄文土器 | 浅鉢 | | (例)ミガキ 内ミガキ | 1 mm大の石英を含む。 | 黒褐色～暗褐色 | 良好 | 黒色磨研系土器 |
| 69-19 | 6 O | 縄文土器 | 浅鉢 | | (例)ミガキ、下半ケズリ 内ミガキ | 2 mm大の石英を含む。 | 黒褐色 | 良好 | 黒色磨研系土器 波状口縁 |
| 71-30 | 15 P | 弥生土器 | 壺 | | (例)ミガキか 内ミガキ | 4 mm大の石英を含む。 | 暗褐色 内灰褐色 | 普通 | |
| 71-31 | 13 P | 弥生土器 | 甕 | | (口縁内外)横ナデ (体部内外)ハケメ | 4 mm大の石英を含む。 | 暗褐色～暗灰褐色 | 普通 | 外面とも下半が剥離。使用によるか。 |
| 71-32 | 13 P | 弥生土器 | 甕 | | 例)横ナデ、ハケメ 内ナデ | 4 mm大の石英・長石を含む。 | 淡茶褐色 | 普通 | 外面に黒斑あり。 |
| 71-33 | 6 J | 弥生土器 | 甕 | | (例)ナデ、一部指頭压痕残る。 内ナデ | 2 mm大の砂粒を含む。 | 褐色 | 良好 | |
| 71-34 | 6 J | 弥生土器 | 甕 | 口径14.0 | (口縁内外)横ナデ (体部内外)難かいハケメ、ナデ | 7 mm大の砂粒を含む。 | 暗褐色 | 良好 | |
| 71-35 | 7 L | 弥生土器 | 甕 | | 例)ナデ 内ナデ | 2 mm大の砂粒を含む。 | 褐色 | 良好 | |
| 71-36 | 6 O | 弥生土器 | 壺 | 底径10.0 | 例)ナデ | 4 mm大の石英・長石を含む。 | 淡褐色～淡赤褐色 | 良好 | |
| 71-37 | 7 L | 弥生土器 | 壺 | 口径19.0 | 例)横ナデ 内横ナデ | 密 | 淡黃褐色 | 普通 | |
| 71-38 | 12 P | 弥生土器 | 甕 | 口径17.5 | (口縁内外)横ナデ 例)上半ハケメ、下半ハケメの後ミガキ 内)上半ハケメの後ミガキ、下半ケズリの後、ミガキ | 4 mm大の石英・長石を含む。 | 黄褐色 | 良好 | 外面に黒斑あり。 |
| 71-39 | 12 P | 弥生土器 | 甕 | 口径21.0 | (口縁内外)横ナデ 例)上半ハケメの後ナデ、下半粗いミガキ 内)上半ケズリ後ハケメ、下半ケズリ、または後ナデ | 2 mm大の砂粒を含む。 | 灰褐色～淡黒色 | 良好 | 外面から焼成後、穿孔する。 |

第5表 土器観察表3

| 番号 | 地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 調整の特徴 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 備考 |
|-------|--------------|------|----|---------|--------------------------------------------------|------------------|-----------------|------|----------------|
| 71-40 | 6 N | 弥生土器 | 壺 | 口径21.6 | 例横ナデ 例横ナデ | 4mm大の石英を含む。 | 褐色 | 良好 | 外面口縁下に黒斑。 |
| 71-41 | 6 N | 弥生土器 | 壺 | 口径19.2 | 例横ナデ 例横ナデ | 4mm大の砂粒を含む。 | 暗褐色 | やや不良 | |
| 71-42 | 17O | 弥生土器 | 壺 | 底径 4.2 | 例)上半ハケメの後ミガキ、下半ミガキ 例)上半ミガキ、下半不明 | 2mm大の石英を含む。 | 灰褐色～黒褐色 | 良好 | 内面に炭化物が付着。 |
| 71-43 | 6 P | 弥生土器 | 高环 | | (口縁内外) 横ナデ (口縁内外) ミガキ | 2mm大の石英を含む。 | 例)灰褐色 例)淡黄褐色 | 良好 | |
| 71-44 | 6 Q 6 P | 弥生土器 | 高环 | | 例)不明 例)不明 | 3mm大の石英を含む。 | 黄灰褐色 | 普通 | |
| 71-45 | 7 M | 弥生土器 | 壺 | 口径20.5 | (口縁内外) 横ナデ (例)ミガキ、ケズリ | 3mm大の長石・石英を含む。 | 茶褐色 | 良好 | |
| 72-46 | 8 Q | 土師器 | 壺 | 11径33.3 | (口縁内外) 横ナデ 例)粗いハケメ 例)ケズリ | 5mm大の石英を含む。 | 黄褐色 | 良好 | 外面に黒斑あり。 |
| 72-47 | 15 O | 土師器 | 壺 | 口径25.0 | (口縁内外) 横ナデ 例)ケズリ | 5mm大の石英・長石を多く含む。 | 例)灰褐色 例)褐色 | 良好 | |
| 72-48 | 15 G 16 O | 土師器 | 壺 | 口径30.0 | (口縁内外) 横ナデ 例)タタキ 例)ケズリの後、ナデ | 5mm大の石英・長石を含む。 | 例)灰褐色 例)褐色 | 良好 | 外面頸部に黒斑あり。 |
| 72-49 | 15 P | 土師器 | 壺 | 口径23.0 | (口縁内外) 横ナデ 例)タタキ 例)ナデ | 5mm大の砂粒を含む。 | 褐色 | 良好 | |
| 72-50 | 6 P | 須恵器 | 壺 | 底径 7.6 | (底部外面) 回転糸切り 後、未調整 (例)回転ナデ (例)回転ナデの後、ナデ | 1mm大の砂粒を含む。 | 暗青灰色 | 良好 | |
| 72-51 | 15 O | 瓦質土器 | 鉢 | | 例)不明 例)不明 | 2mm大の石英を含む。 | 灰白色 | 不良 | 風化のため 調整不明。 |
| 72-52 | 6 G | 瓦質土器 | 鉢 | | 例)指頭圧痕 例)ハケメ | 2mm大の石英を含む。 | 淡黑色 | 普通 | |
| 72-53 | 14 P | 瓦質土器 | 壺 | | 例)格子目タタキ 例)ハケメ | 8mm大の長石を含む。 | 例)暗灰色 例)淡黑色 | 良好 | |

第6表 石器観察表

| 番号 | 地点 | 種別 | 石 材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備 考 |
|-------|-----|-------|-----------|--------|-------|--------|--------|------|
| 9-3 | 8G | 打製土掘具 | 安 山 岩 | (11.1) | 8.1 | 1.8 | 210.4 | 基部欠損 |
| 9-4 | 8H | 打製土掘具 | 泥 岩 | 11.2 | 7.2 | 2.0 | 185.6 | |
| 9-5 | 8G | 打製土掘具 | 流紋岩質凝灰岩 | 12.4 | 7.4 | 3.5 | 332.6 | 未製品か |
| 9-6 | 7G | 磨 石 | ひ ん 岩 | 13.5 | 11.0 | 7.5 | 1848.9 | |
| 70-20 | 7P | 石 錘 | 安 山 岩 | 1.7 | 1.2 | 0.3 | 0.5 | |
| 70-21 | 8G | 打製土掘具 | 凝灰質泥岩 | (9.4) | 8.2 | 2.3 | 199.6 | 基部欠損 |
| 70-22 | 7G | 打製土掘具 | 凝灰質泥岩 | (6.7) | 6.5 | 1.8 | 146.4 | 刃部欠損 |
| 70-23 | 8G | 磨製石斧 | 結 晶 片 岩 | 9.6 | 4.6 | 2.5 | 172.7 | |
| 70-24 | 6J | 磨製石斧 | 結 晶 片 岩 | (8.0) | 5.1 | 3.4 | 228.8 | 基部欠損 |
| 70-25 | 15P | ? | 三郡塙基性片岩 | 15.5 | 6.5 | 5.5 | 1187.2 | |
| 70-26 | 17O | 磨 石 | 流紋岩質凝灰岩 | 7.6 | 7.6 | 6.9 | 510.4 | |
| 70-27 | 8O | 磨 石 | 石 英 閃 緑 岩 | 12.0 | 9.0 | 5.5 | 936.4 | |
| 70-28 | 16O | 石 錘 | 安 山 岩 | 11.8 | 8.4 | 2.6 | 374.6 | |
| 70-29 | 8K | 線 刻 碠 | 安 山 岩 | 6.2 | 3.9 | 1.7 | 47.5 | |

第8章 まとめ

中原遺跡では、縄文時代後期中葉～晩期、弥生時代前期中葉～後葉・中期後葉～後期前葉、古墳時代後期後葉、奈良時代後半～平安時代初め、平安時代末～鎌倉時代、江戸時代末の遺構・遺物が検出されている。しかし、遺跡が立地する河岸段丘が低く神戸川に近いためか、これまで見てきたように遺構・遺物の分布密度は低く、断片的な資料が多い。

ここではその中で注目される古墳と大鍬冶場跡について若干の位置づけを行ってまとめたい。

第1節 古 墳

1. 墳 丘

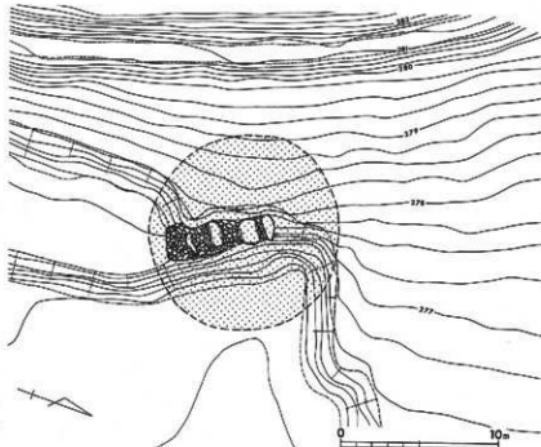
墳丘は遺存状態が良好ではなく、盛土の一部が残っていると考えられるのは、横穴式石室西側の斜面のみである。盛土の範囲は、石室の位置から西へ5mのところまであり、石室を中心にこれを東側に反転すると、12m程度の規模をもつものと考えられる。

墳形についても判然としないが、墳丘測量図を見ると石室の北西側の部分に、盛土と周辺地形の境と見られる谷状の地形変化が僅かに弧状を呈していることが観察することができる。これを基に盛土範囲と合わせて墳丘を復原したのが第74図で、径12mの円墳を想定した。

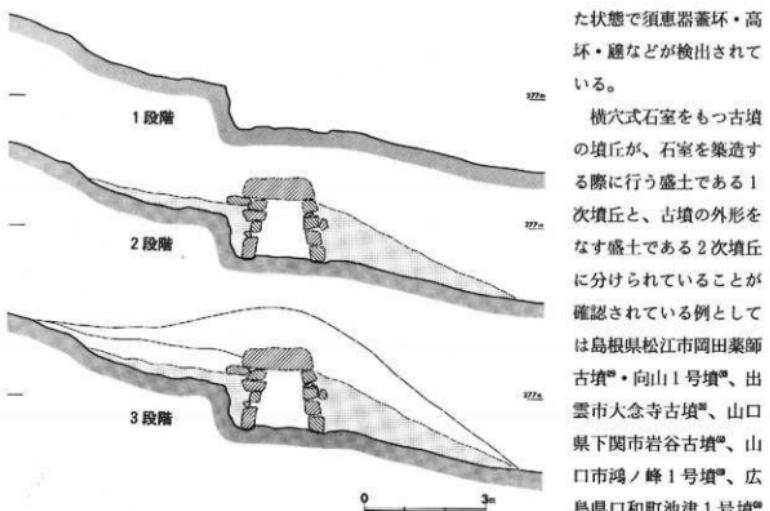
古墳の築造工程については、遺跡の保存を前提とした調査を行ったので十分な資料が得られていないわけではないが、墳丘内より出土した須恵器などいくつかの手がかりがある。(第75図)

第1段階は、古墳を築造する場所を定め、横穴式石室の掘り方を掘る段階である。石室の掘り方は斜面に対し平行に設けられていることから、段状の平坦面になると考えられる。一般的には横穴式石室は斜面に対し直交して築かれることが多いが、中原古墳がこうした配置をとることは、この場所に南向きに開口することを意識して築造されたためと思われる。石室の掘り方は丘陵側では深さ1.1mあり、石室の築かれる位置は比較的安定した三瓶浮布降下軽石層の上面に達している。

第2段階は、盛土をしながら横穴式石室の石材を積み上げる段階である。盛土が石室天井石を覆っていたかどうかは不明であるが、本来は石室は粘土で被覆され、これを覆う程度の盛土があったことも想定される。また、この段階で何らかの祭祀が行われたようで、石室南西側で意図的に割られ



第74図 墳丘想定復原図 (1 : 300)



第75図 古墳築造工程模式図（1：120）

の多くで1次墳丘の段階に須恵器を用いた祭祀が行われていることが確認されている。

第3段階は、1次墳丘の上に2次墳丘を盛土し、古墳の外形が造られる段階である。墳丘は径12mの円墳であったものと考えられ、周溝など地山を掘り込んで墓域とするような施設は見られなかつたが、石室側に盛土を行うことで丘陵斜面との間が周溝状になっていたものと推定される。

2. 横穴式石室

横穴式石室は、割石・自然石造りのもので、現状で全長5.2m、玄室長3.0m、最大幅1.35m、高さ1.5mである。石室の平面形は袖石を持たない無袖式で、石室中央部の幅が広く胴張りをもっている。

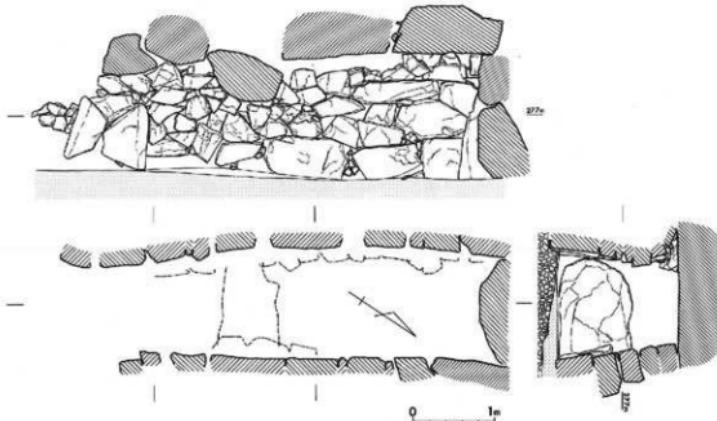
石室の遺存状況は、西側壁は比較的良好であるが、東側壁、奥壁、天井石は石材が抜き取られたり、動かされたりしており、変形が著しい。これを復原配置して見たのが第76図である。奥壁は現在残る石材の高さが0.9mほどしかなく、さらに1～2段石材が積まれて、天井石を受けていたものと思われる。また、東側壁の奥壁に接する部分は石材が動かされていたが、これを復原配置すると奥壁部の幅は1.3mとなる。

天井石は櫛石状に一段下がった位置に置かれる1枚を除いては原位置を動かされていたが、2枚が現場に残されていた。これらだけでは天井石が不足することから、本来はあと2枚程度、櫛石を含め計5枚が架けられていたものと推定される。櫛石は原位置よりもやや下がっている感もあるが、立面形では羨道と玄室を分けるもので、両者を区別する意識が窺える。

無袖式の横穴式石室は本古墳が所在する島根県東部山間部をはじめ、島根県西部や広島県など広い地域に分布している。広島県側に分布するこの種の石室については、6世紀後半から末にかけて導入された片袖式の畿内型石室が、袖部の省略化や玄室の狭長化など、石室の諸要素を失っていく段階で7世紀初頭頃から盛行るとされ、その中でも胴張りをもつものは7世紀第1四半期を中心と考えられている。³⁾

た状態で須恵器蓋・高壇・鏡などが検出されている。

横穴式石室をもつ古墳の墳丘が、石室を築造する際に行う盛土である1次墳丘と、古墳の外形をなす盛土である2次墳丘に分けられていることが確認されている例としては島根県松江市岡田薬師古墳⁴⁾・向山1号墳⁵⁾、出雲市大念寺古墳⁶⁾、山口県下関市岩谷古墳⁷⁾、山口市鴻ノ峰1号墳⁸⁾、広島県口和町池津1号墳⁹⁾などで知られており、そ



第76図 横穴式石室復原図 (1 : 60)

中原古墳と同様に無袖式でありながら、天井石より一段下がった楣石により羨道と玄室を区分する石室構造をもつものはあまりないが、広島県三良坂町野曾原6号墳⁹が知られている。また、袖部の省略化が進んでいく過程では、広島県吉田町塚ヶ鼻1号墳¹⁰のように両袖式であるが天井石は袖部で段をなさないものもあり、ともに石室が袖部の省略化という変遷を遂げる中で成立したものと思われる。

3. 時期

出土遺物のうち、古墳の築造時期を示すと考えられるのは、1次埴丘に置かれたと見られる蓋坏(第20図-1)・蓋(2)・高坏(6)・趨(7)である。また、玄室裏壁付近出土の蓋坏(3)や前庭部の高坏(4)、羨道部の高坏(5)については初葬時のものか追葬時のものかは出土状況からは判断できない。

これらの遺物の特徴は、蓋坏は口径が小さく回転ヘラケズリが見られること、高坏は坏部が丸みを帯び透し穴が切れ目またはないこと、趨は器形がやや寸胴で肩部に連続刺突文がないなどの特徴をもっており、すべて山本清氏の須恵器編年¹¹IV期に含まれるものである。また、出雲地域の須恵器を再検討した大谷見二氏の編年によれば¹²1・3は蓋坏A 8型、4は低脚無蓋高坏A 6型、5・6は低脚無蓋高坏A 7型、7は趨A 7型に分類される。氏による諸型式の併行関係では低脚無蓋高坏A 7型と趨A 7型は出雲5期に属するものとも見られるが、1次埴丘に置かれた遺物は一括性が高く時期差はないと考えられるので、すべて氏の出雲6A期に属するものと思われる。

これは古墳時代通有の蓋坏の径が縮小した小形蓋坏の段階であり、身と蓋のかえりが逆転し蓋につまみがつく蓋坏が出現する直前の段階である。敢えて、実年代を与えるとすれば7世紀第2四半期に中心を置くものと考えられる¹³。

横穴式石室は、胴張りをもったり、楣石をもつなど無袖式石室の中ではやや古い要素を留めているが、以上の遺物の検討結果よりすれば築造時期は7世紀第2四半期と見みられる。また、追葬の有無については遺物からも不明と言わざるを得ない。

4. 志々地域の後期古墳

志々地域は神戸川中・上流域では比較的まとまって古墳が見られる地域である。古墳はいずれも集落が営まれていた河岸段丘やその周辺に分布しており、背景となる地域がほぼ推定できる。

比丘尼塚古墳は⁶、大字八神に所在するもので、八神集落より南西側の河岸段丘上に位置している。未調査のため詳しいことは不明であるが、横穴式石室を内蔵した古墳で、墳丘は径13mほどの円墳とされ、高さは現状で1.5mである。墳丘の東から北側には幅5mの崩溝が巡っている。

石室は全長7.5m、奥壁幅1.6m、石室入口幅1.1m、高さは現状で1.6mである。平面形は玄室と羨道の区別がない無袖式を呈しており、南西方向に開口している。各壁の状況は土砂に下半部が埋もれているため詳細不明であるが、奥壁は大きな一枚石を据えて、側壁との間隙を小形の石材で補っている。また、側壁は東側壁の奥壁部分で腰石らしい比較的大形の石材が使われていることが分かり、その上に3段横方向に日地を通しながら石材を積み上げている。天井石は5枚が架けられており、奥壁から石室入口に向かってやや低く傾斜している。時期については無袖式で狭長な平面形をもつことから7世紀前半代を想定しておきたい。

門古墳群は⁷、大字志津見に所在するもので、堅穴系横口式石室を有する2基の古墳が確認されている。同一段丘上には集落遺跡も存在するが、時期的に重なっているかどうかは不明である。とともに石室のみ検出されており、墳丘は明らかになっていない。

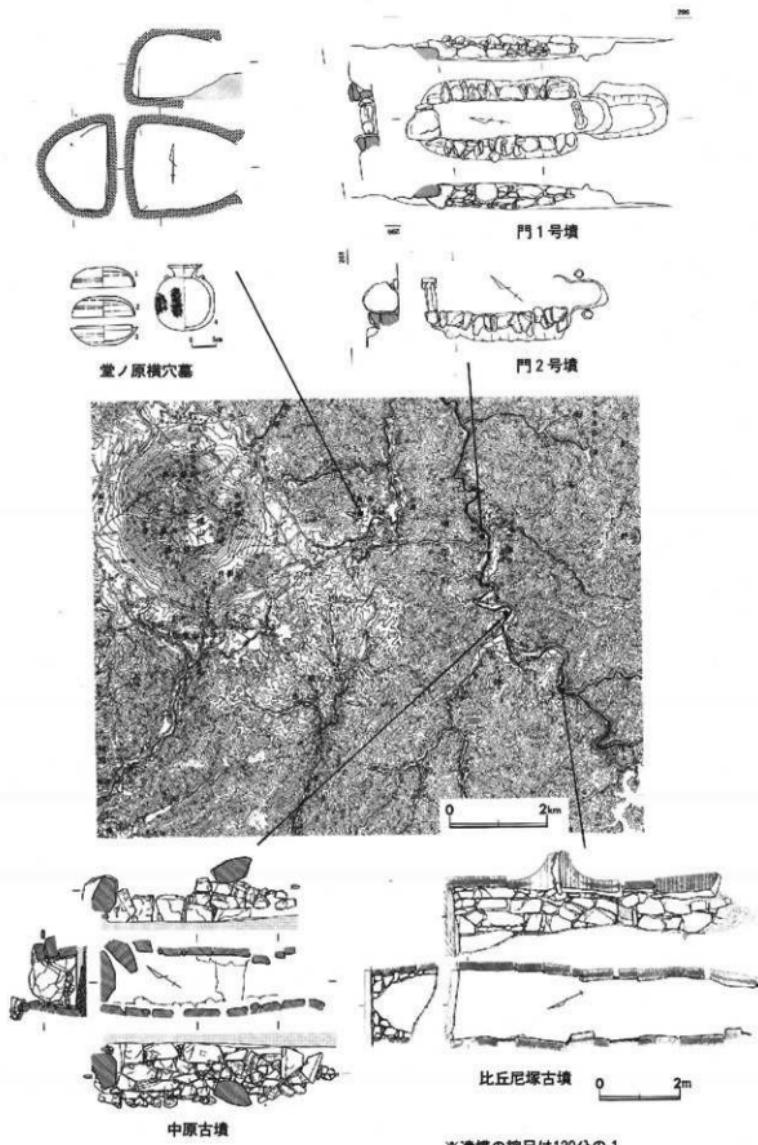
1号墳は舌状に張り出した墓道をもつ墓坑の中に石室が築かれている。石室は長さ3.3m、幅0.9m、高さは現状で0.6mである。平面形は無袖式で、奥壁は扁平な石2~3段程度小口積みにしたものと思われ、両側壁は腰石の上に2~3段に積まれている。2号墳も舌状に張り出した墓道をもつ墓坑の中に石室が築かれている。石室は長さ3.2m、高さは現状で0.9mである。平面形は無袖式で、奥壁は扁平な一枚石を立てて、側壁は腰石上に2~3段に積まれている。

門古墳群の石室は、とともに緩やかに上がる墓道を備えた墓坑の中に築かれた堅穴系横口式石室である。無袖式の堅穴系横口式石室は山陰では伯耆東部、鳥取県東伯郡地域に分布しており、時期的には6世紀後半から7世紀初めにかけて営まれたことが明らかになっている⁸。報告書では前庭部から出土したという長頸瓶からは7世紀後半という年代が与えられているが、石室の系譜の問題を含め再検討の必要がある。

堂ノ原横穴墓⁹は、大字角井に所在するもので、なお周辺に複数基存在する可能性がある。

横穴は玄室のみ遺存しており、現状で長さ2.5m、幅2.2m、高さ1.55mである。天井の形態は判然としないが、断面三角形または丸天井になるものと思われる。出土遺物としては、須恵器蓋壺・提瓶があり、6世紀後葉から末に営まれたものと考えられる。

以上、志々地区の後期古墳を概観したが、その中では八神の比丘尼塚古墳と中原古墳が横穴式石室を内蔵している点、石室の規模が大きい点で周辺地域のものに優る内容を備えている。特に、比丘尼塚古墳は墳丘規模こそ小さいが、全長7.5mに及ぶ石室を有しており、神戸川中・状流域では屈指の古墳ということができる。角井の堂ノ原横穴墓や志津見の門古墳群は時期的には先行するものと考えられるが、内容・規模等から考えるとその地域の集落が背景にあると見られる。これに対し、比丘尼塚古墳と中原古墳はともに森遺跡など当地域における中心集落が存在した八神を囲むように南北に位置することから、八神を基盤とし周辺のいくつかの集落をも束ねていた村落首長墓であった可能性も考えられる。



※遺構の縮尺は120分の1

第77図 志々地区の後期古墳